

育教の兒幼



號九八第 月九 卷十四第

東京女子高等師範学校内
本曰幼稚園協會

観察の實際

菊判一三〇頁
定價金壹圓
料送(東京
市内)金六錢
其他金九錢

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に伺ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編
幼稚園談話集(四版)

菊版三五〇頁
定價金壹圓五拾錢
料送(北料市内)金六錢
地方(太・朝・海道・臺灣)
韓・滿洲)金拾五錢

定價金壹圓
料金六錢
送金一錢

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編
系統的保育案の實際(四版)
幼兒の教育(月刊)

一ヶ月金參拾五錢
一年金四圓貳拾錢
送料共送金一錢



號九・八第 幼兒の教育 卷十四 第

扉

——(次) 目——

國民幼稚園を目指して	倉橋惣三(一)
建國童話	久留島武彦(四)
兒童研究法講義(四)	松本金壽(二)
初秋に於ける幼兒の保健	廣瀬興(二)
八月の幼兒童謡	葛原しげる(元)
毎月の保育問題	上澤謙二(元)
紙芝居の生かし方	砥上峰次(四)
フレーベル賞童謡の作曲と私の追憶	(哭)
九月の保育	宅孝二(哭)
蔬菜栽培と幼兒	及川ふみ(五)
幼兒の母	松原ユキ子(西)
歸命毗盧遮那佛	(哭)
ハイディ――ヨハンナ・スピリ原作	曾根保(西)
	津田芳雄譯(西)
國民學校と國民幼稚園(二)	倉橋惣三(克)

日本育紙販賣店

イヨナイルキクシノタ
カミシハイ・六巻一組・十圓
曲辰報紙期詫兒所・幼稚園へサービス

マーテの巻各

うせましくよ仲に結一なんみ *

よく働もモドコ *

キをしらく。も足も手うせましにイレキ *

うせまきゆてしとンチ

作名いしのたくし美ならやるすりとつら *

眞寫刷色 スーニニのモドコ *

イバシミカ工手るすでミガリハ・エリス *

*

書で品作たい描てしに主を物動い愛可

までのもるすを導指活生・練訓語

((墨道グロタカ))

館會育教橋ツ一區田神市京東

本日育教芝居協會

番〇三五二六京東替振

規 定

- ・全六巻ヲ一組トシ十月早々
- ・一齊發刊 取マトメ發送
- ・印刷ハ石版色制
- ・サイズハ新聞紙四ツ切型
- ・枚數ハ各十六枚一二四枚迄
- ・(ニユースハ十枚)
- ・一組十圓 送料不要
- ・保育紙芝居取扱ノ業進呈
- ・前金不要、ハガキデ申込マ
- ・レタシ、九月末マテ受付
- ・標準型 舞臺
- ・特製型 別圓
- ・送入料 送料并入錢 四圓五十錢



展覽會の繪に戦争畫が多くなつた。幼兒はどうから、戦争美術の大家である。藝術は花鳥風月に限らないとなつて、現實生活からの取材が多くなつた。この點でも幼兒は先驅者である。この繪なんか、オカアサンノオセントラクと題して、斷然新傾向を代表し、舊派の審査員なんか、うつかりするも見落しそうな傑作である。幼兒は平氣で新らしい。

(倉橋生)

國民幼稚園を曰ぎして

倉 橋 惣 三

小學校が國民學校になる時は、幼稚園も國民幼稚園にならなければならない。いふよりも、もつて適確には、日本の國民普通教育を施すところが國民學校である以上、日本の就學前保育機關は國民幼稚園であるのである。

何故に小學校を國民學校とあらためるか。勿論、名稱の改正が主點ではないが、小學校令の改正の出發と結論と、從つて當然その改正内容實質の中心精神とが、此の名稱に於て、最もよく表現せられるからに他ならない。「皇國ノ道ニ則リテ普通教育ヲ行ヒ國民ノ基礎的練成ヲナス」を以て目的とする限り、それは對象の普遍性からいつても、目的の究極性からいつても、眞に國民學校といはるべきものである。而して、この國民學校に前驅する就學前保育は、全く同じ意味で、設置の出發と結論と、その當然の内容實質の中心精神に於て、國民幼稚園である。「皇國ノ道ニ則ル」ものであり、「國民ノ基礎的練成」に、より基本的に參るものである。

從來の我國の幼稚園が、この皇道精神と國民練成の意圖の外にあるものでなかつたことは、從來の我國の小學校がそうであつたと同一である。しかも、小學校が國民學校とならなければならぬと同一の理由は、幼稚園にあるといつていゝであらう。教育の強化は意識の強化により、自覺の焦點の聚約による。單なる幼稚園と國民幼稚園との差も亦、そこにある、そこが大切なのである。

單なる幼稚園といふ用語は意をつくさないが、幼稚園は小學校に比し、確かに二つの點で、觀念上の特色があつたと見られ得る。一は、フレーベルに創まるといふ、起原觀念の強さであり、二は、學校教育以前の愛育機關といふ、人道感情の豊かさである。而して、この二つは、それ自らに於て、何等の誤りも不都合もあるものではない。確にフレーベルに創案せられ、今でも尙彼れに學ぶべきものが多くある。又、確に兒童愛を以て豊かなる推進力とするところがあつて、それ

なしに保育は行はれないといつていい位もある。即ち、幼稚園そのものとして、この二つの觀念上の特質を排すべきではない。しかし、これは、幼稚園の觀念であつて、これだけは日本の幼稚園は生れない。日本の幼稚園は、日本國民練成の教育の第一段階を受持たうとする、國家的精神からのみ生れる。この精神なしには、たゞ幼稚園といふ施設と方法とを試みるに止まつて、日本の幼稚園の特性の自覺に稀薄なるところなししない。幼稚園の動機が心理的、人道的、社會的方面から多く説かれて、國民的必須を感じられることが、聊か弱かつたのも、この故であつたかも知れない。近來に於ては、國民的必須が強調せられ始めたけれども、それは人口問題とか國民保健とかからの必須に止まつて、國民練成の眞の教育的意義に於て、その必須性を確信せられることはまだ足りないかも知れない。國民幼稚園はこゝに力強く立脚せんとするのである。

○

國民幼稚園の中心意義以上の如しきすれば、その國民的普遍性も亦、當然の結論である。國民的普遍といふのに二つの意味がある。國民的普及といふこと、國民的無差別といふことである。前者に對するものが、幼稚園義務制の主張であり、後者に對するものが、幼稚園と保育所との關係に關する考慮である。論者はこゝに此の二つの問題に就て、實際的制度技術の論議にまで進まうとはしない。たゞ、大本は明らかである。國民幼稚園の觀念そのものゝ中に定まつてゐる。國民小學校が普及と無差別である全く同一理由の上に、國民幼稚園はその本質を固持する。幼稚園義務制が即時實現せらるべき否さに拘らず、その方針は動かない。幼稚園と保育所との從來の社會的多様性は、素より大に周到であり不劃一であるべきであるとして、それが國民就學前教育としての、國家の考慮はそこまでも一元であるを至當とする。官省なり個人なりが、いろいろの動機から學齡前幼兒保育に留意し、その留意の出發に基いて、その名を異にし、その管掌を別にし、その結果、形態と方法との多少の相違が、機關そのものとして別種のものとせられるに至つた時代は暫く措く。國民幼稚園は日本の幼兒に亘つて、一つあるのみである。

論者は、國民幼稚園の實質から、その普遍性に論及した。しかも、實際問題としては、この普遍性の確認こそ、國民幼稚園の實體的實現である。國民學校と雖も、それがいくら國民的本義を内容實質とすれば、國民の一部分にのみ設けられ、又本質上の差別が行はれたりしたとすれば、それは、決して國民學校ではあり得ない。國民幼稚園も亦、理論上の

主張ではなくて、實現の要求である。

○
この實現のために、當局は、教育審議會の答申を、それに反響する識者の意見を、もつとも凝視しなければならない。教育審議會の第一答申の中から、先づ國民學校を取りあげた以上、その當然の關聯に於て、國民幼稚園が、速かに考慮せられなければならない順序である。

又、國民幼稚園としての考慮は、從來往々その觀があつた如く、幼稚園關係者のみの關心でなく、全教育界の問題でなければならない。我國では、さうも、教育界が分れて狹い關心に偏り過ぎる。日本の國民教育の完成のために、問題は就學前から考へ始められることが、教育界全體の常識にならなければならないのである。

しかし、なんといつても、今直ぐ不斷の關心を此の問題に持つ位置にあるのは、幼稚園關係者である。そのわれわれが、苟も、國民幼稚園の理想に、低いところあり、狭いところあり、弱いところあつたりしては、何を以て天下を動かさう。われら同人の間には、そのそれゆくの立場から、多少異なる動機を以て此の教育に入つたものもあるであらう。現に、各種の方向から興味を此の教育に聚注してゐるものもあるであらう。それは皆よろしい。しかし、それだけであつてはならぬ。況んや、それが故に、國民幼稚園の意識と自覺さが、教育焦點の外に霞んではならない。性來の兒童愛から來たものも、發達心理の教育原理から來たものも、宗教的人道主義から來たものも、社會現實の憂慮から來たものも、國民體力の尊重から來たものも、皆われらの幼稚園人たるに於て同志である。しかし、その、それゆくの觀點は觀點として、日本就學前幼兒のための根本動機に於て一致し、一貫するところがなくてはならない。その一貫一致の動機から生れた國民幼稚園としての本質的同一性の上に立つて、その幼兒の條件に基いて適切なる多様が生れ、その教育者の獨創に基いて活潑なる多様が生れ、異なるところを以て相補ひ、足らざるところを互に學び、日本の幼兒の一人々々に對して、缺くるところなく、誤るところなき、就學前の教育を完成させてやればいいのである。それは、施設と方法の工夫である。設立の目的は一途に之れ國民幼稚園たることのみが日本の幼稚園である。全國幼稚園關係者は各自の幼稚園を國民幼稚園として充實し、國民幼稚園普遍の爲に相協力し、心を一つにして國民幼稚園を目指して進もうではないか。

建國童話

——講習會講演速記——

久留島武彦

久留島でございます。只今倉橋先生から大分御紹介を下さいまして、いろいろ講習の中にまで御迷惑をかけたのであります。感心したのは久留島の倉橋は違ふけれど、反対ではないといふ。これだけは私もホソミ息ついだのであります。實はこの建國童話といふものを皆様にお話するやうになりましたのは、去年から倉橋先生が私に問題をお出しになりましたて、一つ考へてみないか、さうして出来るならば保育研究科の生徒に、それを順序を立てゝ話してみないか、斯ういふやうなお言葉であつたのであります。

よりく材料を纏めて居ります内に一つテストをしてやらうといふやうな有難い思召しがあつたごみえまして、今年の紀元節にこちらの幼稚園にお招きになつて、お子様方とお母様方の前で御一緒に私の建國童話をお聴きになつて下さつたのであります。どうやら私はお話をして歸りました時に、テストにバスしたらうかごどくとして心配して

帰ります。暫くして文部省の夏季講習會にその建國童話の實地について語るやう、成るだけ實演をやれ。私はここで丁度小學校から中學にでも入つた時のやうな心持ちがしたのであります。先づこれで無事に通過して、保育科の生徒のみならず、全國の皆様方の前で語らせるに足るといふ極め札を戴いた譯であります。

そこで今日は實際のお話を致します前に少しく私にも理解を言はせて戴きたいと斯う思ふのであります。それはなぜ建國童話を求められるやうになつたか、今年の如きはラヂオの放送と言はず、或は精神總動員の一部の働きと言はず、またはパンフレット、或は雑誌、子供なきに關係したものに非常にこの建國童話、或はもう一つ高い標準で神話の翻譯、或は解説めいた材料の取扱ひ方、斯ういふのが非常に多いのであります。それを氣をつけて拜聴もし、拜見しながら、私は甚だ懸念に堪へなく思つたのは、果して

建國神話、或は童話といふものを御理解なさつてお話をなさつて居るのであらうか、どうであらうか、たゞ時代が皇紀二千六百年、神ながらの道を解くのに都合がよい。或は國體明徴といふ潮に乗る、或は總ての霊園氣がさういふものを迎へ易い、これに乗つて仕事はされて居るけれど、この乗る考の土臺になるものに果して何が故に求められ、何が故に斯ういふところへ世間が目をつけるやうになつたか、

さうして斯ういふ方面を振り返つて見るやうな心持ちになつたかといふこゝについて、私は疑ひなき能はずであります。無論、皆様方には左様なる問題は申上げる必要はないことを思ひますが、隨分放送童話なごをお聞きになりまして、貴君方が、これでいゝだらうか、斯ういふやうな話しがもつて子供に建國の精神、建國の神々の御性質が判るだらうか、或は誤らせるやうなことはないだらうか、斯ういふお疑ひを持つやうなこゝはありませんでしたらうか、少なくも私の聽き又見たところでは、たゞ時の流れに乗る、勢ひに乗るといふだけであつて、何んらの工夫もなく、ければ研究もなく、況んやこれを語らざるを得ざる心の土臺といふのを持合せて居られない、率直に古事記の昔語りの中から手あたり委せに材料を引出す、或は神話の童話化したる中から遠慮會釋なく材料を持つて来る。それが子供にさういふ影響を與へるかと申しますと、一つの例であります。

「高千穂の峯に神の御末、雲の上より天降りました」と言ふ。その説明をしますのに、斯う高千穂の峯が見え、中途に雲の繪が見えて、その下に神々がお立ちになつて居る。それを説明して居る、子供の一人が

「先生々々」

「何なんですか」

「怪我しなかつたですか」

これは我々から言へば落し嘶のやうな材料ですけれど、子供の方から言へば真剣な問題であります。これを合理化しようとするばするほゞ話をする者の方に矛盾を感じするのであります。それでもつて自分が不安な感じを持ちながらさうして子供に或る物を與へ得るか私は斯ういふところからももう一寸我々が建國の神話、もう一つ根本から言ふならば神話とはさういふ成立ちのものか、これを考へてから必要がありはしないだらうか、斯ういふことを頻りに私は左右の連中にも言ひ、少なくも子供に神話を語るならば害があつても一利がないといふ結果になりはしないかと戒めています。

まあ斯ういふ前提から今日こゝに貴君方にも一つ御相談してみたい、或は一つ伺つてみたいと思ふのは、一體なぜ

我々が神話を求めるやうになつたか、殊に建國神話を私共がなぜ語りよいやうな氣持になつたかといふことであります。これが私は重大なる問題ではないか、殊に本年の講習會は他の年の講習會とはその意味に於て意義が非常に違ふのでせう。皇紀二千六百年の文部省の講習會、これは先程も倉橋先生が仰しやつたやうに丁度國民學校といふ新しき御制定の下に我々は準備をしなければならん。これに直面して國民學校の意義といふもの、これの及ぼすところの働きから、先程御數行になつた幼稚園も、誰もがその言葉を使はんが、初めて使ひ出す國民幼稚園といふやうなもの意義を持つやうな考を必要とするのではなかつたらうかといふお言葉の下に、いろいろ國家的といふ意味の御説明がありました。私は洵に有難いお話を私のためにお與へにつたと思ふのですが、なぜ我々は今年はさういふ方面に氣をつけなければならんか、こゝに我々は國家總動員といふものについて保育者の立場からお考へ願ひたい。總動員の必要は要するに、今日の時局を解釋し、さうしてこれを克服して行くには國家の總力戰が必要であるからであります。あらゆる力を寄せ擧げ用るなければ到底これを完成するこゝが出来ない。こゝに於て國家總力戰が必要があるから總動員をやらなければならん。總動員となるべ一部の人間ばかりではない。子供も病人も年寄も若き者も如

何なる者の力をも餘さずに集めて一つの目的に集中させる。こゝに於て初めて大きい國の力といふものを長きに亘つて持ち続けると共に完全に安心して導くことが出来る。その國家總力戰に對して私共保育者としての力を何處に揮げなければならんだらうか、こゝろがこれが時々私は誤解されるものぢやアないかと思ふのは、この國家總力戰を基調としたる總動員の精神的現れが或る地方の新聞を見て居りますと、幼稚園のおやつを保姆さん達が相談をして、これを一ト月分集めて、おやつをやめて、これを軍資金といふやうな意味で貢納して、これは大變結構なこゝだといふやうになつたのは、或る地方の新聞に出て居りました。私は何んといふ穿違へから恐しい總力戰を發揮したものだらう、幼稚園のおやつをその幼稚園が家庭に代つてやるといふやうになつたのは家庭にそれへ委せておやつを喰べさせて居るが、或る地方の新聞に出て居りました。私は何んといふ穿違へから恐しい總力戰を發揮したものだらう、幼稚園のおやつをその幼稚園が家庭に代つてやるといふやうな危険からして家庭は一切幼稚園にお委せして、幼稚園で適當なこゝ思ふものを――發育を幫助し、健康のために宜しいと思ふものを――おやつとして適當な時間にお與へ願ひたい。さうすれば家庭に歸つて不規則な、分量も決らないおやつをやるより子供のためにも宜しいからといふ家庭の信賴を受け幼稚園へおやつの經費として毎日子供に持たせて来る

か、或は前に十日分十日分持たせて来る、その金を一つ軍資金に獻納しようといふので一ヶ月分集めて何圓何十錢をその地方の聯隊區司令部に出かけて行つて獻納し大變貢められたといふ。それは私は賞めた者が誰だつたか、連れ行つた幼稚園がさういふ幼稚園だつたか知らないが、これこそ實に言語同斷、子供の養護、子供の健康、子供に幼稚園がおやつを與へるこゝは、子供の將來の心身を健全ならしめるために今日附託を受けて居る保育者として、これは重大なる國務を遂行して居ることなのであります。所謂國家的に子供の體力の養成なり、良き習慣の養成をやつて居るのであります。それを替へて一時的の目的の前の軍資金獻納なさいふことに幼兒のおやつを缺いてまでも持つて行く、私はかゝる穿違ひが今日世間に多くあるのではなからうか、私はこれは倉橋先生が何んと仰せになるか知りませんが、私は斯様なるこゝに我々保育者としての一つの見識を持たなければならん。國家的であると同時に個性の完成であります。個性の完成を國家の目的に歸せしめるやうに我々がこれを養護するこゝが、これがこの時局に對する我々の總力戰への現れでなければならんのですなからうか、私は斯ういふ解釋から今のおやつの問題を以ての外の問題だと解釋するのであります。従つて私はこの同じ觀點から子供の心の養ひとなるこゝの、その魂を

形造る、魂を導くこゝの、このお話をいふものも矢張り二十年、三十年後に對する二つの準備として行く必要から、それにはこの建國の神話といふものが非常に必要な問題としてこゝに考へられて来ると思ふのであります。

さゝこゝが、これは違つた立場から私は皆様にもお考へ願ひたいが、一體、人をいふものは大きい時代の變化、急激なる社會の動きに出つくはします。初めは驚く、さうして疑ふ。果して斯ういふやうな大きな變化を乗切ることが出来るか、さうであらうか、やり通すこゝが出来るか、さうであらうか、こゝに於て非常に惑ふ。惑ふと同時に心弱き者は神或は佛に祈る。神社佛閣に參拜する者の多い時は必ず社會に大變動のあつた時であります。或は非常にショックを受けた時であります。然しぬ次第に平靜を取り戻下さい。ふか、落ついて考へるこゝ、これはたゞ拜むだけでは相濟まん、寄り絶るだけでは相濟まん。己れを正しうして、先づ拜む心の立場からして改めてからなればならんといふので、拜む時に茶絶ちをして拜むとか、鹽絶ちをして拜むとか、水垢離を取るとか、己れ自らを振り返つて己れが拜んで、これを受けさせられる神佛があの立場ならば、あの願を受け入れても宜しい。あの考ならば無理もないこだから、その願を許すべきだ、己れの清淨心、己れの信心の純潔さに正比例してお受けになるのではないかとい

ふ反證の元になる。こゝに於て身を責め、心を改めて御佛の心に叶ふやう、神の心に叶ふやう、信するやうになつて来る。かうなつて來るこゝろに私は人間の寔に尊さがある。こゝでもう一つ振り返つて見るこゝ、我々の祖先は斯ういふ場合にさうしたらうか、我々の國に斯ういふやうな變動が過去になかつたらうか、さういふやうな場合に我々の先祖、我々の前々の人達はさういふ工合に斯ういふ場合を乘切つたか、こゝに於て過去の歴史を調べ、或は我々の祖先のやり來つた行跡に目をつけて見る。斯ういふやうな傾向になつて來るこゝろから次第々々に我が魂の中に潜まれて居る力はさうなものであるが、我が體の中に流れて居る血潮は果してざんな血潮であるか、この事件に對し、この偉なる時局の變轉に對して、果して我々は乗切ることが出来るであらうか、過去の我々の先祖は乘切つたやうである。失敗した者もある。その失敗は斯ういふこゝろに基いたやうである。けれど、成功した者は斯ういふ立場をさつたからだ。こゝに於て大きい時局に接する人は歴史を読み始める、傳記を読み始める。それは如何にこの頃の新聞小説に歴史物語を競ふて書いて居るかといふこゝでお判りになりませう。宮本武蔵を書かれ、源頼朝を書かれ、然も小説體の題として小説日本外史などいふ堅苦しい、今までの小説の題としては珍しい、明かに歴史といふ表題まで打つたも

のまで書かれる。そこの民衆が見る娛樂機關の映畫の如きも、殊にこの社會の變遷に對して、我々の夢を破りし明治維新、あの若人達がその間をくぐりつゝも活動したといふ、維新前後の材料が多く映畫にも取入れられ、さうしてチャンバラミ一トロに言ひますけれど、あの劍劇の中に、あの中に運命を開拓して行くさいふあの維新の志士の向背が自分の心に一つの強さ、或は想像を與へて、あの調子で俺もやらう。あゝいふ工合にやつたら宜からういふ、ここに自己の満足を求める。私はその時代の姿に對しても因つて來るこゝろを探し調べるといふ必要な時機に出て來て居る。これが子供に對して私はこの二千六百年の今年、特にこの神話が求められるやうになり、何うなう神話に立ち返つて、これを材料にしなければならなくなつた原因ではなからうか、斯ういふこゝろで考へてみます、さらば神話さいふものは子供に話し易いものであるか、さうであるか、こゝで一寸神話を聊かばかり振り返つて見る必要があると思ひます。

神話さいふものは、實はこれは子供なぞに話せるものではない。極く大掴みに言つてさう言つて差支へないこ私は思ふ。非常に複雑なものであります。今日ではお亡くなりになりましたが、高木敏夫先生、日本唯一の神話學者だが、その後、松本武雄或は肥後一夫學士の如き、或はだ

んだんと神話の研究家が相次いで出て來られたのであります。であります。その方々の御研究になりましたものを拜見しても神話といふものは容易ならざるもので、搔き揃んでそれを申しますれば自然現象や、生活現象の中に一つの神祕性を求めて、その不思議なる力と我々の關係するところに信仰が働く、その關係に信念を持つやうになる、何時かそれが自分の主觀から現れたものが、客觀的實在性でも難しく言ひますれば言へませうか、何時かさういふものがあつて、いふやうなこゝに纏めあげてしまう。さうしてそれがすつと傳はり傳はつて今日にやつて來た。

斯ういふやうにも言へるのでありますて、初めは例へば森の中の出來事、或る大きい木の枝が榮えて行く、何んにも不思議はないのであります。さころが大風に出つくはせば、その古い枝が折れる。これも不思議なこゝではない。さころが、その自然の現象の中に、さうもある木は新芽が殖え、小枝が繁昌する時は何時でもこの村が五穀豐穰である。あの木の枝に何か故障がある時は何時でもこの村に災難がある。斯ういふやうなこゝを誰が考へるこなく、誰が認めるこなく、自然の現象の間にそれと自分との連帶性を認めるのであります。關係の深いこゝを認める。それから、殊にあの木は前に平家の落武者が逃げ込んで隠れて居た時に、この村の年寄が、これを置つて居たら、それを

見顯はされて、さうして引出されて殺された。哀れいたいけな無惨な最後だつたのでいさも懇ろに弔ひ、一本の櫟の木を植えた。その櫟の木が大きくなつて今日あの大きな木になつた。さうして埋められた人が自分を弔つてくれ、木によつて村に贖罪し、その木の榮えるこゝによつて村の繁榮を説明し、或は木の衰へることによつて村に一つの警告を與へる。それに違ひない、さうであらう、さうである、さいふやうになつて來た。これが一つの神話といふやうなものになつてしまふ。畢り自然の現象であります。それと自己の連帶性、それによつて來るこゝ、それが今日まで傳はつて、その信仰が深くなつて行き、或はまた生活現象の中からさうも我々には一つの因果關係がある。この村とあの村との間にはさうも因果關係がある、さいふやうなお互ひの生活の間に何かさうしてもそこに運命づけられた問題があるやうな氣がする。妙にさういふ傾向になるさいふやうなこゝを見るこゝ、そこに一つの解釋が現れて、その解釋が初めは主觀であるのであります。自分獨自の考から解釋をつけて行く、それが何時かだんく進んで行くこゝ、誰がそれを傳へるこなく、誰の心にそれが根をおろすこもなく、これが遂に客觀化されて動かすことの出来ないものになる。斯ういふものでありますから、神話は信仰を離れて神話なしと言つても宜しい、これに信念を持つ、さうし

て、それら自分が相關聯性を持つて居る。相連帶性を持つて居るといふことにならないと神話といふものは力がないのであります。

まあ斯ういふやうな理窟向解釋に誤りがないとしたならば、斯ういふものを幼稚園の子供にさうして因縁といふものゝ恐しいもの、あの木の枝が榮えるといふと、この村がすつと繁昌する。あの木の枝が折れた時にこの村が焼けた、これが幼稚園の子供に判らせられる話の材料であります。せうか、さうでありますか、斯ういふやうなことを考へてみますと如何に時代の潮に乗るのが都合がいいとは言ひながら中々うつかり神話は使へないが、こゝでいろいろの民族、いろいろの國にはそれらの神話の特徴があるのであります。その特徴を見ますと、使へる神話があり、使へない神話がある。これは高木敏雄氏の分類されたもので、これを見ますと私共が非常に仕合せであると思ひますことは、日本の神話は使ひ易いのであります。これは實に有難いことであります。こゝへ一寸書いて置きませう。高木敏雄氏はもう亡くなりましたが、さういふ學問の認められたい時代に黙々として研究を重ねられましたが、遂に博士号も取られずお亡くなりになりましたが、日本の神話、或は傳説を研究された方であります。先づ斯ういふやうに分類されて居ります。

印度神話、印度神話の特徴は宗教的である。これにはいろいろの理窟もありませうが、然し我々は學者になる譯ではないから、これを別に詳しく説明する必要もありませんでせうし、また異論のある方もありませうから…。

北歐神話、これはスエーデン、ノルウェー、イスランド、デンマルク、ドイツ斯ういふ方面を基調とする神話、その北歐神話の特徴は哲學的であるのであります。

ギリシャ神話、ギリシャ神話の特徴は社會的であります。支那神話、支那神話の特徴は民族的であります。

まあ斯ういふやうな工合に分けられて居る。そこで日本神話の特徴はさうか、これは國家的である。この分類は私共にさつては寛に都合がいいのであります。この國家的といふ問題は、これは松村武雄博士も、これについて敢て國家的といふ解説は加へて居らないが、日本の神話ほどよく纏まつて系統立てられた神話といふものは世界にない、一つの立派な建國神話ださ松村博士は言つて居られる。この點に於て日本の神話は文化的な生活から言ひますならば、餘程この時代が新しい、さうして文化が進んだ後に纏められ、さうして今日の立場をさつたものと解釋しても差支へないであらうかと思はれる。この建國的の神話、國家的の神話、この神話に基いて、さうして日本は導かれてやつて來た。私共はもう一つこれに對して愉快に思はることは、この

神話から導かれた國家そのものゝ生活が常に皇室を中心とした國民の生活繁榮或は健全なる進歩といふものを録したものが日本の歴史となつて居る。これは貴君方もラヂオで聽いたござがありませう。植木直一郎博士が十日間續けて神典の講義として朝々ラヂオで放送された。その神典の御講義の中に、このごとに觸れて言はれたのであります。

實に日本の歴史の明快なのは皇室を中心とした國民の進歩發達、或は繁榮といふものの記録である。であるから總て言葉までが左様になつて居る。植木さんは放送され、一寸興味ある問題をつけられたのは皇室の在るところが上であり、さうして皇室の無いところが下であるといふところから、列車が皇室の在るところに進むのを上り列車、皇室から離れて行く列車を下り列車といふ。それで今上り列車が碓氷のトンネルを下つて居る。今下り列車が箱根のトンネルを上つて居る。これは何んにも我々は不思議に思はんでせう。京さいふ言葉を使へば京へ上つたといふ。江戸さいふ言葉を使へば江戸に下るといふ。言葉は少しも不然でない。けれど、江戸と東京とは同じ土地である。同じ土地でありながら江戸は將軍家が主體だったから江戸を下るといふ。東京といふ京といふ字がつけばお上りさんが銀座を今押し廻して居るといふ。これは銘々の間に國民性といふものが國家を受継いで來た生活、或は精神的狀態から

常に皇室を中心として今日まで進歩發達して繁榮した記錄である。植木博士が言はれたのは寛に無理でないといふのであります。この皇室を中心とした建國神話、これは實に私達が扱ひ易い、これは寛に私達が扱ふのに易い材料である。斯ういふところから着眼して参ります。日本の神話は——外の國の神話は哲學的であるとか、或は宗教的であるとか、信仰といふものが何んであるか、信念といふものがざういふものであるか判らない者に印度神話などを材料として話さうとしても、これは容易に話しにくいのでありますけれど——皇室中心の日本の神話は、斯ういふ自然の受け継ぎで、さうして傳はり傳はつて来るところに人文の發達があるならば、國家の今日の繁榮は、この繼承繼続に基く、その繼承繼続の因つて起るところを我々も調べて自己の生活を導かれるといふことは寛に私は安心なことです。さうして最も自然のことである。私はよくそれで建國神話を語る時に斯ういふことを言ふのであります——これから話が飛び飛びになりますが、——今日まで日支事變と言つて居つたものが、誰が言ふかなく今日では興亞の聖戦と言ひ始めた。これは子供に訊けば一番よく判る。

「この興いふ字はざういふ意味ですか」

「興すといふ字です」

さいふ。

「亞細亞は何んですか」

さいふ

「亞細亞です」

さいふ。

「亞細亞を興す者は誰ですか」

さいふ

「日本です」

「大變な仕事を引受けたのですねエ」

さいふ、そこで子供は初めてさうかなアと思ふ。興す者は日本、興る者は亞細亞、亞細亞に幾つ國があるでせう。

満洲も亞細亞、支那も亞細亞、フィリッピンも亞細亞、ボルネオも亞細亞、ジャヴァも亞細亞、スマトラも亞細亞、印度も亞細亞、西藏も亞細亞、トルキスタンも亞細亞、アフガニスタンも亞細亞、斯う言ふ子供は澤山あるんだなアと思ふ。まだイランもあり、イラクもあり、アラビアもあり、いろいろの國がある。その亞細亞を興す、隨分なものでせう。そこで

「貴君方も起されたこゝがあるでせう。早く起きなさい、早く起きないさ學校が遅くなる。起きよ／＼さいふと隨分寝心地のいゝ近頃の朝は起きるのが嫌でせう」

「これは誰も子供の思ひあたるこゝです。

「そこで、起すさいだけでもお母さんは骨が折れる。時には蒲團に囁りついて居る。ぢやア剥いでやるゾ」と言つて蒲團でも剥ぐそれから一日機嫌が悪くなる。假に兄妹三人寝て居るさするさ、お母さんはぎんに骨が折れるこゝでせう。さア兄イちゃんからお起さなさい、兄イちゃんが起きたから今度は姉エちゃんさ言つて居るさ兄イちゃんが何時の間にかクル／＼ツミ寝てしまう。あゝ兄イちゃん寝てはいけません。あゝ姉エちゃんも寝てしまつた。さア起きた起きた。毎朝三人の子供を起すのにさのくらゐ骨が折れるでせう。それと比べるこ我々が亞細亞を興すのにさのくらゐかゝるか、三年や七年で澤山の國を、日本さいふ親が、日本さいふ兄が起すのにさのくらゐかゝるか判らんでせう。この起きよ起きよさいふこゝは、これは我々の今日の考ぢやアないのです。亞細亞を興すさいふ考は、これはむかし／＼神武天皇様が日本をお起しになつた抑々のお話があるのです」

斯ういふやうにして私達は建國神話を持つて行くのであります。

それは皆様方も御承知でもあらうさ思ひますが、宮崎縣——宮崎縣の方がこゝにもおいさ思ひますが、一寸手を上げて御覽なさい。お二人ですか——宮崎縣の方は御承知

であります。美々津といふ濱邊の町があります。その濱邊の町を神武天皇様がお出かけになつた。その時に、あの町に今日でも傳はつて居りますお言葉が——神武天皇様のお言葉であらうとして傳はつて居るお言葉が——あります。それは「起きよ、起きよ」といふお言葉なのです。こゝで一寸そのお話を暑さ凌ぎに致しませう。

これは地圖を書いた方が宜しい、河が斯う流れて居て、こゝに山がある。こゝには木が茂つて居る。こゝは砂濱、河は斯う流れて居る。こゝに岩がある。海の中に、こゝに長い岩がある。こゝが美々津と言ひまして、斯ういふ字を書きます。この河は美々川といふ河ですが、これは必ず耳といふ字を使つて耳川と言つて居つたのでせう。それが神武天皇様がお出ましになつたので美しいお船着き場所、それが御町寧になり美々津となつた。おみおつけといふおん御町寧になつたのと同じ意味で、美しき津、即ち美津、神武の帝が御船出を遊ばした所であるといふので美しい美しい美々津。昔の人はよく斯ういふ習慣がある。何んでも同じ言葉を重ねて使ふのです。美しい美しい美々津、それで美々川になつたらうと思ひます。この美々川の裾の砂濱のところへお造りになつた船をお集めになつて、さうして御船揃ひが出来たが、空模様が悪くて、さうして一向に波が風がない、うねりが高い日向灘であります。そのうねりが高

いために毎日々々一週間ばかりお延しになつて、或は風を上げて風をお知りになつたといふ傳説もある。風の工合、風の強さをお試しになつた。さうして、これならば風も風いだし、明日あたりは船出をしても差支へないだらうといふので御家來にお言附けになつて船掲ひをさして、明日の晝は乗出すから、その準備をしろといふので、そこで喰べ物や道具を乗せ、皆が一生懸命船出をする間に、こゝまでお供して來た田舎の人達、お爺さんもありお婆さんもあり、子供もあり、若い者はお供に出て行く者は張り切つて胸を押いてお船に乗つて居る。然しお供になれない者は「しつかりやれヨ、俺の代りにやつてくれ」といふ。今夜は陸で睡る最後の晩だといふ、ゆづくり寝めといふので皆大の字になつて轉がつて寝た。さころが寝られないのはこゝまでお送りして來た日向の田舎の人々、明日は愈々お別れ、何んといふ物淋しいこゝだらう。今まででは神様の御末、この日向に天降りまして、我々の間にお住ひになり、山の中に居るあらぶるもの、或は森の中に隠れて居る土蜘蛛、熊襲、これを御征伐下さつて穏やかにして下さつたのは有難いけれど、まだく廣いところへお出ましになるのでお止め申すことは出來ない。然し明日お發ちになつたらどうなるだらう。皆溜息をついて、あちらに五人、こちらに十人立ち圍んでコソコソ話をして居る、一人の者が

「さうだ、一つ最後に何かもう一度差上げようぢやないか、何ももう上げるものは上げてしまつて何もないけれど、何か思ひつきがあるか」

「さいふみ、一人の者が

「それは、これから先は長い御船路を海の上にお過しになる。海の水は鹽辛い、それで顔をお洗ひになり、お漱ひしても鹽辛い、それで終ひには海の上の風を受けるご御身體までも波の水で鹽辛い、それだから、もう辛いこれからのお過しおさらなければならんから、さうだ甘いものを何か考へて差上げようぢやないか」

「何があるか」

「小豆がある。あれを捏ねて餅を搗いて餅にまぶして差上げたならば、これは必つごお悦びになるだらう」

若い者も悦んで

「それは俺達も好きだからなア」

「お前達にやるのぢやアない」

「何んでもいゝから杵を集めろ、臼を集めろご夜中までかかつて仕度をして、明日の朝早く起きたらば搗き始めよう」といふので、こゝで皆が仕度を整へて寝てしまつたが、小豆は前の晩から煮なければ煮上らないから誰が宜からうといふので、それは年寄が一番いゝから年寄に頼まうぢやアないか、こゝで集まつた者の中から年寄を一人一人頼ん

で、ぢやア私達が小豆を煮る方へ廻らうご、時々蓋を取つては摘んでみ、さうするごお婆さんも横の方から

「お爺さん、汚ないヨ」

「だつて摘んでみなければ判らないヨ」

「お爺さんが水つ洟を落すかご思つて……」

「だから摘む前に吸つたぢやないか」

「その手で摘むから尚汚ないぢやないか」

斯うしてお爺さんごお婆さんご吐言を言ひながら小豆を煮て居るご、さうやら夜中の一時頃になるご煮えて、親指で押してみると軟かに煮えて居る。さうしてこれをまた口に入れるごお婆さんに叱られる。

「勿體ない、神武天皇様に差上げるのではない」

「いや、お毒見ごいふごことがある、喰べてみなければ判らんぢやアないか」

「ぢやア、まあそれでいゝから明日の朝起きたならば早くそれを捏ねよう」

さいふので明日の朝早く起きて捏ねる心算で二人は肘を枕にして寝ようとした時にお爺さんが一寸外に用を足しに出て、空を仰いで見るごお星様がきらめいて居る。

「あゝ、いゝ空だ、まるでお星様が降るやうだ、これなら明日の御船出も寢に上々吉おめでたいなア」

さ思ひながらフイフイ氣をつけて見るご、右なゝめの森の

中にチロ／＼こ灯が見えて居る。篝火であります。二つ三つ並んで居るところは、あれは神武天皇様の御寝みだといふ。今頃は定めし御寝なさつて居るであらうと思ふ。二人は、さうか御夢安らかに、日向の御名残りも今夜限り、静にお寝みになりますやうに二度三度頭を下げて、ついで頭を上げた時にギイ／＼といふ戸のきしめく音がしたと思ふ。

「起あよ。起きよ。」

といふ重々しいお聲がした。お爺さんはハツと思つて聞き耳を立てる。バタ／＼／＼ツミ五六人の掛け違ふ脚音が聴えて、廳てお言附けを承はつてか、右、左にこれが別れる。今まで二つしか見えなかつた篝火が五ツ、七ツ、十、あちらの森、こちらの砂濱、海際にまでだん／＼篝火の數が殖え始めて、その邊に寝んで居るお小屋の戸を叩いて、起きよ。起きよ。起きよ。起きし續けて居る聲を聴いた時にお爺さんお婆が

「お爺さん」

「何んぢやい」

「何んぢやないか、神武天皇様のお聲と思はれる起きよ起きよ。といふ御聲がする。皆起して廻つて居る。これから寝たのでは間に合はんぞ、私はこつちを起すから、お前はそちらを起して廻れ」

こ起して廻る。廳て起きよ起きよの聲につれて村の若

い者が起きて見る。炎々燃えさかる篝火は、これが海際までつこ燃えたつて居る。さうして、もう既にお手廻りの荷物はお船に運んで居る姿を見て、若い者は狼狽えて、早く火を起せ、早く火を立てろ、お米を入れろ、蒸籠をかけろ、それをもざかしく臼に入れて手杵で三人五人で搗き、その間に頭を割り込んで餅を引つくり返す、押すな押すな頭を搗くぞ、搗き上げる内に一人の若者があーツと聲を上げた。思ふさいきなりそこへ膝をついた。さうしたのだ。いふ。あの岩の上に夏の夜も明け易く東の海から桃色の雲が棚引いた。思ふ。すうツミ一條の光り、天を射る金色の輝き、それに照し出ださせられて海際の岩の上にお立ちになつて居るのは眞つ白い白妙の御召物、右手に梓の弓を、お背中に御胡簾を背負つた神武の帝。これを見た時に、そのまゝに拍手を打つて拜み、初めて皆も神武の帝あそこに出でさせ給ふ。我れを忘れて拍手を打つて拜んで居る時に

「早く小豆を練らない。餡にならないぜ」

といふので、それは大變、煮えて居るけれど、餡に捏ねない。餅にまぶす。が出来ない。さうする。狼狽えた者が

「お爺さん、鍋を持つておいで」

「何んと思つたか。鍋の小豆を手で抄つて白の中にこれ

を放り込んで、

「もう間に合はないから一緒に擣いてしまへ」

それで餅と一緒に擣いたのが事實であります。そのため今までボツタン／＼と言つて居つたのが小豆が入つたので定めし音も違つたであります。ペツチヤン、グツチヤン、ペツチヤン、グツチヤン、小豆の皮が撥ねる。さうして小豆餅が半搗になつて擣き上げるご取敢へず御船に召さすので上がるまいご柏の葉に重ねて神武の帝の前へ恐る恐る年寄が二三人で持つて行き、何んごいふむさいものかごお吐言を賜るかと思ふぞ、神武の帝は

「これは何か」

「仰せになつた。赤いやうな白いやうな色合ひをして居る。そこで年寄は恐る／＼

「間に合ひませんので小豆を擣き入れまして……」

「申し上げた。さうするぞ」

「あゝ擣き入れか」

「仰せになつた。さうして、そのまゝお取りになつた。

これを拜見した年寄達は涙をこぼして、あゝ召上つて戴いた、召上つて下さつた、何んごいふ有難いごことか、それから餅を皆のつかもの達にも頒けるぞ、擣き入れたのもあるし、餅き入らんのもある。喰べてみるご寢においしい、これを皆に頒つて、艤て御船に乗るご最後の御名残りごいふ

ので、この海際に並んで、御名残りでござります。御名残りでござります。ご言葉を重ねても心は盡きない。その内にだん／＼ご一艘また一艘御船はこの間から海に出て行く、御船は波にゆられ／＼姿を一艘々々消して行くにつれて渚に手をついて居る人達の心はだん／＼淋しくなつて行く、遂に最後に神武の帝の乗らせ給ふ御船の姿が岩ご岩ごの、この間から姿を消した時にワーッと思ひ餘つて泣いて砂濱に頭をつけてしまつた。あの岩ご岩ごの間から出られて二度ご再び日向の土地にはお歸りにならないのだと思ふぞ怨めしきはこの岩の姿、この岩が最後の姿を隠し参らせたごいふので美々津の人々はこの岩ご岩ごの間から海に出で行かないのです。これを七つ岩ご申して居りますが、この七つ岩の間からは断じて海に乗り出さない。然も美々津の人の半は漁民であります。海で暮す船乗りであります。漁捕るすなごりびござりますが、あの岩ご岩の間から出て行くご二度ご再び歸らないごいふので今日でもこの海に出来ます時には必ず上に廻るか、下に廻るかして海に出来る。魚を澤山捕つて歸る時にはあの岩ご岩の間を通つて、歸つて参ります。如何にこゝに信仰ございふものが恐しいございふことが判るのであります。こゝに一つの判断によつて、あの岩の間から出る者は一度ご歸らない。昔も今も然りござ思ふ連帶性であります。これが人の心に、殊に緣故の

ある我が神の御末、我々と一緒に住はせられた方々が、の岩から出られたのであるから、我々もその流れを汲みそ、の御血筋を稟け、その中に暮した同じ民草として、矢張りあそこから出る我々も歸つて來ない、こゝに神話といふものゝ強さ、こゝに神話が信仰的に働くのであります。これが信仰的に働いて連帶性が強ければ強いほど神話によつて指導を受け、神話によつて生活が變へられる。今日漁民の生活から言へば、この岩の間から出れば早く海に出られ、れ共、斯ういふやうなところに神話の働く非常に力強い影響が認められるのであります。

そこで話は元に返りまして、彼等は嘆いて砂濱に頭をつけて居つたが、もう二度と再び歸らせられないとなると、スコヽヽミ立ち歸つて家中に入る者もあり、門口に立ちはくんだ者もあり、誰の顔も蒼くなつて居ります、その時に一人の者がフイミ氣がついて、これはいかん、こんなこゝで氣を落して居る、折角山の中に追込んだ熊襲がまた出て来る。谷の中に追入れた土蜘蛛が這ひ出して來る。さうするミ、この日向は、また荒びた國になる。朝、起きよ、起きよ、神武の帝が仰せになつたのは我々も元氣を起せ、さうして日向を興せ、いふお聲で我々も考へなければならんのぢやアないか、それならば神武天皇様のお言葉を忘れないために——お遣しになつた御心持ちを忘れない

ために——子々孫々まで一年に一度、この御船出の日は皆起きて、あのお言葉に従つて、戸を叩いて起さうぜ、さうして起きたならば搗入れ餅を搗いで、さうして御祝ひ申上げてこの気持ちを忘れないやうにしよう。それから二千六百年、今日でも美々津では舊の八月一日が御船出の日と言傳へられて居りますが、その日は門の戸を叩いて、起きよ、起きよ、病人があらうが何んであらうが、この晩だけは慮しない。起きよ、起きよ、さうして皆起きる。起きたならば餅を搗く、それが未だに餅の中に小豆を放り込んで搗入れ餅といふ。それを近頃宮崎縣へ參拜する人が多いので、これを一包十錢で賣つて居ります。

「名物、搗入れ餅はさうですぞオ」

といふ。別に貴君方に廣告を頼まれた譯ではありませんが、この話をしたミ、これが食橋先生が、それは大變にいゝ、されどは來年二月十一日必ず搗入れ餅をこゝの幼稚園の子供に配らうといふお話で、そのこゝを宮崎縣の美々津の町長に私が會つた時に話しました。それでは入念にうまく掠へませうといふことでございました。兎に角、二千六百年前からの形は違ひます。無論一千六百年前には砂糖はなかつたのでござります。たゞ小豆の甘味だけの甘味でありますけれども、これを傳へ傳へて名物搗入れ團子と言つて居ります。

「」で更に面白いと思ひます」これは、三年前から宮崎縣知事が、この「起きよ」といふ神武の帝のお言葉が残つて居るといふことを承はつて、是は美々津だけに傳はる御聲の響きを思つてはならない、宮崎縣を興す、宮崎縣振興隊さいふものを作つて、この「起きよ」といふお言葉をもつて守りの言葉にしようといふので、縣知事が主張しまして、集團勤勞の初めに「氣をつけッ」と整列さして「起きよ、起きよ」といふ。之が今では宮崎縣の總ての呼聲になつて居ります。

ところが、ついこの間参りまして、そんな副影響もある「」かと思ひましたが、この間宮崎の車庫に勤めて居る鐵道の幹部が轉任して行くといふので、その車庫に勤めて居つた若い者が見送りの際にプラットホームに立つて「起きよ、起きよ」と言つた。さうするごとく、その奥さんが顔色變へて御主人のうしろからしがみついて居る。「起きよ、起きよ」もう奥さんは泣き出しさうな顔をして居るのです。それで後で考へ出来ましたら、その奥さんの名前が「起きよ」といふ。奥さんはさういふ意味を知らんから何か餘程主人に恨みを持つて居る人が、この時に私を侮辱するのかと思つてベソをかいて今にも泣き出しさうになつたさうであります。これが等は思ひがけん副作用であります、この「起きよ」といふ御魂が一千六百年後に天に口なし人をもつて言はしむ、その時の御言葉が遂に日本の地を興し、亞細亞を

興すやうになつた。斯う解釋致しますと、茲に神話の寔に嚴かなる一つの暗示的の働きも我々は考へさせられます。そこで私は斯ういふやうに言つて居るのであります。これは序であります、子供に話をする時に、今年は二千六百年といふが、なぜ二千六百年をそんなにやかましく我々は言はなければならんか、悠久二千六百年、久しいから、永いから斯ういふのであるといふならば、支那はまだ永い歴史を持つて居る國は外にある。支那は五千年の歴史を持つて居る。さうしてみるごとく日本より二千四百年多いのです。日本が悠久二千六百年と言ふならば、支那は悠久久々五千年と言はなければならん。大概子供は笑ふのであります。まだある。エジプトといふ國は七千年的歴史を持つて居る。厳としてエジプト學者はこれを傳へて居る。その七千年前から二千六百年を見たならば恰もこれは赤ん坊ぢやアないか、七千年を悠久に當嵌めたら悠々々々々々七千年、何が二千六百年が誇るに足るか、と言つた時に貴君方はさう言ひますか、子供は首を振るのであります。貴君方は何んご考へなさる。唯、歴史が古いから、唯時代が永いから、さいふのならば外にもある。そこで私は斯う考へる。一つの魂が命を持ち、力強く國を護り、國を導き、國を育て、二千六百年續き、魂の燐爛として光輝を放つて居るやうな魂を持つた國の歴史が外にありますか、まだ二千六百年で

は終らない。これから、この二千六百年を育み、護り育てた一つの魂がこれから五千年續くか、一萬年續くか、さうくる續くか判らないと考へたならば、これこそ真に悠久なる命、悠久なる力、この命と力をもつた魂を隣りの支那に比べて見るごとく、支那は五千年の歴史はあるけれど、五十年の間に魂は二十六ペん變つて居る。良い魂もあつた。弱い魂もあつた。悪い魂もあつた。慘虐無道な魂もあつた。

いろいろな魂で導かれ、いろいろな魂で育み育てられ、いろいろの魂が力強く働いたから、二十六ペん變つた内には困つた魂もあれば、出來損ひの魂もあつた。今蔣介石が重慶の奥で育み育てゝ、護り育てゝ居る魂なぎは出來損ひの中の大きい出來損ひであります。そこで私は支那の方に——失禮ですけれど共——貴君の今持つて居る魂はこの二十六の魂の中のされですか、貴君の頭の中に傳はつて、貴君の力になり、貴君の命になつて居る魂はさういふ魂ですか考へて下さいと言はれて支那四億の人達は、私の魂は疑ひもなくこの魂だと言ひ得る者はありますまい。然し私は皆さんに訊いてみたい——と子供に言ふのです——皆さん方の魂と爆弾三勇士の魂と違ひますか、皆さん方の魂と二宮尊徳の魂と違ひますか、皆さん方の學校の校庭に建てゝある楠木正成の魂と皆さんの魂と違ひますか、和氣清麻呂公の魂と皆さんの魂と違ひますか、僧道鏡がやつて來たならば皆さんは和氣清麻呂公にならない人はないでせう。

それで私共の手の中を流れて居る血潮は二千六百年前からまぎれもない血潮、お裁縫が出來なかつたら手を叩いて下さい。「起きよ、起きよ」と、手の中に睡つて居る二千六百年前からの力で「起きよ、起きよ」算術が出來なかつたら頭を叩いて下さい。「起きよ、起きよ」睡つて居つてはいけない、起ち上つて考へなさい。自分は尋常四年生でも魂の力は二千六百年前からの御先祖の力だといふことを忘れてはいけない。そこで興亞の聖戰の「興」といふ字、「おきる」といふ字を使つたのは新聞社が使つたか、或は誰が使つたか知らないけれど、兎に角、私共の中に興すといふ考が傳はつて居つたればこそ、「起きよ起きよ」のお言葉を神武天皇様がお用ゐになつたと考へるのは當然であります。まあ斯ういふやうに私は神話と現實の生活とを結びつけ、殊に建國の精神と現在との喰違ひのないことを子供に制らせたいといふので、斯ういふ扱ひ方をして居ります。

兒童研究法講義

(四)

第四高等學校教授 松本金壽

事實整理

一
實驗や觀察によつて蒐集された色々の事實は、それだけではまだ研究の素材に過ぎません。丁度山から掘り出したばかりの鑛物がそれだけでは役に立たないのと同様です。

金銀銅鐵等はもさよりのこそ、石油や石炭等でも私共の日常生活に役立つやうになるまでには、色々の操作を通しての精鍊加工を経なければなりませんが、それと同じやうに、私共が兒童研究の爲に色々の觀察を行つたり、實驗を企てたりして蒐集した事實も、觀察し放し實驗のやり放しではなく、夫々の研究目的に従つて整理統一しなければ纏つた知識にはなりません。前回にも申しましたやうに、このやうな整理法は觀察や實驗のしかたと密接な關係を持つ

てゐるものですから、細い點になると、その問題、その問題によつて一々違つてくるのは當然ですけれども、又その一面において、その觀察、その實驗にも共通した整理の規準もあり得るわけです。次に、この點についての概略を申し上げて置きます。

一般に私共が調べようとするものの性質は、ものそれ自身の中にあるといふよりは、ものを測る測り方即ち、ざんな工合にしてさか父さんの裝置でさかまく云つたやうな操作のしかたに懸つてゐる云ふことが出来ます。例へば、ものの長さでも單に眼分量で測つた場合と物指しだできちんと測つた場合とでは、長さといふものの性質は自ら違つてきます。又眼分量でも大人と子供、慣れた人と慣れない人では違ひますし、物指しでも使ひ方によつて違つてくることは云ふまでもありません。このやうな關係は大きさの

場合でも、重きの場合でも、速きの場合でも皆同じことであります。物理學や心理學では近頃よく操作主義といふ言葉が用ひられてゐますが、大體の趣旨は上に述べたやうに、もの、ものを取扱ふ態度や方法なりの精確さ乃至は厳密さを重視し、ものの性質は操作の如何によつて定つてくるといふことを云ひ現はした主張に外なりません。児童研究法においても、この操作主義的な考へ方は充分に考慮されなければならぬと想ひます。私共には第一に結果のみを重視する傾向がありますし、第一には又、児童といふものを大人本位の立場から解釋する傾向があるからです。

児童研究に限らず、凡ての問題に對して手早く結果乃至は結論のみを知らうとするのは一般的の通弊です。面倒臭い手續は後廻しにして、とにかく結論だけを聽かうとか、児童とはこんなものだとか、最後の締め括りだけを急に求めたり示したがる態度は凡ての人々に認められる共通的傾向ですが、科學的事實の價値といふものは、その取扱ひの方法即ち操作の如何に懸つてゐるものですから、簡単に結果乃至は結論だけを盲信したり誇示したりするだけで萬事解決といふわけには參りません。それ故、私共が蒐集した事實を整理する場合にも、その手續なり方法なりを精確に記録して置くことが第一に必要です。つまり、實驗の場合には刺戟の構造や與へ方などが反應の條件とか等について、

又觀察の場合には児童と觀察者の關係とか、その時の周囲の狀況とか等についての詳しい記録がさうしても必要になります。若しも斯うした點への用意を怠つたならば、折角の研究結果も他の人々に理解させることは困難ですし、又他日この研究を他の場合へ應用することも不可能になると思はれます。

次に又、私共は児童といふものを大人本位の立場から解釋しようとする傾向があります。私共も嘗ては皆子供であったわけですから、さうした傾向が出てくるのは當然と云へないでもありませんが、斯うした大人本位の解釋は否定されなければなりません。子供は「小さな大人」でもなければ「大人の縮圖」でもなく、それ自身獨特の精神身體的特色を持つたものであるといふことは、現代の児童研究が發見した不動の原理です。この點については最近の児童心理學書のそれにでも示されてゐるところですから、詳しく述べる必要はないと思ひますが、この考へ方は事實の整理に對しても大切な關係を持つてゐます。御承知のやうに、子供といふものは自分の氣持なり考へなりを言葉で云ひ現はすところが不得手ですし又しないのが常ですから、私共に残された理解への路は彼等の行動や業績が主なものになります。子供の方では別段イタヅラをする氣でもないのに、大人からはイタヅラで困るといふやうな非難を浴せかけられ

るのも、斯うしたところにありません。それ故、私共が蒐集した事實を整理する場合にも、大人本位の勝手な解釋を加へず、ありのまゝに即ち現象的に記録して置くことが大切な心得となるわけです。ありのまゝに云ふことは行動の行動が行はれた場面(環境)この両方を指してゐます。このことは極く平凡なこのやうに思はれますが、實際やつてみると却々難い技術だいぶこゝがお分りでせう。初心者はさかく主觀的な解釋を入れ勝ちですし、又場面の状態等を見落し易いものです。

二

以上述べたことは整理の序の口です。整理の全段階を記述を説明の二つに分けるとすれば、以上は凡て記述段階の仕事です。然し整理といふことは唯上に述べたやうに、ありのまゝの事實を精確詳細に記録する仕事だけに終るのではなく、更に進んでその記録を纏め上げ研究を一段落つける役割を果さなければなりません。即ち記述段階から説明段階へと進む必要があるわけです。それならば説明段階の仕事はどんな風に分けられるでせうか。次に、この點についての極く一般的な筋道を述べて置きます。

記述段階で得られた個々の事實は、それだけでは何の纏りもない多種多様な事實の陳列にすぎません。私共はそれに統計的處理を行つて、それらの多數の事實の中から代表

的な特徴を見出さなくてはなりません。標準とか類型とかは斯うして導かれたものです。標準は主に量的な側面から導き出された代表的な値ですが、類型は主に質的な側面から考へられた代表的な傾向と云ふことが出来ませう。そして此の兩者は、甲兒童、乙兒童と云つたやうな個人個人についても云はれますし、甲學級、乙學級と云つたやうな集團についても云はれるることは申すまでもないことです。

標準は普通には平均(正しく云ふと算術的平均)で示されますが、この外に中數と最大頻數(モード)があることは御承知のことさせう。そして、この三つ即ち平均・中數・最大頻數は大抵の場合一致するものだいぶことは、ベルギーの統計學者ケトレンによつて明かにされてゐます。色々の場合の實例を擧げてグラフ等に現はしてみると却々面白い問題に出會ふのですが、大變紙数をさりますので省略致して置きます。皆さんのが不斷取扱つて居られる兒童の成績等を得點別に整理されただけでも興味ある問題を見出されるに違ひないと思ひます。

このやうな標準に關聯して色々な統計的處理法が擧げられます。こゝでは兒童研究に最もよく用ひられる平均錯差・標準偏差・正常分配曲線・相關關係等について簡単な説明をつけ加へて置きました。前に述べましたやうに、標準は普通平均で現はされますが、平均が標準又は代表と

きの位信頼が出来るかといふ度合を現はしたもののが平均錯差や標準偏差です。測定の単位が極く少い時には態々平均錯差等を出さなくとも一目して信頼度が分りますが、澤山になるほど果してどの程度に信用してよいか見當がつけ難いので、平均と共に平均錯差なり標準偏差なりを添へて、その數値が比較的小さいことを以て信頼度の證明とするのが普通の習慣になつてゐます。正常分配曲線といふのは、測定の単位がどんな範圍に亘つてゐるかといふ全體の傾向を圖示したもので、多くの場合、釣鐘のやうに真中が高く両端になるに従つて左右相稱的に低くなるのが普通とされます。それ故、若しもこの型に合はないやうな不規則な分配曲線が得られたならば、測定のしかたに缺點があつたか、或は又、測定集團が偏つてゐたか等といふ疑問が提出されるわけです。相關關係といふのは、二つの異つた種類の事柄の間に關係があるか、ないかといふ度合を示したもので、大體三通りの關係が區別されてゐます。第一は、身長が高いものは大抵體重も重いといふやうに、相伴つて同じ方向に變化する場合の關係で、これを「又は順の相關」と云ひます。第二は、その逆で一方が増せば他方が減るといふやうに、お互に反対の方向に變化する場合の關係で、これを「又は逆の相關」と云ひます。第三は、お互に無關係を現

はす爲に相關關係数を用ひますが、無相關の場合を○とし、完全な順の相關の場合を+とし、完全な逆の相關の場合を-とし、十から〇を経て一に至る値の變化で相關の程度を現はすこになります。

以上は統計的處理の簡単なスケッチです。テスト法や質問紙法、推論法等は特に統計を多く用ひますが、その他の研究法でも或る程度の統計的處理を必要とします。統計による數量的處理は科學的研究の出發點として缺くべからざるものだからです。然し、それだからと云つて統計が整理の全部ではありません。或る問題についての標準が出たとしても、甲兒童が標準以上、乙兒童が標準以下である理由は統計だけからは説明が出来ませんし、或る事實と/or他の事實との間に高い相關關係が見出されたとしても、何故に相關關係があるかといふ内面的な事情は出てこない次第です。そんなわけで統計的處理は整理の第一歩であつても、精々のところ、大體の傾向とか凡そその見當と云つた蓋然性の範囲を出ないものだと言ふことを銘記すべきでせう。標準に對して類型とか、更に進んでは個性とか人格とかの高い整理目標が要求されてくるのは斯ういふ理由からだと思ひます。

三

類型といふと、すぐ氣質とか性格とかが聯想されるやう

に、いかく素質的、先天的のものが強く印象され勝ですが、類型的整理は必ずしも氣質や性格に限りません。古くから云はれてゐる視覺型・聽覺型・運動型等も類型の一つですし、拙速型・巧遅型と云つたやうな學習の方面にも、直觀型・思素型と云つたやうな智能的方面にも云はれ得ることとして、要するに、或る個人なり或る集團なりの行動様式の特色を代表させた概念と云ふことが出来ます。或る人は、これを特色の標準などと呼んで標準の一種と見做してゐますが、然し標準と類型では整理の目標が違つてゐます。

標準は、或る個人が全體の中のその邊に位してゐるか等といふ分量や程度を問題にしたものですが、類型は、その個人がどんな特色を持つてゐるか等といふ性質や内容を問題にしたものでし、又標準は行動の結果(業績)から間接に歸納された概念ですが、類型は行動の様式から直接に發見された概念と云ふことが出來ませう。

児童を研究する場合に、或る児童が標準からその程度にあるかといふことは大切な問題に違ひありませんが、そんな特色を持つてゐるかといふことも、それに劣らず重要な目標でせう。記述段階において、ありのまゝに精確に記録された児童の行動を注意深く整理するならば、それがどんな種類のものであつても、必ずそこに何等かの特色が見出されるに違ひありません。積極的な面でも消極的な面でも、

何も特色を示さないといふやうな児童は殆どないと言へるでせう。そして、そういう特色を更に注意深く整理してゆきますと、その特色は或る一群の児童とは著しく異つて居るけれども、或る他の一群の児童とは非常に似通つたいふやうな趣が見出されるのです。そこで、同類項を総括し異類項と比較對照させることが出来、その特色が一定の客觀的共通性を持つたものと認められるやうになります。これが即ち類型的整理なのですから、児童の行動の様々な方面にでも類型的整理が可能なわけですが、今迄のところでは、やはり氣質や性格の方面が眼立つてゐます。昔から云はれてゐる多血質・膽汁質・粘液質・神經質とか、ユングの内向型と外向型とか、古川氏の血液型とか、クレッケメルの躁鬱性氣質と乖離性氣質とか等は、その代表的なものでせう。

斯ういふやうに、類型的整理は行動様式の特色を明かにしようとする際には、どうしても行はなければならない大切な整理目標の一つですが、たゞこの整理に際して私共が忘れてはならない注意事項は一面的・形式的に陥らないようになることだと思ひます。前回にも述べましたやうに、行動は自我と環境との兩方に規定されるものですから、通り一遍の觀察や實驗から簡単にその特色を結論するところは禁物です。あの場合には斯う、この場合にはあゝ、あら

ゆる可能な場合を考慮して、本當に行動を特色づけてゐる條件を探し求めなければならないわけです。丁度見たところ全く同じやうに白い豌豆の花でも、純種と雜種では二代目・三代目に大きな違ひが現はれるのですから、たゞ外観だけから異同を論ずることが出来ない同じやうに、色々な場面との関係を比較考察して行動を規定する本當の條件を突きこめてゆくことは、必ずしも簡単な仕事ではありません。このやうに、行動に關係する色々の條件を次々に比較考察して最も根本的な发生條件を追求してゆく遣口は、條件發生的考察と呼ばれてゐますが、児童自身の言語的報告に充分な信頼を寄せることが出来ない児童研究においては、この遣口即ち條件發生的考察といふことが一層大切になつてきます。若しも、斯ういふ點に充分の注意を拂はずに、餘りに性急に結論へと急ぐならば、一面的・形式的な缺點を曝露することには必定です。

以上で大體整理についての一般的な筋道を述べました。

勿論この外にも個性や人格等のやうな全體としての人間像への整理法や、児童研究に特有な發達的考察(児童と大人、児童と動物・児童と未開人等)などについても觸れなければなりませんが、抽象的な一般論を長びかせるることは極力避け度いことを存じます。そして今迄わざと割愛したり簡略にし

たりしてきた點等については、次回以後に具體的問題の研究法を述べる際に補ふやうに致します。

逸 獨 幼稚園創立五百年祭

六月二十八日、チューリンゲンのブランケンブルクにおいて、幼稚園創立百年祭が舉行された。幼稚園はドイツの教育者フリードリッヒ・フレーベルが一八四〇年はじめてこの地に創設したものであるが、フレーベルは一八一三一五のナポレオン一世の桎梏からドイツを解放させる戦争に義勇兵として參加、その経験から學校適齡前児童の教育の重大性をさとつて幼稚園並びに保育養成所を開設したのであつた。この新しい教育方法は間もなく全世界にひらまり、キンダーアガルテンといふ言葉はそのまま各國で用ひられてゐる。ナチス・ドイツにおいても幼稚園教育に重大關心を拂ひ、今回の百年祭を機会にブランケンブルクにフレーベル研究所を設立すると共に、フレーベルの教育方針に従つた模範幼稚園及び保育養成所をつくる筈である。

(改造九月號海外文化展望より)

初秋に於ける幼兒の保健

廣瀬

興

今年の夏は一般に不順の氣候であつた。永らくの旱天か

むべきか。

急に涼しい秋に移つて、夏らしい夏を味ふことが少かつた。従つて、折角、海水浴や山の生活に出かけた人も充分の鍛錬の目的が達せられなかつたであらう。又、時局下の落ちつかぬ日常生活は、知らず知らずの中に、無心の幼児達にも何等かの影響を與へてゐるであらう。都會地の外米混入によつて近頃、母親の脚氣、乳汁分泌不足、乳児脚氣の増加の傾向から推察して、恐らく、幼児の γ -タミンB缺亡状態の者が多からうことが想像せられるのである。

彼様の状態は、單に、脚氣に罹り易いのみならず、一般に抵抗力弱く種々の傳染病に感染し易く、殊に、今迄潛伏してゐた結核なさの發病に絶好の機會を與へることとなる。

斯様の状態は、單に、脚氣に罹り易いのみならず、一般に抵抗力弱く種々の傳染病に感染し易く、殊に、今迄潛伏してゐた結核なさの發病に絶好の機會を與へることとなる。

斯様な状態に於て、私共は、幼児を如何にして保護すべきか。而して、尚、一層健康を増進させ、體位を向上せし

めである。體重の増減、食欲の如何、偏食の有無、疲勞し易きや否や、機嫌、睡眠の良否、或は微熱、盜汗等である。殊に避暑地より歸へつたものはこの注意が肝要である。折角、健康増進のために轉地したのに拘らず斯様な異状を發見するのは多くは出發前既に潛在的に斯る素質を有し、それを不注意に他の小児と同様の取扱ひを爲したものと思はれる。

斯様の小兒は、家庭に勤めて(一)マントウ氏反應、其結果によつて必要なれば(二)レントゲン検査、更に、(三)赤血球沈降速度検査の順序で確診することが安全である。學童になつてからの虛弱體質や結核性體質を偶然發見したかの如く驚愕するが多くは幼兒時代にその發芽があるのであって家庭の不注意である。保姆は他の多くの同年輩の幼兒を取扱ふ故にその異常を家庭より早く發見することの出来る立場にある。それにしても保姆は注意深い觀察が必要である。

ある。

次に蛔蟲其他の寄生蟲の検査、漁村や農山村の生活は寄生蟲に感染する機會が多いから、この際驅蟲剤を與へるここは賢明である。近頃の賣藥は效力が弱いことがあるから信用ある製藥所か醫師の處方によつて、サントニン、マクニン、海人草を服用せしめることが大切である。殊に時々不定期に腹痛を訴へる小兒、偏食の小兒、神經質、貧血の小兒等は一應檢便をすゝめて寄生蟲の有無を確かめることが肝要である。

避暑地の生活で折角矯正された偏食の習慣も歸宅後不注意に放任して置くこと又元通りとなる故に注意して習慣づけねばならぬ。秋は一般に食欲増進の季節であるし、果實の豊富の時であるから、食べ過ぎ飲み過ぎに注意すること、間食を正しく與へるなどを所謂栄養教育が大切である。

秋は又、皮膚の鍛錬の時で、日光に親しむこと、入浴の習慣、乾布摩擦、冷水摩擦、薄衣、寝衣交換、戸外の遊びなどの習慣を失はしめずして冬期の寒冷に對して抵抗力を強める様鍛錬することが肝要で、斯くするときは初めて皮膚の生理的作用が敏活となり寒冷や乾燥の急激の變化に對して適應し、容易に感冒となる様になるであらう。體温の放散作用の八五%は皮膚作用によつて行はれるのであつて感冒豫防の第一は皮膚の清潔と鍛錬が肝要で、それ

はこの秋の候より開始せねばならない。

秋の幼稚園に於て注意すべき疾病は、デフテリー、流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）、百日咳の三つであらう。勿論この三病は一年中、何時でも發生するものであるが特に秋季に於て注意が肝要である。

デフテリーは豫防注射によつて殆んど完全に豫防出来るのであるから、未だ行つてない幼兒は是非家庭にすゝめる義務があるであらう。約三四年は有效とされる故、乳兒期に行つたものは幼兒期に再注射をせねばならぬ。大體、生後二三ヶ月頃第一回、三四歳第二回、六七歳頃第三回施行すれば安全である。

「流行性耳下腺炎」は發熱や耳下の腫脹で始まる故斯る幼兒は直ちに登園禁止し、しかも、本症は潜伏期が二十日である故其後二十日以上も園児全體に觀察の眼をゆるめてはならない。若し他に發熱児でも發見せるときは醫師と相談し、早く對策し、テラボール、アルバジールの如き藥剤を投與するが流行を防止することが出来る。患児は如何に下熱しても耳下腺の腫脹のある中殊に咽喉の發赤が消散せぬ中は登園せしめてはならない。この原則を怠る多數の園児に蔓延せしめて了ふであらう。よく耳下を濕布し乍ら登園せしめてゐるのを見るが極めて危険である。

「百日咳」も適確な豫防の方法がないが、未だ百日咳と診

断の定まらぬ幼児でも有咳のものに當分、「マスク」をかけさせ、様子を監視し、幾分連續性の咳、顔面潮紅性の咳をする様なれば氣の毒でも一時、登園を禁止することが必要である。無熱で朝夕の氣候の變化時に咳が多く出で、且つ日一日ご幾分づゝ多くなつて行く傾向あれば頗るあやしいと認むべきである。百日咳の早期診断は幼稚園に於ては殊に必要である。醫師の診断より保姆の注意深い觀察の方が却つて早期に發見するこゝがある。

若し、園児の一人に發病したり、附近に流行の徵があれば全園児に豫防注射を施行するがよい。現今豫防注射は以前ご異つて相當に有效である。但しその豫防液の種類にもよるが有效期間は五六ヶ月ご見做すべきで、尙小児の體質ご感染の濃度にも關係がある。一應は豫防にも治療にも行つて見るべきものであらう。

若し罹かつてしまつたものは栄養を衰へさせぬこと、肺炎や結核なぞの併發せぬ様にして早く短期間にに經過させる様心掛けるより仕方ないのであつて、それには食餌は少量で栄養價のあるものを度々與へること、ビタミンA、B殊にC等の薬剤を與へ、新鮮の空氣に充分に觸れさせ、且つ成るべく安靜にさせることが必要である。轉地も有效のこゝがある。

恢復後の登園時期は常に幼稚園に於て問題になるのであ

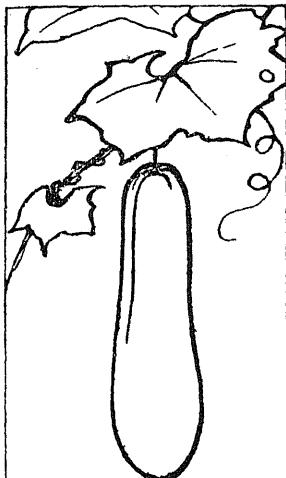
るが、傳染の全く恐れなしと斷定するのはその病氣の輕重によるので一概に定める事は困難で醫師の斷定によるより仕方ない。しかも仲々判定が困難である。全く咳の出なくなる時期は數ヶ月を要するからそれ迄待つこゝも實際上出来ない。醫師の許可があつて登園しても一二三日はマスクをかけさせ暫く監視を怠つてはならない。この注意を怠るこゝ再び園内に流行を見るこゝがある。

其他、轉地後よくトラホーム、流行性急性結膜炎、白癬（しらくもの）の流行を見るこゝがある。これは保姆が簡単に眼結膜を検査したり、頭部の皮膚病に注意することによつて發見出来るのであるから直ちに家庭に通告し他の幼児に感染せしめぬ様にすべきである。

一般に秋は一年中幼児にさつてよい氣候の時であるからこの時に充分積極的に鍛錬して、冬の不利の季節に對する抵抗力養成の時期であるこゝに重點を置くべきである。

八月の幼児童謡

葛原 しげる



八月は夏の終の月ではあります、地球は熱せられて、北半球に於ては、正に炎熱、殊に日中の暑苦しさは、草も木も、萎れるほどです。その中で、獨り、その暑さを悦ん

もし、庭に、此の向日葵でも咲いてるましたら
「あの花にまけない様に」
ごも申しませうか。

向日葵は、太陽の方へ向ひては開く、こゝがつまり、そ

の爲に文字も「向日葵」とかくのですが、實は、一株の向日

キラ～～～田がてり出せば
ニコソ～～～向日葵

葛原
梁田
しげる作曲
貞氏作曲

夢の花が、群れて咲いてゐるのを、厚い、深い、見きしがた
必ずしも、さうではない様です。太陽の方ばかり見上げて

んが、少くとも、日の方へ向いてゐなくとも、強烈な真夏の日を、決して、困らないやうです。

「暑い」乞弱音をはく嬰兒がありましたら、近頃ならば「戦地の兵隊さんの事を考へて、我慢しませうね」といふ所を、

夏の雨は、多く「夕立」である事が特殊です。夕立は、南洋のスコールではありませんが、日中の暑さを洗ひ流してくれて、まことに、清涼剤です。しかし、野遊びをする幼児は、急いで歸らにやなりませぬ。何んに、可愛い目高の子を、小川に見つけてをらうと、野原一面の花が、みんなに美くしからうと、遊んでるではなりませぬ。

—夕立—

森柳禎次氏歌
宮原

ごろ／＼遠くで　かみなりさん
びか／＼光るは　いなびかり
雨雲もく／＼やつてくる
急いで歸らにや　びしよぬれだ

野原は一面　花畠

小川に　かはいゝ目高の子

それだに雨雲　やつて来る

急いで歸らにや　びしよぬれだ

(童謡唱歌名曲全集——一)

夕立を、好むものは、暑さに困つてゐる人間ですが、夕立を恨むものはまづ垣根の外へ出て、おいしい餌あさりをしてゐた鶏共ですね。鶏の中でも、雄鶏は、きつと、きよ

ろきよろ見廻しながら軒下まで走つて歸つて、雨脚に見

れてるでせう。

今一つ、蜘蛛が、怒つてをりませう。折角骨を折つて造つた巣を、壊さんばかりの夕立、しばらくは、眞中の蜘蛛の王座に、頑張つてをりましたが、遂に堪へかねて、逃げ出しました。

鶏と蜘蛛とで、夕立の氣持を出さうとしたのです。わけて

「コケココ、コッコ」と　「んでくる」

「スタコラサッサミ

にげて行く」

の対比は、此の歌曲の生命です。前者は「んでくる」であり、後者は「にげて行く」のです。しかし、人間なら、御尻を端折つて、足袋は脱いで、新しいカン／＼帽は、懐に入れても逃出す所ですから、あわて氣味ですから此の曲は、速くない之間が抜けます。

—夕立—

葛原しげる作歌
小松耕輔氏作曲

一、ビカ／＼光る電
ゴロ／＼なり出す雷に
おぎろき　あわてゝ　垣根を　くぐり
にはさり　にげて　「んでくる」
コケココ　コッコと　「んでくる」

二、ザワ／＼木の葉が　ゆれ出して

バラ／＼ 降り出す 大雨に

八つ脚ひろげて るばつてをつた

大きな蜘蛛が にげて行く

スタコラ サッサミ にげて行く

(大正幼年唱歌第六集)

夕立の後の定石は、虹です。虹は自然界の、不思議であ

り、美しさの極致であり、しかも、それが、氣體であるだけ

に、すぐ消えるものであるだけに、例の文字通りのモメンタルなものではないにしても、しかし、果敢なく消えて何のあざかともなくなるものであるだけに、空間に消える歌の聲と同じに、まことに印象的であります。そして、床しく述べに、また雅に、上なく清らなる美しさであります。ですから、北極のオーロラは知らない児童には、あんな帶がほしく、あんな太鼓橋を渡つて見たいのです。一體、あんな美しい帶は誰が巻き、あんな美しい橋は、誰が渡るのでせう。

それは、汚れたる大人は駄目——聖なる、神の子たる幼児だけ——幼児でなくては、その特權は與へられないもので、きめませうね。美しく、妙なる虹の帶、虹の橋。

——虹
葛原しげる作曲
小松耕輔氏作曲

虹が出た 虹が出た
あれ あれ きれい

七色の大きな虹が 大空に

虹が出た 虹が出た

いろ／＼のきれいな帶が カケハシが

赤 青 いろ
美しや 虹のいろ

(大正幼年唱歌第六集)

夏の谷川には、水増して、くる／＼まはる水車は、夜晝やすます、廻りつゝけて、豆を挽き、米を搗きます。そして、その音は、水車の羽根板が、水に突き入る時、ドブリコであります。ドンブリコであります。そして、車が廻れば、白も廻つて、軌る音は、ギイであります。木の落ちる音は、トンでありますから、ギイトン、ギイトン、ギイトン、景氣のよい事です。これは、曲が、極めて如實に、音で、此の感じを描き出している、愉快です。

——水車——
梁田貞氏作曲

クルツ クルツ 車 水車
豆ひき 米つく 水車

水は夜ひる ドブリコ ドンブリコ
車 たゆます クルツ クルツ クル
白も たゆます ギイトン ギイトン

(大正幼年唱歌第六集)

夏の夕涼みで、楽しいのは、空を仰ぎ見て、星の神祕を感じる事です。大小様々の星が色々と光つてゐるので

お舟も、これは、おもちゃやの帆かけ舟です。その帆柱の

先には、必ず、日章旗をつけておきませう。それが、お池

の水にうつる美しさ、水の中の影までも、キラ／＼、光

る氣持がするではありますか。日の丸の國旗は、こんな

にまで、美しく、元氣がよいのです。彼の「白地に赤く日の

丸染めて」の唱歌もありますが、さうした色の對照の美しさ

は、明確に、幼児が意識して、讃美することは不可能です。

唯、具體的に、直観的に、綜合的に「あゝきれい」なのです。

「イエス」か「ノウ」かの二つの中の唯一つののです。「好き」

か「嫌ひ」かの何れかの唯一つののです。妥協もなく、おつき合もないのです。國旗の美しさに、朝日の昇る勢見せて、

こは、大人の連想です。幼児の連想ではありません。この

「お舟」は、大正三年頃の作です。

——お
　　舟——

葛原しげる作歌

梁田貞氏作曲

お池に浮べた帆かけ舟
帆は 真白で

帆ばしらに

日本の旗が ヒイラヒラ

日本の旗は 日の丸よ

水にうつつて キイラキラ

(大正幼年唱歌第二集)

ます。

であつたのですが、作曲者が、親しく幼児に教へて見て、それでは少しく、間が抜けたからみて、倍の速さに直したのです。その方が星の数も多い事ですし、如實に近くて、まことに結構でした。唯、幼児が、その速さで、歌へるかを少し案じますが、雀の擬聲

「チユン、チユン、チユ／＼／＼／＼チユン」の後半が、小學二三年の児童にさへどうしても舌が廻らなくて歌へない事がありました。が、「ピカ／＼」は大丈夫だと思つてをります。

その不思議は、幼児には感ぜられないでせうし、感じないでも、少しも差支はありませんが、唯、空一面に光る星のめでたさ、美くしさ。見てる中に、涼しい風が吹いて来るこ、一段ご、星の光が、美しく思へるのは、見るものゝ氣持が涼しくて美しくなつたからなのですが、幼児には、そんな事は分りません。唯、美しいだけで結構です。

第一節は、「光れ」といつて、第二節で「光る」と、安心してをります。この、擬聲が、もろは

「空一面に ピカ／＼／＼／＼光れ」

「涼しい風に ピカ／＼／＼／＼光る」

——お星様——

葛原しげる作歌
梁田貞氏作曲

お母さんに
だかれて びいかぴか

ピカ～～光れ 御空の星よ
きれいな色で 残らず光れ
小さな星も 大きな星も
空一面に ピカ～～～～光れ

母さん おるすの星の子は
ひざりばつちで びいかぴか
それでも 泣かずには
びいかぴか

そよ／＼風が 御空で吹けば
きれいな星が 残らず光る

小さな星も 大きな星も

涼しい風に ピカ～～～～光る。

(大正幼年唱歌第七集)

少し、物語めくのですが、星が生れて、母さんが抱いて
ゐたのに、時には、星の母さんは出かけて、おるすになつ
ても、星の子は、一人で、光つてゐるといふのです。

幼兒には、分りにくい物語ではありますんが、されだけ、
興味を感じます」さやら。しかし、かうした想像も、星の
世界——神祕の世界ですから、盛んに、させて見たいもの
ですね。

——星の子——

中村雨紅氏作歌
黒澤隆朝氏作曲

ゆうべ生れた星の子は
今夜は 赤子で ぴいかぴか

「今夜は、よく晴れてる上に、子供達の笑顔も見える
から、それで、私も、おのづから、ニコ～～して来て、
明るい氣持になつたのですから、その氣持が、顔に
も表はれて、明るく見えるんですよ。さうなんですよ。
人間も、心を明るくさへ持てば、顔も明るくなつて、
やがて光る様になりますよ」

これも、大正三年頃の作です。

—お月様—

葛原しげる作曲
小松耕輔氏作曲

お月様 お月様

丸いお顔を ニコ／＼させて

きうして 今夜は そのやうに
明るく お見せに なりますか

子供たち 子供たち

今夜は 雲さへ 風さへなくて

日本國中 たゞ一日

皆の笑顔も見えるから

(大正幼年唱歌第六集)

「その二」は、前の二似てるますが、これは少し、ませた口を利く子供を出しました。幼児にも、かうした一面はありますゆえに——「月夜を親しきは、いつでも善い」とも申します。月光を仰いでゐる、何だが、月を話して見たくなります。月光を話して見たくはあります、月ばかりの話をして見たくてたまらないのです。

どうして、こんななのでせう。

お月様、それは、もし、お家の誰かでもあるかのやうに、話したくなるのでした。もし、ほんこに、もし——もし、お月様が、お家の誰かであつたら、誰に當るのでせう。こ

んなに美しくて、こんなにやさしくて、しかも明るい人は、
お家の誰でせう。
考へて見ても、お家に、お月様に當る様な方が無くては、寂しいですね。

—圓い明るいお月様(その二)—

葛原しげる歌
弘田龍太郎氏曲

まんまる まるいお月様

明るい／＼お月様

私は

あなたを見てます

お話をしたくて たまりませんの

お月様 お月様

あなたが もしも人ならば
お家の誰かで あるならば

あなたは

私のお母様

それとも やさしいお姉様でしょか

お月様 お月様

(幼年童謡集二)

花には嵐、月に雲、とかく浮世は、なき、これは大人の世界のセンチメンタリズムですが、幼児は、空に雲の飛んでゐる夜の月は、月が、出たり、かくれたりするのが、而

白くて、見飽くことはありません。そこで、遂に、大それた慾を起して

「お月様、遊びませうよ」

と申込んだものです。下界の幼兒の聲は、月宮殿にも、はつきり聞えましたので

「よろしい。何をして遊びませうか」

「お月様はさつきから、空で、誰か隠れん坊をしていらしたんではありますか」

「なに、獨りだから何もして遊べませんよ。唯、雲から出

たり、はいつたりして見たゞけですよ」

「ぢや、かくれん坊いたしませう」

「よろしい」

そこで、下界の幼兒は、天界のお月様、ジャンケンをして、鬼になつたと見えます。第二節が、狙ひなのです。

「見つけましたよ、お月様

雲の中」

といふ、少しも惡びれないで、出て来てニコ々としていたらつしやるのでした。此の笑顔の氣持よさ。世の中の大人の凡てが、幼兒へは、このお月様のやうでありたいのですね。

——お月さんと遊ばう——

葛原しげる歌
小松耕輔氏曲

お月さんと遊ぼ

かくれんぼして遊ぼ
ジャンケンボンよ

お月さんを見つけた
雲にかくれたお月様

出て来て ニッコニコ

(童謡唱歌名曲全集一)

月の中には、兎がるるといふのです。満月の中には、兎が杵振上げたと見られなくもない影が見えるのですが、兎をお月様の使とは考へ易いことです。少くとも、月の夜兎は、兎蹄もしたいこでせう。はねても見たいこでせう。ですから、「はねじまん」なのです。しかし、その理由は、分らないのです。はねてさへをれば、それでよいのです。この山五つ、谷七つ、なごは、幼兒には分りにくい好みかも知れませんが……。

うさぎ うさぎ

何見て はねる

十五夜 お月様
みてはねる

さは、昔の童謡で、今日、琴唄にさへなつてをります
ほり、兎三月さは、まことに古くから、結ばれてをります
ね。

——月夜の兎——

びよん／＼兎は なぜはねる
なぜだかしらない はねじまん

月夜の晩なら 山五つ
七つの谷まで はねて行く

谷間は深かろ 月夜でも
七つの谷から きこへ行く
きこへも行かない はねじまん
びよん／＼はね／＼ またかへる

(童謡唱歌名曲全集一)

昔から、有名な月の唱歌が、幾つもあります。『出た／＼
月が』もありますが、「盆の様な」さいふ形容に、多年、私は
抗議を抱いてをりますが、しかし、面白い比喩です。

これは、月の形の變化する事を扱つたものですが「櫛の様
に」さいつても、つげ櫛を知らない今の幼兒には、少しく不
向ですが、曲も極めて幼兒向で、すてられない歌曲だと思
じてをります。

石原和三郎氏歌
納所辨次郎氏歌

中山 晋平氏歌

——お月様——

お月様 えらひな お日様の兄弟で
三日月になつたり まん圓になつたり

春夏秋冬 日本中をてらす
春 夏 秋 冬

お月様若いな いつも年をさらないで
櫛の様になつたり 鏡の様になつたり

春夏秋冬 日本中をてらす

(童謡唱歌名曲全集一)

お月様の不思議は、見るものと一緒に歩いたり、停つたりするこゝ、又、圓くなつたり、三日月形になつたり、西瓜形になつたりするこゝです。この歌曲は、前の三同じく、かなり古いものですが、今でも、教へられたいものゝ一つです。

「お月様は、をかしいな」

は、「可笑しい」ではなくて、「不思議だよ」の意であるこゝ、申すまでもありません。

——お月様——

永廻藤一郎氏歌
田村 虎藏氏歌

お月様 お月様は をかしいな
わたしが歩けば お月さんも歩く
わたしが止まれば お月さんも止る

お月様は をかしいな

お月様 お月様は をかしいな

圓いこ思へば 次第にかける

かけたこ思へば 次第に圓い

お月様は をかしいな

(童謡唱歌名曲全集一)

月の古謡の中に

お月さん なんぼ

十三九つ

こは、私の郷里の方にあるのですが、これが、東京その他では、

お月さん いくつ

十三七つ

こ歌はれてをります。「なんぼ」^シ「いくつ」^シは、地方によつての、數の問ひ方ですが、「十三九つ」^シ「十三七つ」^シその差は、さうして出來たでせう、系統を調べて見たく思つてをりますが、その次が

「そりや まんだ

若いぞ」

さいふのですから、若い方がよいでせうか。それは兎も角として、この月の唄は、全國的であることをでも分るこほ

り、月は、皆好きですね。

○

最後に一篇、ロシャの童謡を添へておきます。これは、如何にも、理窟ぬきの、素朴な物のいひ方で、甚だ愉快です。蟬が八匹、蜘蛛が三匹といふ數の決定は、どうしてしたものか分りませんが、

こいふのが、理窟ぬきに面白いではありますか。

——蟬と蜘蛛——

葛原しげる譯歌
ロシア名曲

小さな蟬が 八匹よつて
天井板で をぎりをするこ

大きな蜘蛛が 三匹をつて

お目々をさまし 驚き落ちた

(大正幼年唱歌第十二集)

毎日の保育問題

上澤謙一

三八

はしがき

毎日保育の實際に當たつてゐると、毎日問題にぶつかる。然しそれを延期し、回避することはできぬ。研究室での問題なら「いづれ研究してから」でその場は済むが、活きた實際の保育室ではそれは許されぬ。根本的な解決は兎に角、一應の處置をせねばならぬ。それをノートしたもののがこれである。果してその處置が適してゐるかどうか。自ら物足らぬこともあり、不安なこともあり、悔ゆることさへある。大方の示教を切に待つ所以である。敢てこれをこゝに發表するのも、そのために外ならぬ。

一 國旗掲揚の綱が切れて 每朝、國旗掲揚のボールのまはりへ、先生と園児と並んで、國旗を掲げる。或る朝のこと。旗を結んで掲げる綱が、ズッツリ切れて落ちて、足下へ蛇のやうにトグロ巻いてしまつた。子供達はハツミする。「困つた」といふやうな表情が、先生達の顔に

浮かんだ。その時である。一人の先生が、元氣な大きな聲でいつた。『このお庭の中にあるもので、それが一番長いだらう。みんな見てごらん』

子供達はグル／＼見はした。

『一番長いものへ旗をゆはえつけて舉げようね』この言葉で、見まはす子供達の心に、急に熱と興味が湧いてきた。

『さあ、みんなさがしておいで』みんなバラ／＼かけ出す。やがて三本の棒と竿を、二三人づつで持つてくる。ほかの子供はワイヤーあさからづいてくる。ちよつて見て、それが一番長いか、先生にはすぐ分かる。けれどもさうはないはない。その代りにかういふ。

『よく持つてきたね、有難うよ。さあ、それが一番長いからべて見よう。持つてゐる者はちやんとまつすぐに立てて。それからほかの者はその前へ並んで、よく見て』この言葉の中には、動きを犒ふ意味もある。長いものを

二三人でまつすぐに立てる協力と工夫の訓練の意味もある。長短を測る觀察指導の意味も籠つてゐる。三本は七人の手によつてまつすぐに立つた。前に並ぶ大勢は、じつとそれを見つめる。

『あれが一番長い』と、数人が一度に指さしていふ。『あれ

／＼』と、みんなそのあとにつく。その通りだ。

序でに先生はかういふことを忘れない。

『ちやあ、一番短いのはされ』

出来るだけ觀察の結果を表現させて、その力を強める手だてである。

『それが一番短かい』と、大勢の答がある。これもその通りだ。

『ちやあ、これへ旗をつけよう』

分かりきつたこゝだが、先生は猶聞く、飽くまでも子供達の考へを勵かすためである。

『その一番長いの』

異口同音に、叫ぶやうにいふ。

この際、持つてきた三本に對して、いきなり先生が『これが一番長いから、これに旗をつけます。その二本はいいです』といつたらどうだらう。失望する子供もあらう。落胆する子供もあらう。折角探して持つてきた努力が、簡単な否定で酬いられては、さうなるのも無理はなからう。

けれども、かうすれば自然に滑かに、何の凝滯も曲折もなく事件が運ばれてゆく。子供達自身を動かせるこゝは、かういふところにも功徳がある。

『さあ、お當番がゆはえて』

ここに至つて、毎日のいつもの順序に還つたわけだ。一人のお當番は進み出て、衆人環視のうちに國旗を結びつける。いつも綱が竹に變つただけである。やがて結びおへた。

『さあ、その竿を、ボールへねはへつけようね、ほら、そここに落ちてる綱でね』

掲揚綱は臨時にしばりつけ縄に早變りする。お當番の二人に大きな子供が三人程如はつて、先生がちよつと手を貸して、ボールへしつかり竹竿をくくりつけた。國旗はひらひらさひるがへつた。

思ひも寄らない事件の経過は、竹の先についた珍しい有様とは、子供達に新しい興味を起させた。旗はいつもより遙かに低かつたけれども近かつたので、かへつて親しみを感じさせるやうに見えた。

みんな喜んで手をだたいた。さうしていつもの歌をうたひ出した。

『白地に赤く、日の丸染めて、ああうつくしや、日本の旗は』

二 引込思案な子供の机運び

長い机をかたづける。力を出せば、先生ひとりでかたづけられないことはない。けれども、子供達を動かせようとする。

『さあ、誰か、先生のお手傳ひして、いつしょにかたづけてくれますか』

お手傳すきの子供が三人、ひびきの物に應するやうに『がたづけます』と返事して、さび出してくる。引込思案のTちゃん、だまつてじつゝ見てゐる。

「さうだ、Tちゃんのこぎを動かせてやらう。よい機會だ」さう思つた先生は聲をかける。

『Tちゃん、Tちゃんもお手傳してちやうだい、ね。みんなで持つてゆきませう』

するご、Tちゃんは身體をうねらせながらも立上がりつた。さうしてほかの者と同じやうに机へ手をかけた。

「うまい、占めた！」

さう思つた先生は又聲をかけた。

『わあ、持つてゆきませう。よつしよ、よつしよ、みんなよく運べるねえ』子供達はすぐその聲に應じた。

『よつしよ よつしよ』

机は輕々と運ばれてゆく。

けれどもTちゃんのかけた手は、机がうごき出さ、すぐ離れた。そのまま引きづられるやうについてゆく。時々チラツミ手が出て机を持つけれども、すぐ又離れる。否、

それは持つてゆきよりは、そつこさはるといふ方がほんとうだ。机は次の部屋へ運び込まれた。先生はみんなに『御苦勞さま、有難うよ』といふ。Tちゃんには殊に強くいふ。ほかの子供は、先生にいはれてニッコリするけれども、Tちゃんは寧ろぼんやりしてゐる。ほかの者よりも強くいはれたのだけれどもぼんやりしてゐる。

さうしたのだからうか。消極的な性質のためだらうか。先生はその時さう思つて、何の氣もなくそれで済ましてしまふ。けれども、いかに消極的な子供でも、ほめられてお禮をいはれて、うれしく思はない者はない。ニッコリしないものはない。もしさういふ場合にさういふ反應を示さないさするならば、その子供は全くの白痴か、放心状態の病人かであらう。「ほめられるといふことは、幼児に取つては日光のやうなものである。痴聾と見做される程の者でも、ほめられればニッコリする。この際Kちゃんがぼんやりしてゐるのは消極的な性質のためだけでは済まされなくなる。

それならさうしたのだからうか？

一言でいへば、Tちゃんはほめられるわけ、お禮をいはれるわけが分らなかつたのである。Tちゃんは實際はその机を運ばなかつたのである。その手はおづく機にさはつただけではないが、しかも引込ませてゐた方が多かつたのではないか、さうして寧ろやむを得ずついて行つたのではないか。謂はばうろくさ、我にもあらずうろついて行つ

たに過ぎないのではないか。

蓮ぶさは、手傳ふさは、自分の力を出すことである。そこに満足があるのである。その力を出したことが役に立つた。人のためになつた。それでいよいよ満足があるのである。それを尊敬する先生から認められ、ほめられお禮をいはれた。それで益々満足が加はつてニッコリするのである。

ところが、Tちゃんはお友達の中に交つて、同じやうに行動しながら、力も出さないし、少しも役に立たなかつたのである、幼児だからまだ恥かしいといふ感じはなからうが、何ごなく物足りない詰らない感じは禁じ得なかつたらう。或はもきかしいやうな感じもしたかも知れぬ。そこへいきなりほめられお禮をいはれたのだから、そのわけが分らなかつたのも當然であらう。だから、いかにも唐突なそぐはない氣持で、ぼんやりしたのも當然であらう。

この先生が消極的な子供を特に注意したのはよい。さうして機会を捉へたのはよい、獎勵を與へたのもよい、特に強くお禮をいつたのもよい。すべてよい。

けれども肝腎なところでの一つを缺いた。それは引込思案なこの子供に、實際に即した具體的な指示をしなかつたといふこゝである。獎勵は言葉の掛聲に止まつて、行動の上にまで及ばなかつたといふこゝである。

『Tちゃん、その角のところを持つてね。両方のお手々でしつかり持つて』

こういふ具體的な行動にまで徹する指示が必要だつたのである。

『さう、よく持つたね。力を入れて、一生懸命持つてゆきませう、さう』

よく持つか、力を出したか？それをたしかめつつ獎勵する——それだけの注意が、更に必要だつたのである。

引込思案な子供は、呼ばれて出てくるこゝだけが大變な奮發なのだ。さてここを持つか自分で決定して、自ら力をふり起してそれに従事するなごは、到底思ひも寄らぬこゝである。だから、この子供にほんとうに物を運ばせるには、呼び出しただけでは足りない、言葉で獎勵しただけでは足りない。實際に持たせて力を出させるこゝまで、はつきりとしつかりと指導しなければならぬ。さうしなければ、運んだこゝにならないで、ただよた／＼いくついて行つたこゝになつてしまふのである。

かくて折角企てられた適當な意味深いこゝも、ただその一つを缺いたために、その子供に更にチグハグな感じを與へ、物足りない経験を齎らす逆な結果になつてしまつたのである。

恐らくこの子供は、又いつかよい機会がめぐつてくるまでは、呼ばれても出ないのであらう。まことに保育を申すものは『重箱の隅を針でつつく』以上の細心な注意がいるものなのである。

保 育

紙芝居の生かし方

—實演さいふ事について—

砥 上 峰 次

保育の上に紙芝居を取入れる方法は、色々あります。即ち作品として供給されたものを子供達に見せる。子供達お互に實演發表させる。我々の手で、又は子供達協同して、或は素朴な児童畫で描いたり、塗繪したり、切紙で貼る。其の素材の取り方に色々な角度から色々な方法が考へられます。

其の作る、作らせる方面は又別の機會にして、今最も一般的に普及利用されてゐる既製作品を保育上の教具として如何に取扱ひ、生かすか

保育の上に紙芝居を取入れる方法は、色々あります。即ち作品として供給されたものを子供達に見せる。子供達お互に實演發表させる。我々の手で、又は子供達協同して、或は素朴な児童畫で描いたり、塗繪したり、切紙で貼る。其の素材の取り方に色々な角度から色々な方法が考へられます。

誰にでも、簡易に出来る紙芝居の實演が、其の容易さの故に、輕舉な取扱になり易い事は最も注意しなくてはならない點で、其の爲には一應紙芝居の構成を考察しなくてはなりません。

紙芝居は繪畫させりふが出来て居り、それを舞臺に入れて實演をする。即ち基本的な要素は、繪させりふ(説明)と實演、それを用ひる舞臺です。

繪させりふは既製のものは相當周到な注意が拂はれて作られており、對象に應じて或程度の説明を變へるとしても、繪は決定的なものですから一寸手は出ません。

然し實演は、作品として出來上つてゐるものを使ふといふ事で、最初から大きな制約の下にあることはいへますが、如何に藝術的に而も指導性を持たせて作られた繪畫的、文學的要素機能も、只それ丈では效果は上げ得ないので、之が實演される事によつて、此の二つの要素が巧に結合してより綜合的な藝術性をかもし出すものである事は紙芝居の

さいふ點を考察して見ます。

詳細に述べますと紙芝居の構成から演技、裝置一般に亘り非常に複雑なものになりますが、誰にでも、何時でも、何處でもやれるといふ點から、全然初めての人々にも、直ぐに役立つ所謂一般的に言へば實演入門、保育上の取扱の基礎について考へて見ます。

實演の最初から最後迄考へられなくてはならぬ重大な事であり、これは紙芝居の根本的理義に關することです。

紙芝居を創作するものは、繪の變化、説明その間の連絡融合を嚴密に吟味して行きますが、其の時基準となるものは、實演技術であり、實演される時の效果を豫想してかゝつてゐるのです。

茲に私は端的に言ふ繪嘶と紙芝居の區別を無理に考へて見たいのですが、此の場合の繪嘶といふのは、繪の理解、鑑賞の爲の説明であり、話の補足としての繪であつて、視覺的效果と聽覺的效果は獨立して、何れかゞ重視されるか、何れも同等に考へられるのである。獨斷かも知れませんがさう規定する。そして紙芝居は、繪と言葉は獨立せず渾然一元化してより高次の綜合的效果を期待してゐるものと考へたいと思ひます。繪畫と文學の持つ藝術性を、一層立體化して演劇的藝術性にまで導いて行くのだと考へていたいのです。

この事はたゞへ對象が幼児であるにせよ、紙芝居自體から言へば一般的に言へる事です。

紙芝居の實演がかうした重要なことをまづ念頭に置いて技術について述べる所を、研究して見ていたゞく事にしませう。

× めくり方 ×

紙芝居の繪そのものは動かない。而も之を動的に感じさせ、人間の感情をゆり動かして行かうとする。それは紙芝居の構成に於て、夫々具象的に表現され、それが生命ある如く感じさせ、本來能動性を持つ様に不自然なく感じさせる様に出來てゐる事は勿論重要ですが、あの舞臺の中に一つの世界が形作られ、見てゐる者は、言葉を繪によつて知り、感じ、常に暗示によつて發展的に想像を働かせて進んで行く。こゝで重大なのは画面と説明をさうして間隙なく融合させて進めるかは、技術的には画面の變化——めくり方にかゝつて来るといふことです。紙芝居が作製される時は、場面々々の事情に應じ、普通に、静かに、ごく静かに、急に、稍々急に、最も急に、めくりつゝ(言ひながら)中途迄、中途で止める、紙をめくる、サシコミをめくる、等、嚴密な指定をして行きます。紙芝居の實演で、言葉、抑揚、テムボは勿論重要ですが、このめくり方が如何に根本的な事であるかは、まづ他の人の巧拙二種の實演を見られるごく感じられる事です。

殊に小さい子供達は、與へられた材料(展開された今の世界)に従つて、その中に入りこみ、今迄に收得した種々の想像經驗の世界の中から色々のものを引出しては、次々に想像の世界を發展させて行つてゐるのです。劇的な構成から言つても、此の子供達の心理的な活動から言つても、實演

に當る人の第一に注意すべき事はめいり方で、これも紙芝居構成とそれに伴ふ技術の研究の根本的事項です。

× 舞臺と實演の場所 ×

舞臺は紙芝居になくてはならないもので、これは一つの別の世界を作り出して來るので、この舞臺の裏にすつかり姿をかくす方法で、從來一般の方法として見られる側に立つ方法であります。幼兒の爲の實演には、子供達と一緒に見ながら説明しつゝ（説明といふ言葉の感じは紙芝居の實演の場合ピッタリしませんが）操作するのが無難な様です。それは子供達は先生や實演してくれる人への信頼が強く、姿が見えない不安いふか落つきを持ちにくいくらいふ感じがある様に思へます。

然し一般の人々には純然たる紙芝居の鑑賞の爲に——心理的に注意の集中からも——姿をかくす方がよいので、姿をかくして而も尚見る人々が決して退屈せず、紙芝居の世界に入り切る様に又構成を考へて作つて行くわけです。

特殊な場合、即ちその紙芝居で何事を強く知らせようとか、記憶させようとする場合は側で徹底的に取扱ふこそもありますが、一般的の場合は側に立つても子供の注意圈内にある事が必要で、あまり舞臺から離れるべく、さうしても實演する人の顔、口元に注意を拂ひ見てゐる子供達の目の運動も大きく、紙芝居の世界にすつかり入りこめないとい

ふ事になります。又紙芝居をやりながらゼスチュアは禁物です。

私は幼兒には、幼兒の心理に即した内容と構成を持つた紙芝居を作り、裏にかくれて、全く紙芝居に見される、その世界の人になり切つて了はせ、その中に人間的な又藝術的な感動と感受を與へる事も必要であると思ひます。極端に言へば側に立つてやる紙芝居とかくれてやるそれとは又自ら構成が別になること考へてゐます。

殊に幼兒に精選された言葉を與へるといふ意圖を持つ時、裏に正確な記入をなし置いて的確に之を感じせしめようとする場合、又特に伴奏を用ひる場合、殊にうるはしい雰囲気をかもす爲の名曲伴奏等の時、紙芝居だけに子供達を對せしめる事はよい事で、これが爲人格的接觸が滅殺される云々といふ事はない筈です。

× 練習方法 ×

今の紙芝居は繪があり裏に説明がついてゐる爲、或程度迄誰でも出來ますが、これでいふ處迄は仲々達しにくいことは誰しも感じてゐられる事でせう。鍛錬すればする程上達します。それは紙芝居を根本的に理解して來るからです。尤も紙芝居は人と人との接觸の媒介となり實演する人が對象の性質をよく知つて時宜の取扱をなす、作品を充分理解する事は紙芝居による保育等では特にその意味で重要で

す。然し紙芝居實演技術自體はその效果を一層高めるものですから前述のめぐり方用ひ方を注意して練習し、良心的に子供に與へて行くべきであります。

まづ人にやらせる事も参考になりますが、説明をよく研究し、次には、鏡の前等でめぐりつゝ實演し、初め少數の人々に見せて大體よいといふ處で大勢に見せる迄に注意して行かねばなりません。

× 用ひ方 ×

一種の作品でも、取扱方で何回でも同じ子供に見せて夫々別の興味を持たせ得るものであります。

單純な實演、唱歌に合せる。リズミカルな調子にする。

先生ご子供ごで役を持つ、子供達にやらせる、色々あります。

子供達に語らせ、めくらせ、先生は子供の席に入りこんで一しょに見るといふ様な場合、何とも言はれないよろこびを持つものです。

實演の前に場内整理をする、實演場所を、子供の人数、光線によつて考へる、後の掛圖等を外して邪魔にならぬ様にする等、これは紙芝居の效果を擧げる共に、さうした先生の周到な注意は作品ご子供達に對する大きな親切です。

實演の音聲、調子、アクセント、断續、發音等は幼児の言語訓練上特に重要視して夫々の方針に基き考究されなく

てはならない問題です。

實演の前の取扱、實演後の取扱、反響感銘テスト等も保育上の取扱としては重要ですし、又室内、屋外、野外に持ち出して、或は談話の中に、唱歌に、自由遊びの中に色々な場合、夫々の方法で紙芝居は生かされる道はいくらでもある筈です。

子供達に作らせる、塗らせる、切貼させる事による紙芝居の構成を真剣に研究する時、更に保育の方法としての紙芝居の使用の範囲は廣まり、價値は愈々大きなものがあります。此の事は已に實證されてゐる事です。

紙芝居の感銘調査、紙芝居を見る觀衆としての子供の心理、幼児紙芝居の繪と言葉等詳細述べますご幾多興味ある問題もありますが、今回は所謂、手元の紙芝居を生かして使ふ上の事項を簡単に述べる程度にまとめました。

(日本教育紙芝居協會主事)

フレーベル賞

童謡の作曲と 私の追憶

二 孝 宅

今度フレーベル賞の爲に、
應募した童謡の作曲を主として、
児童遊戯の作曲を、
子供好きの自分にさして頂いたので、實に愉快に仕事
をした。戸倉先生の振付け
に隨つて一曲づゝ出来上つた。

ならなくなり、次の曲を作り始める云ふ風で、前の曲が充分出来上りもないのに次の曲にかかる云ふ位まで丹誠を凝らし、一ヶ所でも氣に入らない御飯も充分咽喉に通らないのではなか、心配する位の熱情に、幾度か恥しい思ひをしたのだが、それでも如何に面白く仕事をしたか、此れで説明される。先生から「もつこ子供の氣持に歸つて」、一度々御注意を受けた度に、嘘の技術にあくせくしてゐる大人の憐れさを恥しく思つた。いらいらしたり、むしやくしやしたり、ブンブンしてゐる時なぎは、同じフィギュアの音符を置いても優しい感じがないし、捻くり廻して考へて、一晩かゝつても、最も單純で、美しさの滴たる様な一小節のメロディーも出來ない、結構見上げるのであった。これが、云ふ幼稚園の叔父さんだ、聞かされた

云ふ事になつた。戸倉先生も即興の時のが一番好いて下さつた。此んな仕事の正直さには眞實敵はない云ふ氣があつた。然し私の様なものが純真になつせた様子であつた。戸倉先生の飽くまで丹誠を凝らし、一所でも氣に入らぬ御飯も充分咽喉に通らないのではなく、見苦しくもあるだらうか、優しい氣持になつたと思つた瞬間でも、子供に三つて何んなに不自然でつまらなく、見苦しくもあるだらうか考へる、子供の遊戯を作曲するなぎは、全く鏡を研く様なものだ、此んな有りふれた考へも今更しかし感じるのであつた。

私の通つた幼稚園の遊戯室の壁に、茶色に褪色して了つた様な、外國人の叔父さんの寫真も肖像もつかない額が掛けられてあつた。ギロリとした眼が氣味悪くて、何かこつそり先生の眼を盗んで悪い事をした子供を見逃さぬぞと睨むである様であつた。それで一寸嘘をついた時は、その後で恐はごは見上げるのであつた。これが、大分大きく成つてから、フレーベルさ

のを憶えてゐる。小學校の中に幼稚園があつたので、尋常六年生まで度々此の叔父さんに見られたのである。今日になつて、亦フレーベル叔父さんご何かの關係が出来る云ふのも不思議な因縁の様な氣がする。若し私に子供があつて、幼稚園のお世話にでもなつてゐたら、或は、何時もニコニコしてゐられる倉橋先生の御眼でもフレーベル叔父さんの眼に見えるかも知れない。いつれ私の様な者の子供なら、嘘の一つや二つは上手につくかも知れないから。

何日かの集團勤労日の朝、例に依つて校庭で保健體操(?)が行はれて、一人のリーダーを見習つて、職員、生徒全員が清らかな空氣を切つて腕を振り廻してゐた時の事である。何しろ其の日の體操は私に取つて目新らしいもので、ラヂオ體操よりも複雑で、もつとも美しいフィギュアーから構成されてゐる様に思つた。けれども何うしてもリ

ーダーに従いて行けなくて、左右が、あべこべになる事は勿論のこと、飛んで腕を突き出す様な始末に、眼を皿の様にしてリーダーのする、次のフィギュアーを待ち構へても追つかない醜態で閉口して了つた事があつた。けれども夏でも冷たい、早朝の肌ざはりの好い空氣を一杯吸ひ込んで『頭を後ろに』で空を見上げる時など、精神的に大概の病氣は全快して了ふ位の氣持が好い。實際二、三回位のそんな事をしても、大して健康になつたわけでもなく、青い顔色に、血色が出よう筈も無いのだけれど、全身の血が足の先まで鮮かな色になつて行くのが想像されて、其れ

二つ三つのものの中で、お馴みのメロディーに『結んで開いて、手を打つて結んで』『云ふ歌詞をつけて唱ふのであつた。そして最後に『その手を上に』とか『下に』とか『胸に』とか『膝に』とか唱ふリフレインがあつて、其と同時に手を擧げたり下したり胸へ當てがつたりするのであるが、其の順序がごつちやになつて間違つて了ひ、人より後で手を擧げたり、大體此の方角と思はれる所へ手を差し出してそのうちに先生のを見て手を直す等『云ふゲリラ戰術を使つた事が、丁度何十年か後の今同じ様であるのを思つた。そして追憶が其れから其れへ繰り広げられるのであつた。

小學校や中學校で覺へた事は、其の年代に比例して見事に忘れても幼稚園での事は、すつゝ昔の事にも拘はらず大分憶えてゐる。フレーベル氏の大

美しいフィギュアーから構成される事と一緒に、一番判然り思ひ出すのは、さきな眼玉はまだありありと見えるし、丁度幼稚園の遊戯で、未だ覚えてゐる小學校の門側にあつた、何百年の年を

取つてゐるこも知れぬ大きなお化け銀杏の樹幹にあつた穴の恐ろしかつた事や、園長先生の金縁眼鏡の上から覗く目が、我々の第二幼稚園から、市の中央第一幼稚園に轉任されてからの方がすつゝ親しみを懷しさが増した事や、大柄の脊の高い横田先生と小柄の金子先生の間にぶら下つて、もつゝ水平に吊り上げて呉れこ駄々を捏ねて金子先生を困らせた事や、お辨當を引くり返して先生のを分けて頂いた事や、冬には大使さんが皆の辨當を湯で温めて呉れて、其れを待つてゐる間、オルガンに連れて皆机の上に顔を伏せて目を閉ぢて寝るふりをするので、待ち切れないので自分の辨當を見たりする子はお行儀が悪い事になつてゐた。私の辨當は家が近いので女中が晝の時間に温いのを持つて來て呉れるのが、やはり皆と一緒に湯で温めて呉れる様にと使さんを責めてきかなかつた事等思ひ出すのである。

杏の樹幹にあつた穴の恐ろしかつた事や、園長先生の金縁眼鏡の上から覗く目が、我々の第二幼稚園から、市の中

町は古い陰氣な空氣であつたのに較べて幼稚園の中は實に明るくて和やかであつた。

町全體に空地も無くぎつしり詰つた低い家並、二階家も出来る丈け低めて正面からは目立たない様に出来てゐて

それが十年程前から科學工業や軍需品工業が急速な隆盛を見て、何か活氣りこくつてゐる。しかし木口はよく建築の様式も一定してゐて、これは古い頃からの地廻りの大工の手になるものであつた。建て込んだ家々は、昔の時代から町人に當がはれた地割によるのであつた。狭く、狭くと追ひ詰められた家畜の様であつたが、そこで野心と氣概に富んだ町人の歴史も作られた。けれども所詮は制壓されたものであつて、町人に課せられた壓制的な連帶で互に牽制し合ひ、町人の自治が表面赦されざるといふ始末であつた。産業の發展が餘り活潑でなかつた長い時代に、

今は大分變つたが、其頃の郷里堺の町は古い陰氣な空氣であつたのに較べて幼稚園の中は實に明るくて和やかであつた。町全體に空地も無くぎつしり詰つた低い家並、二階家も出来る丈け低めて正面からは目立たない様に出来てゐて、一種古めかしい氣風を得て居つて、一部を占有し續けてゐた町人都市とし

て、一種古めかしい氣風を得て居つた。それが十年程前から科學工業や軍需品工業が急速な隆盛を見て、何か活氣りこくつてゐる。しかし木口はよく建築の様式も一定してゐて、これは古い頃からの地廻りの大工の手になるものであつた。建て込んだ家々は、昔の時代から町人に當がはれた地割によるのであつた。狭く、狭くと追ひ詰められた家畜の様であつたが、そこで野心と氣概に富んだ町人の歴史も作られた。けれども所詮は制壓されたものであつて、町人に課せられた壓制的な連帶で互に牽制し合ひ、町人の自治が表面赦されざるといふ始末であつた。産業の發展が餘り活潑でなかつた長い時代に、

外國との貿易が中世都市の生命であつたり、運動場も附近の町家を買ひ

足して一町四方になつて居り、場内の隅には立派な體操器具が具へられて如何にも一見して教育法が進んだ様な感じを受けた。その反対にあの様にも偉大に一疊敷はたつぱりあつたお化け銀杏は枝の半分は折れて、貧弱になり、コンクリートの地面の中に淋しく、何の怪奇や傳説の存在も許さない感じであり、丁度堺市全體の變貌の縮圖であるかの様に見えた。

幼稚園の方は小使さんが一人居たきりであつた。あの頃は未だに陰氣な古風な町ばかりで、町の權勢も舊時代の產業に携さはつてゐた者達にあり、私達には我世の春であり、いざもほんやりと暮してゐた。随つて町人の町さしての口うるささもあり、輿論ごいふものが強く作用して居た。利害に敏い反面はまた、人のそれにも鋭敏であつて、市の行政にも時折驚くべき進歩したものが現れてくる。

そんな事から計りでも無からうが教

育設備も仲々良く、義務教育も整備し、幼稚園も隨分古くから市の經營で設立されてゐて、第一幼稚園と云ふのは恐らく明治三十年代からそれ以前と想像される。四十年代に這入つては既に第二幼稚園が、家の近くに出来た。即ち私達の通つたものであつた。現在では第三まであるそうである。

お隣りの大坂に刺戟され、競争したからか市の施設は仲々贅澤であつた。

其の一例として今から二十年も前には既に全市の小學校全部に獨逸製で世界最高ピアノであるスタイルンウェイ、やベッヒスタイルンを各々備へた事でも解る。それも皆大きなグランドであつた。私の小學校もスタイルンウェイのサロ

ン、コンサートの堂たるもののが備はれていた。そして今頃はザイラーもザラザラして了つてゐる事だらう。其後幾星霜を経て、最近聞く所によると、絶對音感教育を取り入れ、今回、東亞發聲ニュース映畫研究所が其の實際を錄音映畫に修めたと云ふ事である。

個人は保守的に思はれる此の町の習俗で、自治機關には社會的な責任を負ふべき對照をなした不思議な光景ではせてゐる所も見られる。けれど兎も角進歩性が充分仄めいてゐるのであつた。その爲第一幼稚園でもピアノが懲しい事になつて、私が大阪まで選定

私が幼稚園へ上つたのは明治四十何

年で前述の様に小学校の中にあつた事にて未だ學齡にも達しないのに小学生並に校門を潜つて通園するには誇らしい氣分で、得意に感じてゐた。其れを思ふと自分を誇る云ふ氣持は子供には相當強いもののやうに思はれる。随つて、そんな風であるから羞恥心も充分備はつてゐたと見ねばならず、威張つたり、羞んだりは子供の日常では出鱗目に多いものである。そして、幸ひにも第二幼稚園は立派な經營であつて、決して貴族的であつたり、甘やかせたりする幼稚園で無かつた事に感謝して居るのである。

祖先の堺町人の勇敢で厳格なエスプレリの名残りでもあらう。此の市として嚴格に制度化され、殊に總ての幼児に對する均等な機會は得が度いものである。舊式に、いさゝか貴族的な育て方をされてゐた自分の幼時に、幼稚園へ通ふ云ふ事は何なんに樂しかつたか。それ許りでなく自分が偉くなつた

様な自負を持つたのであるから、其頃には一種の社會性に目覺めたといふ事があるので、幼児の志向からしても幼稚園の制度化云ふ事が何なんに良い事か知れないと思ふ。けれど何れにしてもこの時期には情操教育と集團的な規律の習慣が最も重要な事であるだらうし、凡てこの二つの方向に還元されてもよいと思はれる。慈愛と愉しさと規律の機會を自分たちの幼児に持つて得た感謝は、何んなに嬉しいものであるだらうか。

私の恩人の横田先生は、今では保姆もさつゝの昔にやめられて、堺市の幼稚園の顧問の様な事をして居られて悠

て居られないものである。健康さうで血色がよく、ふつくらしたお顔は、倉橋先生の艶の好い元氣な御様子に一脈相通するものがある感じであつた。そして私が、座にゐた友人や朝日の人達に紹介したら、「嫌や嫌、そんな事云はれどもこの歳が解ります。けれども、本當に大した腕白さんでしたよ」と私を指されてもよいと思はれる。慈愛と愉しさと規律の機會を自分たちの幼児に持つて笑はれた頬には、昔懐しい髪が矢張り現れたのであつた。嘗つての私はあの歴が現れたら、何んな悪戯をしても絶対に叱られない事をよく知つてゐたものであつた。

フレーベル賞入選の童話・童謡は引きつき毎號掲載の豫定でございますが、本號は紙數の都合で割愛の餘儀なきに至りました。御諒承下さいませ。

(編輯係り)

九月の保育

及川ふみ

第二保育期

させる事にする。

六十餘日の長い休暇で、幼児たちの日常生活に多少の變化があるので身體的にもその發育の状態に影響がある。休暇中に一層健康の増進を見て、身長

體重さもに一段と増加したもの、或は身長のみ増して體重のさもないもの、休暇中の罹病のため發育の不充分のものなどもある。この外の點で全體としてしばらく幼稚園生活から離れていたため、第一期間につけた習慣も少し下り坂になるのが一般であるから、この點特に留意して早く

幼稚園生活の常態に復

盛夏の候は戸外の遊びも長い時間つけられなかつたが、秋空高きこの好時期には出来るだけ外遊びを多くしたり、雑草しげる草原に、ばつた、こぼろぎ、さんぽなさがあり、遊び疲れゝば砂場に、木蔭に、砂いぢり、草いぢりといふ様に秋の自然を満喫させたいものである。この頃になるご殊更に都會の幼児が氣の毒でたまらない。せめて時々の郊外保育によつてその短を補ひたいものである。

尙身體的方面のみならず、年少組のこの期に入れば、智能の發育程度も急速度に進むのであるから自然觀察の機會を充分にさらへたい。秋の蟲、鳴く蟲、稻、果物など材料も豊富である、保姆も幼児も長い休暇中に蓄へられた力を伸すときは今日であらうから

第一週　二日——七日　保育時間　午前八時——午前十時

月

火　　第二保育期始めの集り

全園幼児一堂に集つて、お互に眞黒になつた健康な顔を並べ簡単な式をする。

自由遊び

園庭の雑草の間をかけめぐつて、ばつた、こぼろぎ、な

さの秋の蟲をおはせて遊ばせる。

秋の蟲の中でも、こぼろぎは幼児と一緒に飼育するのに丈夫な蟲でよい。硝子鉢、木箱などに底に砂を入れて、雑草をしき、きうりなごの餌を入れておく。棚の下などの少し蔭のところにおくと、保育室で時々幼児たちにこぼろぎの聲をきかせる事が出来る。

今年の防空演習は丁度九月一日から始るので幼児たちにもこの話をし、適當の方法で練習をする事よい。

水

唱歌 コッキフレフレ

この唱歌は倉橋先生の最近の作歌になつたもので戸倉先生振付の遊戲も可愛らしいので運動會のプログラムに入れる爲新期早々する事にする。

お話を夏休み中のこ

自由畫 夏休み中についた事。幼児たちは海に山に遊んだもの、家庭にあつたものなどそれべく休み中の見たものをかゝせる。

木

遊戲 コッキフレフレ
蟲取り

金 紙仕事 花カゴ

古端書で花カゴを作る

土 唱歌 コッキフレフレ ダルマサン

ダルマサンも新作唱歌

第一週 九日——十四日 月

唱歌 コッキ フレフレ、ダルマサン
遊戯 コッキ フレフレ

自由遊び 園庭にて駆つこ

火

ヌリエ 朝顔

朝顔の花を見せて、各自すきな色にぬらせる

水

粘土 梨 クリ

自由遊び 駆つこ

木

お話を

紙仕事 花カゴ

花カゴに挿す花を畫かせて 切らせる

金

唱歌 ダルマサン
遊戯

土

自由畫　庭の朝顔を寫生する

第三週　十六日——二十一日

月

お月見

お話　十五夜お月様のお話

お月様へのお供物作り　おだんご、果物等

火

唱歌　幼稚園のお庭

自由畫　昨夜のお月見

水

メリエ　お月様

自由遊び　駆つゝ

木

唱歌遊戯　運動會の準備の爲當分毎日唱歌遊戯をする

勧草ツクリ（男兒のみ）

人形花子ツクリ（女兒のみ）

金

唱歌遊戯　運動會の練習

勧草ツクリ

人形花子ツクリ

自由遊び　駆つゝ

土

お話　九月二十二日秋季皇靈祭の話

唱歌　遊戲

第四週　二十三日——二十八日　この週より午前九時——午後一時三十分

月　秋季皇靈祭休日

火

勸草ツクリ

人形花子ツクリ

自由遊び　園庭の土を柔かくして秋蒔きの種まきをする

水

自由畫

けいこう、コスマスなごの秋草の寫生

木

お話　三四の豚の子　新作

肩草ツクリ　男兒のみ

人形花子の洋服　女兒のみ

自由遊び　藤の葉柄を拾ひ集めて、おもちゃ作り

金

粘土　自由製作

土

唱歌　遊戯　運動會の練習

蔬菜栽培と幼兒

松原ユキ子 感應幼稚園

今日一般に幼兒教育の問題は健康より外にはあり得ません。本園にては花壇園藝は觀賞用として毎年育の關心が健康方面その健康は幼年期からの周到なる注意と努力によつてのみ得られると言ひます。しかし、これは當然の事で、我が園では健康の増進、體位の向上及び國策に適ふ意味からこの度多年の宿望であつりますが、誠に喜ばしいと思ひます。

蔬菜園藝を實施する事になりました。蔬菜は朝かな大氣の中に、太陽、土、水等の小葉が育つものゝ中に底知れぬ大地自然の恵みによつて育つのであります。そのたましい力によつて、園児の心身も亦その育つものゝ中に例へられませ。あつてこそ共に明るく共に正しく育ちのびてゆく事を私達は信ずるものであります。

幼稚園時代は宛も小さな花園にある苗ですが、園児の心身も亦その育つものゝ中に親しみを増し、一方栄養給食實施と連絡力も一寸した導きと如く植物が家の中でも育たぬやうに子供も亦いふ積極的の援助があるならば、どんな親しみ蔬菜を愛育するに無心な子供達の姿あるならば、どんなは思へません。溢れる陽の光のもとに土と水とが、家中での生活がその自然性に適ふものとあります。子供達の大きく見開かれたその驚異を興らしめその將來にはこそ最も自然の環境におかれだるものである美しい花も實もり、そこに共に育ちゆく生命の躍動せる姿をみ出すのです。

必ず美しい花も實もり、そこに共に育ちゆく生命の躍動せる姿賞でられるあります。現代の日本民族に課せられた興亞建設の大業も先づ以

専門家の手にゆだねて幼兒の勞作は加へない事にしてゐますので、蔬菜園藝は特に幼兒の園藝として利用に思ひ立つたものであります。國策に適つて世の要求にこたえ、とかく國策に適つて世の要求にこたえ、とかく蔬菜の生態觀察に乏しい都會の子供に生活的親しみを増し、一方栄養給食實施と連絡して偏食矯正の一助とする考へで居ります。小さな手に握りしめられた一粒の種が、その手でかけられた土の中からやがて發芽、壁の中では育たず、のタゴールの句の生長し、開花結實する迄子供達は最も自然的、具體的に蔬菜の生長生態を觀察出来ます。自然のいとなみは常に私共に驚異を興へます。子供達の大きく見開かれたその驚きの眼はやがて未知の世界への探求に光り輝いてゐます。

偉大な生命力を具へて日毎に延びてゆく芽を觀察してゆくとき、子供達の心にはしらずしらずの中に一本一草もいつくしむ宗教的な心情も芽生えて来ると思ひます。朝に夕に水を與へ雑草を除き土を碎いて世話を

してゆく内に勤勞ないとはす喜びの中に勞し、勞する事の樂しみである事を知つて参ります。

× × × × ×

我が園では幸ひ恵まれた廣い土地を利用

して園庭内に横二十米、縦四十米餘のさつまいも畠があり、毎年秋には幼児に芋掘りをさせて來たのですが、其經營が人夫まかせでは利用價値が乏しいので、前記蔬菜園

× × × × ×

は全く可愛いものです。四月中に播種されましたものとしては、枝豆、隣元、二十日大根、夏大根、小蕪、人薺、牛蒡、玉蜀黍、棉等が挙げられます。

しましてゐます。強健な豆の種子など、子供達は特によろこんで播種致しますし、どんな一生懸命に培育に努めています。此頃では播手であらうとも忠實に發芽するところ子供達は朝登園すれば必ず一度は自分の組

は全く可憐いものです。でも變化を見れば先づ先生に御注進に及ぶましたものとしては、枝豆、隣元、二十日大根、夏大根、小蕪、人薺、牛蒡、玉蜀黍、など非常に興味をもつて參りました。自分で使用したスコップ、バケツその他道具の後始末、手の洗ひ方、衣服を汚さないやうにする等清潔方面的訓練も特に注意をしています。

×

園藝保育はこれを日課とし、指導にあたるものは豫定案によつて計畫し實施し、そく教育價値を深めたいのです。然し殘念なことは、私達が一般に蔬菜園藝に關する知識にまことに乏しいことがあります。乏しい原因は即ち、今迄に経験する機會がないのです。

園藝保育の保育項目への連絡としては日々観察し變化してゆく有様を自由畫にかけ、又各々の保育室での製作による園藝繪教材として種々工夫、活用してゆきたいと思ひます。

やうにするにはその選擇に考慮を必要とします。豆の種子の發芽を待つ間には生長の早い菜類の播種、他方には開花の早い苺があるといふやうに、順次に常に園に變化をみせておく事によつて子供の興味を持續せな態度、私達の全幅の興味こそ園藝保育の

母の日記

昭和十五年八月

—今からでも遅くはない—



日やけ潮やけ

「僕の方が黒いよ」

「わたしだつて真黒よ。手だつてこんなに」

夏の健康を自慢しあふ子ども達の顔の元氣さ。

「山へ登つたのよ」

「波のりが出来るよ」

脚を踏み、腕を振つて見せあふ子ども等の頼もしさ。

かうして、男の子も女の子も、九月の幼稚園を黒光りに光らせ、賑かに盛りあがらせる。九月の子ども達こそ、夏の、夏を一ぱいに注意したお母さん方の傑作るばかりです。

(倉橋惣三)

展覽會です。

いつまでも、子どもの顔を此の黒光りに置きたいと思はずにはゐられないのが、九月の幼稚園の希望ですが、九月のお母さん方の御希望でもあります。折角の傑作の日やけ潮やけた、はげさせないやうに。うすぼんやりとさせないやうに。——それには、この美術品を座敷

学校にあがるやうになつたら、子どもは自分で日記をつけるでせう。幼稚園では、字も書けないし、毎日といふこともまだまだありますまい。そこは、お母さんの日課として、繪はお子さんに描いて貰ひませう、唯、こんな途中からなんて思ふと、いつになつても始まりません。

「今からでも遅くはない」ですよ。

お母さんは、お子さんの爲に日記をつけたあげおいでゝすか。誕生以來つづいてゐる日記の、どんなに貴いことでう。しかし、そうでなくとも、どんな機会をきつかけにして書き始められたのも樂しいことです。「我子の幼稚園日記」、「太郎の夏休み日記」、「花子の歸郷日記」。されだつていゝですね。それは、後になって思ひ出になるばかりでなく、今の我子の生活を、一日々粗末に通り過ぎることにもなりませう。

學校にあがるやうになつたら、子どもは自分で日記をつけるでせう。幼稚園では、字も書けないし、毎日といふこともまだまだありますまい。そこは、お母さんの日課として、繪はお子さんに描いて貰ひませう、唯、こんな途中からなんて思ふと、いつになつても始まりません。

お魚と眼鏡

内山憲尙

「入るよ、入るよ、僕だつて日本男子だ

もの」「よーし、偉いぞ、さあ行かう」

兄さんは正夫さんの手をとりました。

その時正夫さんは兄さんの顔を見ます

と、いつもの通り眼鏡が光つてゐます。

「兄さん、眼鏡かけて入るの」

「あゝ、眼鏡などよく見えないから、正ちやんを見失ふとこまるだらう

——さあ行かうよ」

正夫さんは兄さんに手を引かれだんだ

ん深いところまで参りました。

「さあ兄さんが、手を持つてあげるから、足をばたばたして、泳ぐ稽古をして

御覽」

兄さんは正夫さんの手をしつかりと

持ちました。恰度その時です、大きな波

がぢやぶんど来たかと思ふと、正夫さん

と、兄さんの顔を横の方から、いやと云

ふ程たゞきつけました。

「しまつた！」

「兄さんは大きな聲で呼びました。兩方

あつい　あつい夏のことです。
 正夫さんは大學のお兄さんにつれられて海水浴に行くことになりました。新しい海水着を買って貰つたので、うれしくてうれしくてたまりません。汽車の中から

「兄さん、海はまだなの？」
 と聞きます、「もう一時間ばかり乗らな

ければ駄目だ」又暫くすると

「兄さん、海はまだなの？」

どうるさい位に聞くのでした。

やがて海へ着きました。正夫さんはい

きなり、裸體になつて、新しい海水着を

着まして兄さんがまだ仕度をしてゐらつしやる間にもう、波打際へ飛び出して行きました。

「さあ、來るんだよ、そらあんな小さい子供でも入つてゐるぢやないか、大丈夫だよ」

眼には今まであつた眼鏡がなくなつてゐました。今の横波で眼鏡が外されて、海の中へ落ちたのです。兄さんは、細い眼をして海の中を一生懸命にさがしましたが、どうしても眼鏡は見つかりませんで

した。

仕方なしに眼鏡なしで家へ歸つて来ました。さあ海の中へ落ちた眼鏡はどうなつたでせう。

×

さつと寄せて、眼鏡を外した波は、さらさらと、引いて行きます。その時に正夫さんの兄さんの眼鏡と一緒に海の底の方へ持つて行つて仕舞ひました。

眼鏡は、白い海の底の砂の上に、静かに休んでゐました。そう深くもないところなので海の上からの光がかすかに通つて来ます。二つの目玉はその光を反射して白く光つて居りました。

小さい鰯の子供たちが六七疋で散歩をしていますと、岩の横の砂の上から二つ大きな目玉がピカリと光りました。驚いたのは鰯の子供たちです。

「お化け！」

「一日参にお母さんのところへかけつけ來ました。

「お母さん、お化けがゐますよ」

「そこにあるの」

「岩の前のところの砂の上に、二つ大き

い目玉をして、僕たちをにらんでゐたんだよ」

「そんなんものがゐるものですか、よろし

いお母さんが行つてあげませう」

子供に案内されて來て見ますと、お母

さんも見たことない、不思議なもので

す。

「おや、これは、一體なんだらうな

「お母さん、お化けぢやない」

「お化ぢやないけれども——なんでせ

うな——そうです、これは二人乗りのブ

ランコですよ、ね、そのまがつたところ

を樹にかけてぶらぶらやするんですよ」

「なる程、お母さん、吊つてよ」

と云つてゐるところへ、章魚さんがのぞいてのそりとやつて來ました。

「どうかしましたか、鰯さん」

「そこへ通りかゝつたのが、赤い顔をし

たね、そーら、こんなぶらんこが落ちてゐたから、子供たちに吊つてやらうかと思つてゐたところですよ」

「など、ぶらんこ、それですか」

「二人のりのぶらんこ」

章魚は眼鏡を見て、笑ひ出しました。

「これはぶらんこぢやありませんよ」

「へ? ぶらんこではありますか」

「そうですね、お窓ですか」

「では何んですか」

「これはね、お窓ですか」

「窓ですかって」

「そうです、君たちには要らないが、僕

等の様に岩と岩との間に棲んでゐるものにはこれが必要なのです、この透き通り

て見えるのをガラスと云ふのです」

「なる程」

「これは、僕が貰つて歸りますよ、そし

て家の窓にしますから」

章魚は足を二本のばして、眼鏡をまきつけました。

た鯛でした。

「どうしたんだね」

「ヤア、これは鯛さんかい、實はこんなものが落ちてゐたんだよ、お窓に恰度いいから僕が貰つて歸らうと思つて引つぱつて歸るところだよ。」

「なんだ、それはお窓ちやないよ」

「ぢや、一體なんだね」

「それは人間のかける眼鏡と云ふものだよ」

「眼鏡！ 眼鏡つて何をするものだね」

「遠くの方が、よく見えない人がかけるものさ」

「さうか、なる程、それで二つガラスがついてゐるんだね」

「二人乗りのぶらんこかと思ひました」

×
燭のお母さんは一人で笑つてゐました。
「これを落した人間は、さぞこまつてゐることだらうよ」と云つてゐる處へ蟹がやつて來ました。

「蟹君が來たぞ、蟹君はよく波打ち際の海水着を着て波打ち際をかけ廻つてゐた。

方へ遊びに行くから知つてゐるかもわからぬよ」

鯛は蟹が近づくのを待つて尋ねました。

「蟹君、海水浴で眼鏡をなくしてこまつてゐる人間を知らないかね」

「眼鏡だね、あゝ、そうだ、正夫さんと

か云ふ可愛い子供の兄さんが眼鏡を波にさらわれてこまつてゐたよ」

「ぢや、きっと正夫さんの兄さんのだ

ね」

「そうだらう」

「氣の毒だね」

「では僕が持つて行つてあげやう」

蟹が力強い聲で申しました。

「さうか、それはありがたい」

「いや、蟹さんたのむよ」

お母さまに

このお話を暗記するのは大變でせう。

お子さんの前で、讀んで上げて下さる

といふと思ひます。讀んでやるのは

気がきかないなんて思つてはいけませ

ん。讀み方だつて中々むづかしいです

からね。併し朗讀家ではないのですか

ら、そんなに上手でなくていいでせう。

たゞ熱心にね。

(記者)

した。

すると、白い貝殻で丸く輪が作つてあるのが見つかりました、「おや、誰かの惡戯かな」と思ひながら近づいて見ますと、

その丸い輪の中に何んだかピカピカと光るものがあります。

「おや、眼鏡だ！ 兄さんの眼鏡だ！」

正夫さんはそれを持つて、一目参に家へ歸つて来ました。

お書からは正夫さんと兄さんの元氣な水泳姿を見ることが出来たでせう。

幼児の母

昭和十五年九月

母のこよみ 幼稚園に馴れる子



母の勤労

「お母さんは何してあらつしやる」「御

用してあらつしやる」之れが子どもの答
えです。

この答へは、たゞありのまゝを答へた
といふ以上に、子どもとして思ひ出す我

が家の母の一番親しみ深い姿でもあるの
です。これ以外の答へを想像してみると

しませう。「寝んねしてゐます。」悲しい
ですね。「遊んでゐます。」子ども心にも

たよりないでせうね。「思索してゐられま
す。」子どもには分りにくいですね。「御

用。」なんといふいゝ言葉でせう、そこに
は一種の有り難さの感じを伴はずにゐな

いのです。

その御用の内容は、坊や達の着物のお
仕事でせう。お洗濯でせう。壱所でのお
仕度くでせう。必ずしも公儀の御用では
ないでせう。町會のこと、隣組のことが
あるとして、それも家事の間のことで
あります。子どもが、感心するともなく感心し、
感謝するともなく感謝してゐる、そして、
だから真に家の母さんらしい氣のする
のは、家のことに働いてゐる母です。母
の勤労はたゞ實用だけのことではありません。
せん。家庭教育の中必なのです。

自分がものになつたのですね。

この四月に始めて入園されたお子さん
の爲に、初めての夏休みが済んで、第二
保育期に入りました。相當長いお休みで
したし、なかには幼稚園を待ちくたびれ
たお子さんもある位でせう。少くも、お
休みの間、何彼につけて幼稚園のことを
想つたでせう。お友達のこと、先生のこと
を、お庭のこと、お部屋のこと
を。そして、毎日登園してゐる時よりも
却つて懐しい氣持が起つたことでせう。
懐しいといふ迄でもないとして、その間
に、幼稚園が我がものとして、じつくり
と心中に溶けもし、浸透もしこと、
言つていゝでせうか。その證據に、第二
保育期の子どもの、なんと急に元氣なこ
とでせう。前には引込勝ちの子がなんど
活躍することでせう。つまり幼稚園生活

幼稚園でしてあること (三)

観察いろ／＼

倉橋惣三

「今年の夏は、とんぼをとつて参ります

と、いま迄のやうに、たゞ籠の中へ入れて置きますだけなく、この羽はこうだとか、この足はこうだとか、いろいろくらべては面白がつて居ました」

「比較研究ですか」

「ホー、そんな大したことではございませんが、時には隨分こまかく注意しまして」

「そうですか。それでは一かどのとんぼ

學者におなりでしたね」

「とんぼばかりではございません、海へ

つれて参りました間なんか、貝殻を拾つて來ては、色だの形だので種類わけない

たしまして」

「貝の名は御承知ですか」

「それがね先生、一々私に聞くのでございますが、お恥しいことに、私も頗る存じませんで」

「澤山ありますからね。それで、どうなさいました」

「太郎も仕方なく、勝手な名をつけてゐました」

「たゞへば」

「それがおかしいのでござりますよ。紅

貝、白貝、まる貝、なが貝、すべ／＼貝、

ぎざ／＼貝……」

「ハー、愉快、ゆ貝」

「いやな先生、しゃれなんかおつしやつたしまして」

季節の御馳走

榮養研究所 佐々木理喜子

九月の聲を聞いて少し涼しくなりましたが殘暑が未だきびしいので食物の腐敗を注意しませう。又暑さで傷められた胃腸が充分に恢復しませんので、秋口には果物等も色々出盛りますが、梨は消化がよくないので澤山食べない様にしませう。

①豚肉の南瓜和え

材料 豚肉三五瓦 南瓜五〇瓦 茄

いんげん 二〇瓦 油二瓦 以上

で蛋白質 八・七瓦 溫量一〇五

カロリー

作り方

豚肉は薄く切り生姜醤油に三四十分漬けて、フライパンに油を熔して焼き細く織りにします。茹いんげんは鹽茹にし斜に程よく刻みます。南瓜は小くり軟く蒸して搗りつぶし砂糖、鹽で味付けて少々煮詰め豚肉と茹いんげんを入れて和えます。

②里芋の煮付と佃煮

「太郎は眞面目なんでござります」

時でも、序にそんな指導の機會もありませぬ

「いや、ふさけたんぢやありません。ほ

んどうに愉快なことなんです。太郎さん

は、そういうふ方ぢやなかつたんですね

ね

「ほんとに。それで、これはきっと幼稚

園で教へて下さつたことに相違ないと、

皆で申して居ります」

「教へたといふ譯でもあります

それは至極い、ですね」

「一體どういふ風にお導き下さいます

のでせう」

「まあ一口にいへば、物に注意させるこ

とですね。子どもの興味は元來強いもの

ですが、それを一層縦密に、といふより

も丹念にといひませうか。それで、いろ

いろこまかい點にも目がつき、自然、比

較といったことも出来て來るのでですね」

「とんぼや、貝のお稽古がござりますの

で……」

「そんな時間なんかありませんよ。貝な

んか海岸のやうにありはしませんしね。

たゞまあ、同じきしやごおはちきをする

材料 里芋三〇瓦 油揚一五瓦 人

参 二〇瓦 はぜ佃煮二〇瓦 以

上で蛋白質 八・二瓦 溫量一〇

五カロリー

作り方 里芋は程よく切り普通に煮付
け、其の煮汁で油揚の繊切りと人參の繊
切りと一緒に附合せます。煮汁は出ない
様にカラリとさせます。はぜの佃煮を添
えます。

③ 間食 三色おはぎ

材料 馬鈴薯 百瓦 人參十瓦 黄

粉 八瓦 青海苔 八瓦 砂糖十五瓦

以上で温量は一五八カロリー

作り方

馬鈴薯を皮のまゝよく洗ひ五

分位に輪切りよく蒸し皮をとり擂鉢で押

し潰します。此の $\frac{1}{5}$ を餡に取り分けま

す。少量の砂糖と鹽を加へて馬鈴薯を硬

く練ります。此れを五箇位におはぎの型

に作ります。黄粉(少量の砂糖を加へる)

と青海苔を夫々まぶします。餡にする馬

鈴薯には人参を軟く煮て擂りつぶしたの

を混ぜ、砂糖、鹽で味を調へ此れをまぶ

します。

「喜びませうねえ」

「われ／＼が特に指導しなくとも、子／＼にはそういうふ興味があるんですね。」

中には、そういうふ傾向の發達してゐない子／＼もありますから、導いてやる必要がありますね。それに、都會の生活で

は、そういうふ自然物に接する機會も少いですから、幼稚園でその機會を作つて上げるんですね。一度そういうふ傾向が引き出されば、子／＼も喜びますよ。」

「そこで、とんぼ研究、貝貝研究が始まりますんですね。」

「研究といふと學問らしいが、子／＼にとっては、確に研究ですね。」

「もの知りになりませうね。」
「まだそんなどおつしやつてはいけません。もの知りな人かにするのぢやな
くて、もの知らうといふこゝろを養ふといふ譯です。理科知識でもなく、そうし
た心の働き方が主なんですね。」
「それで、すべ／＼貝、ぎざ／＼貝でも
よろしいんですね。」
「よろしいといふ譯でもありませんが、

貝の名稱だけ覚えても、すべ／＼、ぎざ／＼を自分で觸つたことのないより、

よろしいですね。」

「観察と申すのは、自然界ばかりで、いゝえ。家の中の道具でも、自動車でも、電車でも、汽車でも。」

○「いよ／＼博學」

「またいけません。學じやない。知つてることがえらいのぢやなくて、自分で實

物を、よく注意すること、し得ることが望ましいのですよ。つまり、知識そのものを澤山與へられて持つてゐるといふのでなく、自ら實物から知識をつくり出してゆく心の第一の働きを強くするのですよ。」

「そこが、幼稚園の有り難いところでござりますね。」

「有り難いかどうか、そこが幼兒教育の一つの役目ですね。」

「私も、小さい時そういうふ教育を受けませんでしたから、知識は教へられて覺えることばかり思ひまして。」

「教へられただけのことだから、さつさと忘れて。いやこれは失禮。ハ、ハ、ハ、」

母の書棚

観察に就てのお話が出た關係から、その参考にする本など、思ひついた二つ。最も古いのと、最も新らしいのと。

○ フィールド昆蟲記

山林 建夫譯

岩波文庫 各冊金四拾錢

これは、どなたも御承知の有名な古典ですが、その割に讀まれてゐなかつたりします。兎に角、子／＼の自然観察指導には、おとながよく勉強して置く必要のある本です、これをこのまゝ讀ませるのは少し大きい子のことですが、幼兒の母にとって、先づ第一の指導書です。

○ 観察の實際 東京女子高等師範學校

附屬幼稚園編

日本幼稚園協會 金一圓

ファーブルと並べるのは、沙汰の限りでもあります。幼稚園児に何をどう觀察させるかの實際的指導書で、幼稚園の先生方に廣く讀まれてゐます。お母さん方も、心ある方はどうぞ。

歸命毗盧遮那佛

「幼時の追憶」、その八

曾根保

儀津の港

儀津村(タハラツ)は數百戸の小漁村で、狭い灣の底に村の中心、祇園町(クニマチ)といふのがあるが、三方は山で圍まれてゐて、交通は主として海路によつてゐる。日に二回午前と午後に小蒸汽船が発着するほか、渡海船が毎朝、海路五里を渡つて宇和島町(今は市)へ通ふ。その頃、東郷丸(とうごうまる)といふ小蒸汽船赤穂丸(あかほまる)といふ小蒸汽船が競争をして、全村民を興奮させた。競争といふのは速力と運賃との競争である。東郷丸は小柄で白色、赤穂丸はやゝ大きくて黒であつた。實際の速力は甲乙なかつたやうに思はれるが、スマートな東郷丸が白浪を蹴つて港に走り込む姿は、多數の村民の聲援を得るに十分であつた。赤穂丸はやゝ鈍重な感じで、表情に乏しかつたため大分損をしてゐた。それに村の大先生といふべきお醫者さんの家の或る女性が東郷丸に肩を持つてゐられたのかはつきり覚えてゐないが、多分その時の「駄賃」だった

で、祇園町の人は皆その方を最貞にした。或る朝、船着場で例によつて皆が片睡をのんで船を待つてゐた。二十丁位沖合の、右手から灣を抱いてゐる黒い岬をどちらの船が先に廻るか見ものなのである。すると、煙突の前から真白な蒸氣を夥しく噴き出して、東郷丸がはいつて來た。側にゐたその女性が「あれ、あんなにタルトを切つてゐる。あれでなくてはいけない」などと聲高に説明してゐられた。私は、今でも、タルトなるものが何であるかを明にしないが、汽船や汽車が蒸氣の餘剩らしいものを噴き出しているのをみると、幼いその頃のことを想ひ浮べるのである。赤穂丸は一時、儀津で休航してゐたことがある。甲板から、海へざんぶくら河童(かわむす)もが飛び込んだりしたのを思ふと、それは夏の頃であらう。私は赤穂丸の火夫に頼まれて空っぽの汽罐の中へはいつたやうに記憶してゐる。何のためだつたかはつきり覚えてゐないが、多分その時の「駄賃」だった

のであらう、私は銅貨を十數枚『青年健康法』といふ本を貰つた。本は當時少しも顧みなかつた。中學一年頃、健康に全く自信がないやうに思はれた時初めて開いて讀んだ。自瀆なさういふ言葉がいやに目に付いたやうであつた。さうして赤穂丸の火夫が、健常法なさういふ本を小學生の私にくれたか一向に見當がつかない。赤穂丸は程なく就航したが、東郷丸に壓倒されて、やがてわれくから姿を消し、忘れられてしまつた。船賃がしまひにはたゞになり、その上手拭一筋を吳れるさういふやうな烈しい競争になつて、今から考へる三馬鹿げで、呆れた話に過ぎないが、この種の現象は當時瀬戸内海の沿岸のところごとで時折見受けられたものであつた。

純友が據つてゐたさういふ日振島を右手に望んで、海上五里を、このたゞの小蒸氣に、或は渡海船の荷物の上に乗つかつて旅をする人を、私は羨しく思つたけれど、一度もさういふ機會は幼い私には恵まれなかつた。

初めて舟を漕ぐ

俵津村へ移住して直ぐ習ひ覚えたのは櫓を漕ぐことであつた。五つ六つの子供でも皆櫓を漕ぐ。私は或る夕方四五人の友達と一緒に舟に乗つた。重い櫓もリズムに乗つて動く時は辺るやうで、手には海の水さういはうか、自分の舟さ

いはうか、そのさつしりこした重味が氣持よくもたれかゝつて來て、身體全體がそれに應へようとする。決して手先ではない。全身こそに心さ、すべてが一つになつて感じられるさき舟は前へ出る。引けば左へ、押せば右へ、ゆづくり／＼こ頭を振つて前へ辺る。夕風の海に小波が立つ。三方の山が黔んで影を増す、海は嚴肅だ。私は生れて初めて櫓を漕いだあの夕方を忘れるこことは出来ない。初めのうちは、櫓は櫓ぐひからすぐ落ちて、時には船べりから外へ滑り出るこしさへあつた。しかも櫻の木のあの重い櫓！一度外れるごと、力のない、そして術をまだ知らぬ私は、そこの度毎にそこまで行つて重い櫓をかゝへ、櫓ぐひに入れるのであつた。入れて、またもさの位置に戻つて一漕ぎ漕ぐごとに外れる。また艦へ行く。繰返しつゝするうち、一つのコツを悟るのである。後年、松山中學へはいつた時、道後公園で自轉車に乗る稽古をしたが、やはり大體同じやうな努力をしてその術を覚えたやうに思ふ。しかも幼ければ幼い程速く覺えるさういふことは事實である。母は、或る夏泳を習ふのだと言はれて岸でぢやぶ／＼やつておられた。祇園町には近くに砂濱がなかつたので、床屋の主人が誰かが竿の先に繩をつけて、岸壁から支へたり、色んな珍らしい方法を試みて稽古のお手傳をしてゐた。全く見て居れた様ではなかつた。でも、母は少々泳げるやうになつたさ喜ん

でられたが、四十を越してから物事を習ふのは大變だ。

隨分こ鹽水を飲まれたこゝであらう。

私は漁夫の子のやうに筋骨逞しい方ではなかつたから、いくら上手に漕げるやうになつても、體力が續かず、手にはすぐ豆が出来たりして到底選手にはなれなかつた。當時年に一回、近隣四五ヶ村の小學校對抗の競漕があつて、わが校にも幾組かの選手があつたのである。私は五年生の折やつこ補缺選手にまでなつた。舟底を焼き、油を塗つた新造の選手の舟に乗つて、時には舳に陣取り拍子木を叩く光榮を擔つたこゝもあつた。また、短艇競漕では全日本の覇を唱へたこゝもある宇和島中學では、私はその部の役員をしてゐる關係から、やはり補缺選手になつた。たゞし、一度も晴れの競技に出たこゝはなかつた。同じこゝが剣道の場合にも、馬術の場合にも、或はまだ學業の場合にも言へるのであるが、それは後日の話さしよう。

幼な友達

祇園町といふ名前は京都の祇園から取つたのだ。トーチやんといふ私より一年歳下の物識りの子供から教へられた。この子の両親はアメリカへ出稼に行つてて、叔父さんが旅館を營んでゐた。二年前、私が三十年ぶりにこゝを訪れた時、二十歳臺であつたその叔父さんも既に白髪とな

り、みづくしい丸髷を結つてゐた、嫁入つて來たばかりの叔母さんも白髮はじりで半病人のやうに衰へてゐた。トーチやんといふのは伊井豊石君の愛稱で、東大の法科を出て、最近まで清瀬一郎といふ人の下にあつて辯護士を開業してゐた。トーチやんは中學時代私の家に寄寓してゐたので特に親しかつたが、最近久しうぶりで、遭つた時には、お互の住む世界が餘りにもかけ離れてゐて、何だか私には話がしにくかつた。トーチやんは旅館の子だけあつて、将棋が強かつた。子供の癖に、大人をつかまへて、誰それは、角落だの、香落だのさ言つてゐた。また或る時期には、誰それは民政黨だの政友會だのさ噂もしてゐた。私ばかりではなく、多くの子供にはさつぱり興味の無い問題であつた。後頭部が断崖のやうに、或は板のやうに突立つてゐたので、喧嘩をするこゝ皆は「ぼら」といふ綽名を呼ぶこゝにしてゐた。「ぼら」は魚である。そしてこの魚は俵津の一つの名産でもあつた。灣の入口に「ぼら小屋」があつた。きれいな砂濱には清い流があつて、子供心にも、私はこの魚の潔癖を感じてゐた。しかし、あの頭の恰好を見るこゝ少々うんざりするのである。「まむし」のこゝをわれくは田舎で「はめ」と呼んでゐたが、この蛇の頭がやはり妙な形をしてゐる。また、鰻が同様である。本郷に來て、藤岡勝二先生なごに引張られて「大和田」で晝食をする時、少からず辟易したも

のであつた。

トーチやんよりも仲の良かつたのは、駄菓子や魚を賣る家の茂夫さんだつた。この子も一年歳下だつた。祇園町は一筋町で合計二十軒にも足りなかつたから子供の數は數へ程しかない。トーチやん、茂夫さんの外に、最近巣屋の萬さんのうちに貴はれて來た懶口で、走るここの速いヨツちゃん、蒲鉾屋の善八さん、床屋の惣ちゃん俊ちゃん兄弟、學校の先生の息子信孝さん、その裏の「うらなり」のやうな鋒ちゃん、その弟で泣きみその侃さん。男の子はそれきりだつた。女の子は更に少く、茂夫さんの姉さん愛ちゃん、三峰ちゃんの妹トンちゃんだけであつた。これらの幼な友達に一枚加へなくてならないものがある。それは老犬「ホタ」である。「ホタ」といふ名ではなかつたが、學校の行き歸りの、他の部落の子供達がさう呼んで相手になつてゐた。子供が多勢のときは入口で烈しく吠えるだけであるが、一人や二人の時は追つかけて行つて、子供を泣かしてゐた。別に囁みついたりはしないのであるが、毎朝大變な騒動であつた。「ホータ、ホータ」これからかふ子供の聲は學校が始まる數分前の報せともされた。「ホタ」は私にはなつてゐた。一時私はこの犬の仔を内證で育てて、恰も自分の犬のやうにしてゐた。荒縄で引張つて遊びに出かけたこゝもあつた。おとなしい犬であつた。名前も忘れて想ひ出せない

が、この犬のお蔭で今でも犬が大好きである。私の知つてゐる學者に犬が大嫌ひな人がある。また犬もその人を大嫌ひだと言つてゐる。その證據にいつも犬に睨まれ、吠えられ、厭な思ひをさせられてゐる。女性にもそんな人があるが、普通の犬から憎まれるやうでは、そんなに賢夫人であらうさ、インテリであらうさ、怪しい人物に相違ない。今迄に犬や猫のお葬式を數知れず出して來たお蔭で、犬や猫に就いて少からず書くべきこゝがあるが、機會を見てゆづり語らせていたゞかう。

惣さんと善八さん

床屋の惣さんと蒲鉾屋の善八さんは二年上級であつたが、私はよく遊んだ。惣さんは眼のグリグリしたノッボで早合點の男だつた。おしゃべりで少々男らしくないところがあつて、勝負事や喧嘩には弱かつた。それに比べるご善八さんは、むつりしてゐて、多少耳が遠いのではないかと思はれる程鈍かつたが、ガツシリした體、太い眉毛、黒い顔、両手も大人のやうで頼もしかつた。殊に角力の強いこゝは學校中でも一二番であつた。勿論競漕の一流選手であつた。蒲鉾屋は叔父さんに當るのだが、叔父さんは、嚴格な人で、歩き振りからして俠客のやうだつた。ものを言はない親爺だつたが、私は見てゐるうちに魚が蒲鉾になる

過程が面白く、數時間も店先で眺めたこゝもあつた。眞白な絞の肉がはいつたり、お豆腐がはいつたりするのも見さけた。エソの身が澤山はいればはいる程上等の品だといふこゝも見ててわかつた。細かい骨を抜いたり、たゞいたり、搗いたり、並大抵の仕事ではない。善八さんはよく、あの兎の持つてゐる杵で、ボテボテと肉を搗いてゐた。下手に搗くと肉が飛ぶから、めつたな人には手傳はせられないらしい。善八さんは時々店の竹筒の中から銅貨を盗んでお菓子を買つてゐた。子供心にも、私は誤魔化す人間でそんなこゝの出来ない人間さに區別をつけてゐた。トーチやんはそんなこゝをしなくともお婆さんから豊かにお金を貰つてゐた。惣さんは誤魔化さうにも、家に竹筒なんか無かつた。何しろ三人の男の子ばかりをかゝへてゐて、しかも床屋をやめた頃であつたから、惣さんの父も大變だつただらう。きまつた職業も持つてゐないので、どうして暮して行けたのかしら。

惣さんの弟俊ちゃんは二年ばかり下だつたが、或る時茂夫さんの家で喧嘩をして、私は引轉がして押へつけてやつた。すぐ大聲をあげて泣いてゐた。何でも股のあたりにおひきが出來てゐたのがつぶれたとかで、大騒ぎをした。それからいふもの、私は俊ちゃんの父に向ふからやつて來るこゝすぐ逃げてゐた。何だか氣味の悪い親爺で、見るの

「餓鬼大將」

もいやであつた。海岸で遊んでるても、親爺の姿が見えるさ、一生懸命で逃げて歸つた。そればかりではない、夢魔にさへ襲はれたこゝもあつた。子供の頃の大きな心配だつた。俊ちゃんは竹馬の上手な子だつた。どんな山道でも、背よりも高い竹馬に乗つて走つてゐた。木登りも一番上手だつた。猿のやうな子供だつた。私達はよく祇園町のうしろのお宮の森で終日を暮したが、半日以上樹の上で遊んだこゝも珍らしくなかつた。樹から樹へ渡つて、鬼ごっこもすれば、隠れんぼをするさいふ風であつた。先年行つた時、このお宮の森も樹がまばらになり、お宮の建物も既に無かつた。それにも増して哀れを催したのは俊ちゃん一家数人の者が、次々に斃れて、根絶したさいふ話であつた。肺病の恐ろしさよ！その昔、萬葉の歌人が、「大宮はこゝと聞けども」なんかと歎じたが、そんななまやさしいものではない。あれだけピンポンしてる人々が一人も残らず、地上からかき消えてしまつたと聞いて本當に吃驚した。あの善八さんも二十歳前に急死したさうである。兵隊歸りの兄の鞄から卑猥な繪を盗み出して来て、船の中でのわれわれに見せたのは、「そちらで善八茶の袴」といはれてゐたこの善八さんであつた。

茂夫さんは、先年會つた時健在で、長女が女學校を出したから嫁にやるのだと言をしてゐた。相變らず、父の店を引き継いで酒や燒酎をも賣つてゐた。遼漕店も兼ねてゐるらしかつた。この茂夫さんが前回お話した糞壺に落ちた少年で、小柄ではあるがリスの如く敏捷で、走りつくらではいつも一等だつた。私は茂夫さんが一番好きで、一番多くこの少年を事を共にした。時々は店の駄菓子を盗んで来て振舞つてゐたが、惡氣の無い、人に好かれる少年であつた。先生のうちの信孝さんは私と同級生だつたが、殆んど一度も遊んだことがない。後に理想的な小學校教員になつたさうである。

私達祇園町組は大體結束が鞆固で、時には他の部落へ夜襲をして喧嘩をふきかけたこともあつた。勿論子供の世界のことで、大人から見ればくだらぬ興奮であるが、高等學校のストームだつて、まあ大體それに似たやうなものである。或る夜、十丁も二十丁も芋畑を飛び越え飛び越え敵を追つて行つた時、私は右の足の親指に何か刺らしいものを突き刺して、その後暫らく難儀をしたことがあつた。蛇の骨だとも私は思つてゐた。その頃、私は仕込杖を振り廻して指揮してゐた。誰に貰つたのか貰えてゐないが、中身には梵字が刻んであつて、朱を入れてあつた。弓も、この頃の遊び道具であつた。真直な櫻の木を切つて來て、皮をぬ

き、刀をこしらへることも誰からか教へられてゐた。庚申山の老松から厚い皮を剥いで來て、小舟をくり抜くこともした。雷の落ちたといふこの大きな松の木には、眞黒に焦げた處もあつた。天に沖する大木はお伽噺の天狗が住んでゐさうであつた。

祇園町のうしろの丘には段々畑があつて、薩摩芋が一面に葉を擴げてゐた。私達は或る日この畑で旗取りをして遊んだが、さしもに青々としてゐた芋畑が、夕方迄にはすつかり踏み荒されてしまつた。もう夕飯の時刻で、ぼつぼつ引揚げようとしてゐた時、突然、「コラツ、さいつだ、ひこの畑を荒したのは!」といふ聲が聞えて來た。見る百姓が鍬を振りあげて怒鳴つてゐる。驚くましいことか、それこそ蜘蛛の子を散らすやうに段々畑をびよんびよん飛んで逃げた。私も捕へられては大變だ、脚に任せて逃げ歸つた。翌日のこゝ、茂夫さんのお父さんが私の顔を待つてゐた。ばかりに、かう言つた、「保さん、いたづらも大概にせんさいけんぞな。きによ(昨日)芋畑を荒して、芋が出來んようにしてしもうたさうだが、うちの茂が捕へられて、怒鳴り込まれて弱つたぞな。これからあんなこさしちやいかんぞな。」そして、一體誰が大將だつたのだ、詰問されたが、茂夫さんは私に難儀のふりかかるのをかばつて、たうさう名前を言はなかつたさうである。この事件から私は茂夫さんを

絶対に信頼するやうになつて、何でも打あけるこさにした。今は田舎くさい親爺になつてゐる茂夫さん！私はせめて、もう一度西下して、ゆつくり昔を語つてみたいやうな氣がする。

芋畑を荒したのは本當に悪かつた。その畑の側へ行くのも恐ろしい氣がした。況んやそのお百姓の家の前を通るのは更に恐ろしかつた。私はも一つ悪いこさをしてゐる。先程述べたお宮の森で戦争ごつこをしてゐる時、深い壕を掘つてその中に數人が隠れるこさにした。今日でいふカムフラージュを施すために壕の上には木や草を積みあげた。壕の天井を作るためには、侃さん(タダシ)に、叔父さんのうちから板を持つてさせた、叔父さんは六(松)さんといふ質直な木挽さんだつた。侃さんは五六枚の新しい板を擔いで來た。三四人してこれを二つに折つて、見事な天井をこしらへた。

壕の中は土の香で一杯だつた。身體に當る壁や床には草や薙を敷いた。大喜びで壕の完成を祝したのはいふまでもない。ところが、軍事上のこさで侃さんと意見を異にしたためであらう。私はひざく侃さんをやつつけた。元來泣みそで有名な侃さんとのこで、すぐ家へ告げあげに歸つた。數人の幼な友達の中でこの子だけ、いつも鼻汁を垂れ、袖をかんかんにこわばらせてゐた。意氣地の無い子供の代表といふのが侃さんであつた。するま、間もなく六さんのおか

みさんが恐ろしい權幕でわれわれの塹壕へやつて來た。がみがみ言つてゐるこ見る間に、眼の前で屋根を剥がし、二つに折れた新しい板をかゝへて、私を睨めつけ、「この餓鬼大將め、何でこんな悪いこさをするのぢや。大事な板をへし折つてしまつて、それこそ、うちのおつさんに叱られるぞ」、と怒鳴つた。しかし、私はこれを聞いて却つて安心した。六さんは好人物で高名だつたからである。

級友の誰彼

小學校は、祇園町のお宮の前の坂を登り、堀切を出るすぐ向ふに見えてゐる。家から走つて行けば五分位だつた。校長先生は清家清太郎といふ口鬚のある立派な人であつた。私の組に不二さんといふ校長さんの娘がゐた。よく出来る人で、私が級長、不二さんが二番だつた。遊戯の時二人が向ひあつて手を繋いだりするこ、顔が眞赤になつて閉口した。同級生もくすくす笑ひ、先生も面白さうに笑つてゐられた。私はいつの間にか、五年生になつた。色の白い美男子の宇都宮鹿之助といふ變つた名前の先生が受持教師であつた。多分代用教員である。この頃尋常科が六年制になつたものと思はれる。四年生から五年生になつて、私も大分ませて來た。女の子遊びこしが既に妙に感ぜられるやうになつた。

副級長は宇都宮嘉壽太といつて、今は村の助役をしてゐる。お父さんもたしか助役であつた。私は學校がひける嘉壽太さんの家へ遊びに行つた。お祖母さんがいつも「東山」といふ芋の乾したのを兩手に一ぱい藏から出して来て、二人に分けて下さつた。何をするといふでもなかつたが、二人は仲良しだつた。嘉壽太さんの従妹の小浪さんといふのが、やはり同級生だつた、私が中學生の頃には村の病院の看護婦をしてゐた。夏休みに一度俵津へ來て一週間ばかり遊んでゐた時、白い看護婦服にはち切れるやうな肉體を包んだ小浪さんを見て、私は看護婦はいゝなと思つたりした。話に聞くと、間もなく結婚して數人の子をあげたが、離縁され、隣接の村へ再婚したところ、今度は幸運が舞ひ込んで今では縣會議員の奥様であるさうな。人の運命はわからぬものである。

同級に萬さんといふのが二人ゐた。一人は背の高い、五萬樂みたいな感じの子だつた。變な繪を學校へ持つて來て、先生に沒收され、引き破られてしまつた。も一人の萬さんは、昔私の家に奉公をしてゐた女の人の子で、水車屋だつた。時折呼ばれて遊びに行つたが、村の一一番端の遠い谷合ひだつた、水車がカタン、コトン、カタン、コトンと廻つてゐた。歸りにはいつも芋の粉を一袋貰つて歸つて來た。あの芋の粉園子！、もう、あの味を忘れてゐる。黒砂糖を

つけて甘からくして食べてゐたが、水車屋の萬さんは先年他界したさうだ。二人で大きな山桃の木にのぼつて、蛇や七分(三かけ)に怖氣ながら、種も一緒に飲み込んで食べ、歸る頃には口を眞赤にしたものだつた。あゝ、あの頃、桑の實もたらふく食べたことがあつた。紫色の口をして、手先も、着物も染め汚して歸つて來た。また青梅を食べて胃を痛め、七轉八倒して母をお醫者さんに走らせたこもあつた。金時(水あづき)を三四杯食べて夜中に吐いたりしたところもあつた。毎日毎日樂しい少年の日が續き、教科書なき開けてみたこともないばかりか、翌朝本包の所在さへわからぬことが多かつた。

一 夏を迪兄と共に

上灘村の家で病を養つてゐた迪兄は、その後健康を恢復して、村の小學校に教鞭をさるやうになつた。或る日母は「迪兄さんも近く教員の試験を受けるので、準備に忙しいさうな。兄さんのこゝだから、受けければきつと通るが、身體の方でひつかゝるのではないか、それだけが心配でも、免狀をさつて貰つたらお母さんも一安心」と私に語られた。それから間もなくのこゝ、迪兄から私を「一夏上灘へよこすやうに」と言つて來た。それを聞いた私は飛び上つて喜んだ。

私には親類が少かつた。その上、兄弟が離れ離れになつて生活してゐるせいもあつて、兄の側へ行くさいふこゝが大きな喜びであるのは勿論だが、前にも述べたやうに、上灘の叔父の家がすばらしく立派で、暮しも、芋粥ばかり食べてゐた當時の私にこゝでは豪奢に思はれたからである。

實際、叔父の家では冷飯草履なきはくこゝは思ひもよらぬこゝ、風呂も毎日缺かしてはならないといふ風で、何から何まで生活が變つてゐた。部屋こゝいふ部屋にはカーバイトの瓦斯が煌々と輝き、仕切の障子や襖も澤山あつて、しかも障子の棧なぎ細かい細工がしてあつて見られるばかりのものだつた。主な部屋に立派な額が懸つて居り、長押には鎗こゝか何こゝか古めかしいものが掛けであつた。唐草模様も美しい唐津の手洗がむやみに大きくて、小さな柄杓が端に危く載つてゐた。苔むした庭の石燈籠も二つ三つ、それが極めてお自慢のものばかり。また臺所はコンクリートで出来てゐた。今でこそ當前であるが、私の幼い頃にはそんな設備は町でも一二軒しかなく、極く珍らしいものであつた。ポンプは小學校にあるやうな瘦せこけたポンプこゝは大變な違ひであった。何か複雑な仕掛けのやうで、暇さへあれば動かしてみたくなるほゞ手應へのよいものであつた。その上、叔母の寵愛を一身に受けてゐる夫がゐた。いつも疊の上、いや座蒲團の上で寝てゐた。食物なきでも人間に

劣らなかつた。藝は達者だし、主人の顔色を見るこゝも人間以上であつた。

以上書きあげたこゝ、尙その他、當時の私にこゝで物珍らしくもあり、羨ましかつたこゝが、後日すべて私の憎しみの種こゝならうこゝは！。一夏のお客こゝして迎へられた時あこがれを以て眺めたものが、食客こゝして養はれゝば、忽ち憎惡の対象に一變して丁ふこゝいふやうなこゝは、極めて普通の世の習ひで敢て奇きするには足りないが、なきないこゝには、私はそれを餘りにも幼くして経験してしまつた。後で詳しく語るこゝであるが、この家の生活が私から、まだ殘つてゐた少年の純真素朴な性質を根こゝそき奪ひ取つてしまつたのである。

迪兄は無口であつた。そのため、私は迪兄に對して何か遠慮を感じざるなかつた。長く一緒に暮したこゝがなかつたからかもしれない。兄は林檎山の家に寝泊りして終日勉強してゐた。私は毎日下の叔父の家から弁當を運んだ。よく新聞をちぎつて丸め、その上に消炭を置いて煽いで火をおこしたものだつた。一つ蚊帳に寝たこゝもあつたが、山を下りて寝るこゝが多かつた。兄は何を勉強してゐるのか、私はわからなかつたが、それこそ寸時も本かれ離れたこゝがなかつた。兄は人から尊敬されてゐるやうだつた。山の男社達も「迪坊さん迪坊さん」と言つて、丁寧に

仕へてゐた。叔父も一日置いてゐたが、悪口屋の叔母まで、迪兄に對してはさうにもならなかつた。青白い顔をして、ランプの下でベンを走らせてゐる様子が今も瞼に浮んで來る。時々山の男仕達は噴霧器を背負つて林檎の林の消毒をしてゐたが、兄は物静かに色々な指圖をしてゐた。私は兄にくつついて三丁餘の林檎山を見廻つたこゝもある。山は名にし負ふ伊豫灘に面して、數里の沖合、青い海、青い空の一つにならあたりに青島といふ小さい島が見えてゐる。熟柿のやうな夕陽がボテリと海に落ちてゆく頃、私は少年の感傷に耽つた。水平線近くを軍艦が走ることがある。「兄さん軍艦だね」と呼びかけると、兄は「うん、駆逐艦だね」と答へてくれる。いつだつたか、「保！お前、赤穂義士の話を知つてゐるか」ときかれた。私は知つてはゐるが、話してほしいと言つたところ、「それぢや聞いておいで」と言つて蚊帳の中の私に四十七士の物語をしてくれた。「天川屋儀平は男でござる」といふのは、たしかその時覚えた言葉だつたと記憶する。いつまでも忘れ得ぬ迪兄との楽しい一夏であつた。

天才の死

果して迪兄は小學校教員検定試験に、體操を除いて、合格した。冬くの人の驚異でもあつた。しかし、そのころ既

に、胸の病は絶望のところまで進んでゐる。醫者である叔父も手の盡しやうなく、遂に迪兄はすべての計畫を擲つて、俵津村の母の許に歸つて來た。六疊一間の家を借りて、母子三人が枕を並べて寝た。母は毎夜海へ何か棄つてゐた。恐らく血のまじつた痰ではなかつたらうか！

天氣のよい日は、私は病める兄を小舟（或る大工さんが私に呉れた一間程の手製の小舟であつたが）に乗せて俵津の灣内は勿論、少し遠出さへもしたことがある。兄は釣もした。或る時瞬の狩江村の中學時代の同級生を訪れたことがあつた。その人は神主で小學校の教員であつたが、夕食の時私を見て、「この子か、さうか、君の弟か、曾根保といふのは、」と如何にも感心して兄に話をした。私の習字か繪が何かに出品された時の話らしかつた。三月も暮れようとする頃、私は山一つ越えて卯之町へ兄の薬を買ひに行つた。さみしい使だつた。病勢が思はしくなかつたらしい。高價な薬！私は道後屋といふ店でそれを買つた。そして序に俵津では求められない可愛いノナイフを十五錢で買つて歸つた。病床の兄の眼がナイフを見つけた。母から、「それだから、あんたには困るのよ」と叱られた。それから間もなく、「天才」と言はれた迪兄は二十三歳で、貧しい、しかし清らかな一生を了つたのだつた。

お寺へ弟子入り

狭い六疊の間、床の佛様の前で、母は村の和尚さんに「兄の遺言も申しますが、その子はお寺に入れて貰ひた。それが一番この子によささうだから、ご申しましたから、」と話してゐられたが、その翌日私は學校から歸るご直ぐお寺へ走つて行つた。私にしては、兄が亡くなつてさびしくもあり、母を慰める術も知らず、たゞ何ごなく何かの變化を望んでゐる時であるから、お經を習ふごとに非常に興味を覺えた。和尚さんには子供がなかつたので近所の子供を可愛がつてゐられたが、私も和尚さんは好きだつた。小さな經机の前に端坐して、先づお經の本を押しいただき、和尚さんが筆の軸でさゝれるごころを見ながら、おこをつけて讀んだ。

歸命菩薩那佛無染無着眞理趣　生生值遇無相教　世持誦不忘念弘法大師増法樂　大樂金剛不空真實　摩耶經如是我聞　一時薄伽梵成就殊勝　一切如來　金剛加持三摩耶智……

私の記憶力は満點だつた。翌日和尚さんを吃驚させるほど上手に讀めた。村役場の前の吳服屋で、或る夕方私は母からお經を包む小さいモスリンの裂地を買つていた。すばらしい蟲の食つた布切だつたが、私は今も紀念さし

て大切に保存してゐる。しかし、尋常科五年生になつて間もなくの頃、徳兄の反対にあひ、また迪兄の四十九日の命日に、不思議にも母の兄が急性肺炎で亡くなつたので、私のお寺通ひは中止されるに至つた。柱を頼む、褒められ者の長男を失ひ、今まで残つた唯一人の兄に先立たれ給ふた母上の心情は察してもなほ餘りあるものがある。叔父は徳島稅務署長から最近別子銅山の運輸課長に榮轉したばかりであつたのでその急逝は一層惜しまれた。一方東京の徳兄は、私がお寺へ通つてゐること、和尚さんに見込まれて近く高野山の中學林に入れてもらふ約束なきを聞いて、母に絶対に反対だと言つて來た。兄は當時麻布鳥居坂のメソヂスト教會の書記を勤めながら、夜學に通つてゐたが、兄弟が宗旨を異にするこことを嫌ひ、私を坊主にする位なら、東京へよこして貰へば、小學校をすませて、中學に入れてやつてもいいさいふのであつた。當時母は、俵津から四里ばかり離れた吉田町から月に一回巡回して來られるキリスト教の傳導師のすゝめで既に求道者となつてゐられたので、一も二もなく兄の意見に従はれるこになつた。和尚さんには相濟まぬこになつたが、私は愈々徳兄に引きこられる身となつた。

ハイディ

(第二十七回)

津田芳雄譯

さつきからびっくりしてペーテルの様子を見て
るたハイディが云つた。

「ペーテルは、この頃どうしてあんな風なの? ま
ろで『トルコ人』が後から鞭で追つかれられてる時
に、そつくりね」

「おほかた、何を身に覚えがあつて、誰かに鞭で
追ひ立てられてるやうな氣がするのぢやらう」

おぢいさんは答へた。

ペーテルは息もつかずに坂を一つ登り切つた。
それから、そこからも見えない所まで来るこ、立
ち止まつて、心配さうにあたりを見まはし、急に
飛び上つて、後から誰かに襟がみでも引つ掴まれ
たやうに、怖さうな顔をして振り返つた。いつ何
とき、フランクフルトのお巡りさんが、しげみの
後からやにはに掴みかかつて來るかもしけない
こ、びくびくしてゐるのである。不安が長びけば
長びくだけ、怖さは一層ひざくなり、一刻も心の
休まるひまがないのだった。

ハイディはおばあさんに、何もかもがきちんと
整頓されてゐるところを見ていただかうご、せつ
せこ小屋ちうを片付けはじめた。クララはその有
様を、面白さうにながめてゐた。
朝のうちかうしてすぐに経つてしまひ、もう
いつおばあさまがいらしてもいい様に、お支度

が出来上つた。子供たちはいゝ着物に着換へ、小屋の前に並んで腰をかけて、おばあさまをお待ちした。

おぢいさんはわざわざ自分で山へ行つて摘んで來た真書なりんごうの、目の覺めるやうな花束を子供たちに見せてやり、それから又、中へ持つて這入つた。花束は美しく朝日に照り映え、子供たちは歓びの聲をあげた。ハイディはまだおばあさまの姿は見えないかと、何度も飛び上つて見たりした。

やつこのここで、おばあさまの行列が、うねうねさ登つて來るのが見え出した。その順序は、ハイディの思つてたとほりで、まづ先頭が案内人、

その次ぎが白いお馬に乗つたおばあさま、一等うしろが、要心のよいおばあさまが山行きには缺かしたここのない毛布や肩掛け類を、しこたま背負ひ込んだ人夫。

行列はだんだん近付いて来て、たうさうてつべんまで來た。おばあさまは馬上から子供たちを眺めてゐたが、一人が並んで腰かけてるのを見る、急いで馬から飛び降りてびつくりして叫んだ。
「まあ、これはどうしたことですか、クララさん」

て寝椅子にねてるないです」

そばまで行き著かないうちに、又々驚いて手をひろげ、

「まあ、これがクララですつて？丸々さ林檎のやうな頬つべたをしてるぢやありませんか。すつかり見違へてしまひましたよ」

おばあさまが抱き寄せようとする、ハイディはすつゞ立つてクララに肩を貸し、一人で澄ましてさつさ歩き出した。おばあさまは、今度はびつくりを通り越して少し氣味がわろくなり出した。ハイディが何かでつもないことをもくろんで、いたづらをしてるにちがひないと思つたのである。

けれども、さうではなかつた——クララはほんたうに、ハイディさ並んで、まつすぐに、しつかりこ歩いてるた——二人の子供たちはくびすを返し、真紅な元氣な顔をして、おばあさまの方へやつて來た。うれしさに泣き笑ひしながら、おばあさまは駆け寄つてクララミハイディを代りばんこに抱きしめながら、しばらく口も利けなかつた。そばでその有様をこにこに眺めてるおぢいさんの姿に氣が付くと、おばあさまはクララの腕を

三つて一緒にそばまで行き、おぢいさんの手をこつて、うれしさに眼を輝かせながら、お禮を云つた。

「まあまあ、これは何といふ有難いことでございませう。みんなあなたのお蔭でござります。御親切な御世話、御心づくし——」

「なあに、結構なおてんとう様、山の空氣ですわい」

おぢいさんは、にこにこしながらさへきつた。
「わうよ、それからおいしいお乳のお蔭も忘れちゃいけないわ」

クララも口をはさんだ。

「おばあさま、三つてもおいしくつてねえ、あたし、おばあさまがびつくりなさるくらい、いただくのよ」

「わうでせうともあなたの頬つべたを見ればわかりますよ。すつかり見違へてしまひましたよ。こんなに元氣に太つて、背丈まで伸びたのですもの。ほんたうに思ひ掛けなくて、ことも信じられないので氣がしますよ。早速バリのお父さまに電報を打つて、すぐに呼びませうよ。みんなに喜ぶこでせう。何こも云はないで、不意にびつくりさせ

てあげませうね。——あの、電報はここからはもういふ風にして打ちますんでせう。人夫たちは、もうお歸り下さいましたでせうね」

「歸しましたが、御急ぎならば、ペーテルを使ひに出しませう」

おばあさまは、一刻も早くこのよしらせを息子に聞かせたかつたので、おぢいさんにお禮を云つて頬んだ。

おぢいさんは少しわきへ行き、指を口にあてて、一吹き高く口笛を吹いた。するごそれははるか上の岩にひびきわたり、間もなくペーテルが聞き付けて、駆け降りて來た。ペーテルは、てつきりお巡りさんに引き渡されるので呼ばれたのだと思ひ込んで、幽靈のやうにまつぶな顔をしてゐた。これが、何か書いたただの紙きれを渡されて、すぐにはデルフリの郵便局まで行つて來いと云はれただけだつた。おぢいさんはペーテルに澤山のお金を持たせてやるのは心もさないと思つたので、料金はあこで拂ふと云はせた。

ペーテルはまづ助かつたとほつさながら、紙きれを持つて飛んで行つた。おぢいさんが今呼んだのがその爲めでなかつたとすれば、まだお巡り

さんが來てゐないこゝだけは確かだつたから。

さてみんなは樂しく小屋の前のテーブルのまゝに坐つて、御飯をいただいた。おばあさまはこれまでの出來事をすつかり詳しく述べられた。おぢいさんがクララに、はじめは立つて見ることを、それからだんだん足を動かして見ることを、毎日少しづつおけいこさせたこと、山へ遊びに行く用意を整へてゐたら、急にその朝になつて、寝椅子が風に吹き飛ばされたこと、お花畠の美しさ、そしてそれを見たさの一念が、クララをはじめて歩けるやうにさせたこと、さうやつて、たうさう何もかもがだんだん順々によくなつて來たこゝなさ。おばあさまは驚きと有難さに感きはまつて、しょつちう口をはさむので、お話はする分長くしかつた。

「こんなこゝつて、あるのでせうか。夢ぢやないのですね。かうやつてお山の小屋に来てお話をしるるのは、ほんたうなんでせうか、あの丸々丈夫夫さうな顔をしてる子が、あれがこの間まで青い顔をしてゐた、うちの可哀さうな病身なクララなんでせうか。」

クララはハイディは、綿密に立てた計畫が當

つて、おばあさまがいつまでも驚いてゐるのが、大得意で、すつかり喜んでしまつた。

一方、ゼーゼマン氏の方でも、パリの用事をすませるこ、ひさつ不意に訪ねて行つてみんなをびっくりさせてやらうこ、おばあさまにも手紙一本出さないで、いきなり汽車でラガツ温泉へ行つた、ところが、ほんの二三時間前におばあさまが山へ登つたあさだつたので、すぎに馬車をやさつてデルフリまで行き、そこからの登り道が一等長くてゆづくり景色が眺められるだらうと思つて、そこれから歩いて登ることにした。

こころがその道は、思った通り長いこゝは長かつたが、實に險しくて苦しかつた。ゼーゼマン氏はざんざん登つて行つたが、いくら行つても、ハイディに何度も聞いてゐる坂の途中にあるいいふペーテルの小屋らしいものに行き著かなかつた。人の足跡が勝手な方向にさゝにでもついて居り、ゼーゼマン氏は道を間違へたのではないかと思つてあたりを見まはし、誰か訊ねる者はゐないかと探したが、人影ひゞつ見えなかつた。

× × ×

國民學校と國民幼稚園

——文部省講習會講述速記——

倉 橋

惣

三

國民學校と國民幼稚園（二）

—文部省講習會講述速記—

倉橋惣三

（二）序說

（二）教育審議會

只今我國の普通教育は劃期的な時機に際して居ります。いよいよ國民學校が明年の新學期から始まるのであります。御承知のやうに我國の小學校令は明治三十三年に定まりましたもので、その後多少の部分的變更はありましたけれども、根本の精神、殊にこの精神を書き著はしました小學校令といふものに於きましては、そのまゝで參つたのであります。これは國家の教育令といふものは永い先を見越して出來て居るものでありまするし、またその書いてありますることも、そんなに細かいことが書いてある譯でありませんので、從來の小學校令が今日の時勢に於きまして、必ずしも根本的に相反して居るものとは思へないのであります。併しながら、その小學校令が發布せられましてから後、我國のあらゆる方面の文化は非常に進んで居ります。殊に世界の情勢内に於ける日本の位置といふものは殆んどその當時考へられなかつたほどの間に變つて居るのであります。その結果、小學校即ち國民教育の根柢たる普通教育は、その精神に於きましても、その實際に於きましてもそれが形に現はれました制度の上に於きましたが、殊にそれを書き著はしまする言葉のはしりに於きましても、是非變へられなければならんといふ意見は相當以前から出て居りました。個人的にさういふことを強調せられる識者は澤山にありました。またさういふことが一つの輿論の形をこつて來たと見得るところもあつた位であります。併しながら教

育制度の問題はさう容易に變へるべきものではないのであります。今日に及んだのであります。

ところが、これが政府の問題として具體化されて參りましたのは、内部のことは別と致しまして、外に現はれましたことから申しますと、昭和十二年五月に文政審議會といふものが勅令で出來まして、その審議會によりまして、教育の制度の改革を内閣總理大臣がこれに諮問するといふ形で具體化されたのであります。ところがその後内閣も變り、又教育のことは更に大仕掛け、もつと全般的に考へらるべきものであるといふところから、同じく十二年七月に教育審議會改めるござになりました。そして、畏くも陛下の上諭を仰ぎまして、同年十二月の勅令となり我國の教育全般の改革について考へる恒久的諮問機關が出來たのであります。即ち國家は本腰を入れまして、本掛りになりますて、國の教育制度を變へるために、先づさういふ大きな審議會を作り、識者を集めて研究させようといふことになつたのであります。

これはさういふ譯でさうなつたかといふここにつきましては、素より細かい教育行政のお話はこゝで申上げる必要はないと思ひますが、一體教育の改造といふここには、いろいろのことが理由になるものだとき考へられます。たゞへば、その一つは教育學說といふものが、だん／＼進歩して參りまして、その學說を根據として教育の改造が試みられるといふことも一つであります。これは慥かに大事なこの一つでありますて、教育といふものは理論的には教育學說を根據と致して居りますから、非常に有力なる教育學說が出ますれば、それに基いていろいろ從來の教育を變へて行くことは當然その必要が起るのであります。然しがら我國に於ける今日の教育改造の發端は、さういふ教育學說が根據になつて居るといふのは少し違ふと思ひます。次にまた、教育學說はすつと違つた形のものでありますが、誰か特別なる有力なる人が識見として教育を或る方向に變へて行かなければならんといふことを確信しまして、その強い力をもつて自分の信ずる、或は恐らく自分の必要とする方向に教育を引つぱつて行かうとするやうなこゝも歴史上にあることであります。我國の今度の教育改革は素よりさうした譯のものではありません。然らば我國の今度の場合何が元になつて居るのであるかと申しますと、言葉は充分でないかも知れませんが、日本の國自身の自覺、及び日本の國が世界に發展し來りました新しき位置、斯ういふこゝによりまして教育改造の必要が緊急になつて來たと、斯う考へられると思ふのであります。

素より教育學說といふものも大事なものであります、或る學者の學問の意見といふよりも、國自體の自覺、これはもつと大きなものに相違ないのであります。或はまた誰かの主義主張といふこゝも力強いものであります。けれども、國が世

界の情勢下に於きまして探つて行かなければならない方向といふことは、それよりも大きなものであります。殊に私共が興味、ご申しましては不眞面目のやうであります。或る感じを起させられますことは、教育審議會を作らうといふことが内閣の閣議に於きまして決りましたのが十二年七月六日のことであります。蘆溝橋の事件が發生しましたのが七月七日の夜半であります。即ち教育審議會を作るといふことを國が決定しましたその翌日、この支那事變の端が發生して居るであります。これはいろいろのことを考へさせられます。若しこれが逆になつて居れば話は非常にてつさり早いことになりますが、然し若し逆になつて居りまして蘆溝橋の事件が起り支那事變が發生して、そこで直ぐに教育改造が發生せられるといふのでは餘りに急ぎ過ぎた形になるかも知れない。勿論そんなことはありませんでござりません。あの事件はあそこに端を發しましたご致して、今日日本が東亞に於て、従つて世界に持つて居ります位置といふものが、もう既に、所謂風雲として明かに捕捉されてゐた時であります。そこへ教育審議會といふものが出來ることに決議されたといふ、斯ういふ形になるのであります。更にその新事態が風雲として捕捉されましたのみならず、果せるかなご假に申しませう。一方に教育審議會を作る必要が具體化されるご殆んど同時に、事態はこの方に表面化されて來たのであります。その結果教育審議會が七月に決議せられ、十二月にその官制が發布せられるまでの間にも、事態はひし／＼急速に展開して來てるるのであります。

(二) 國民教育刷新と幼稚園

斯ういふことを、極めて粗雑であります。考へて見ましても、今度の教育刷新といふものは、實に或る一つの學問的基礎であるとか、或は一つの個人的主張といふやうなものではなく、日本そのものがどうしてもさうならなければならぬ勢ひの下に斯うなつたのであるといふことがしつかり考へられるのであります。明治三十三年以來、他の教育はそれから後のこゝであります。小學校のこゝについて申して見ますならば三十三年以來今日まで、だん／＼濃厚になり來りました大勢は、こゝまで伸び進んだと言へると思ふのであります。こんなこゝはこの幼稚園講習のお話としては少しばかり懸離れたやうなこゝにも聽えるのであります。若しも今度の教育刷新といふものがそれほど國としての大きなこゝを基礎として居ないのでありますならば、我々はこの問題をそんなに深く考へなくともいいかも知れません。然し斯ういふ事態のものでありますから、今度の教育刷新といふものは教育上特別なる分野に於ての開拓といふよりも、日本がごつちに向

かふかこいふ事を元にして居るのであり、従つて逆にこの教育刷新によりまして、日本の行かうとするところを考へさせ來るこいつてもいゝ大きな問題になるのであります。又そこまで考へました時に、この教育刷新がお互ひの幼稚園といふものに對しましても、決して離れた問題でないものであるこいふことを、充分に考へさせられるこことになります。或る教育學說で小學校といふものは斯ういふやり方にすべきである。中等教育は斯ういふやり方にすべきであるこいふやうなこことが試みられましたこことならば、幼稚園は暫くその闇外であつてもいゝかも知れませんが、國そのものゝ自覺、國そのものゝ世界的情勢が變つて来るこしますならば、國民生活全體が同じ方向に動かされて居るのであります。或る方は國民學校は小學校のことと幼稚園も當然これと同様に動かされて來なければならんといふこことになるのであります。或る方は國民學校を通じて日本の教育の行くところを知り、従つて幼稚園もその方向で考へなければならぬといふ意味に於て、今日の問題に致した譯なのであります。

そこで今回の私のお話は、その國民學校といふ、近く來年四月から實現しますところの教育刷新の方向を片つ方に眺めつゝ幼稚園の問題を考へる、斯ういふことに致したいと思ひます。大學の改造もあります。中學校の改造もあります。けれど共、さういふやうなものゝ幼稚園を比べるこいふことは少し縁が遠過ぎるやうであります。國民普通教育、國民初等教育、國民學校の場合に於きましては、そこに實現されようとする事柄は直ぐ幼稚園のこことを考へるに最も手近にある指導原理になるこ思ふからであります。更にさういふ根本的の立場の外に、今日改めて申すまでもありませんが、幼稚園で今日我々が教育して居ります子供は、言ふまでもなく、一年、二年の後には、その國民學校に入るものでありますから、その意味から致しましても、國民學校に關する理解は幼稚園教育者の最も充分に持つて居なければならないこことであります。即ち皆様が保育して下さいます子供達の學校的行方は國民學校を決つて居りますから、その行くところがどんなところであるかといふことを知るこことなしに、その前の教育を引受けろといふことは出來ないのであります。即ち幼稚園といふものゝ今日の本質を考へる意味からも、又園児達がやがて行く國民學校といふ實際上の功用から申しましても、こゝで國民學校のこことはお互ひに充分研究して置かなければならん問題だと申し得るのであります。

但し皆様は既に國民學校のこことにつきましては、私から今申上げた位の必要理由は疾くに御承知でありまして、従つて

國民學校の研究は既に充分になさつておいでになることを疑ひません。さうしますればそれを基礎としてすぐ幼稚園の問題のお話に入つて行けばいい譯であります。私としてお話の順序上國民學校のことを一應こゝで簡単ながら考へて置きましたして、さうして、それに次いで幼稚園のことを考へて行くといふやうに致しません。この話の段取りがつきませんので、さういふ順序を探らして戴きます。併し只今申上げましたのは大多數の方に對してお断りしたのであります。中にはまだ國民學校のことは餘りお研究になつて居ない方がないでもないかも知れません。これは毎日の保育が御多忙であります。そこまで行く時間がないを仰しやる方もあるであります。或は來年のことである。徐ろにやればいゝ、國民學校の先生達さへ、この夏初めて文部省の傳達講習を受けるのではないか、幼稚園はそれから後でやつた方が禮儀上からもいゝではないか、といふ斯ういふ御意見があるかも知れません。或はもつと言つて見ますならば、從來に於きまして、明治三十三年に出ました小學校令を幼稚園の先生で御承知ない方が時々あります。日本の教育はさういふやうなものであるかといふことを幼稚園の先生に伺つて見ます。それは何んだか判つて居るやうな氣がするといふことで済んで居りまして、小學校令第一條さへも御承知ない方が、これは少し例外の人であります。それで、小學校令はもう來年から要らなくなりますから、これを憶へなかつた人は甚だ先見の明があつたと申し得るのであります。(笑ひ聲) 幸にさういふものを持つていらつしやらなければ、新國民學校のことは充分にこゝで御研究願ひたいと思ふのであります。

さういふで、差上げてあります刷物についてだん／＼お話して参りますが、今申上げました如く教育審議會といふものが先づ出来まして、我國の教育全體のことについていろいろと研究され、今日も續いて研究なさつて居ります。その中で先づ一番最初に答申せられたものが、國民學校、師範學校及び幼稚園に關すること、これであつたのであります。その答申案の中から政府は——即ち文部省は——先づ國民學校のこととを先に取上げまして、これを實現する段取りにしたのであります。教育審議會は總理大臣の諮詢に對しまして意見を答申するだけで、それを實行する機關ではありません。實行するのは文部大臣であります。その文部大臣が先づ實行しようとしてゐるのがそこなのであります。師範學校の方は、勿論教育審議會の答申として大に尊重されて居りますが、いつから實現といふところまでにはまだ形がましまつて居りません。一般の議會に於きましては文部大臣は議員の質問に對しまして「師範學校のことは大いにやる」とお答になりましたけ

れ共、これは豫定のお答でありまして、まだ具體化されて居るに到りません。幼稚園の問題も同様に具體化されるに至つて居りません。併しながら兎に角總理大臣に直屬し、上諭を仰いで出来ました教育審議會は國民學校を中心として、その教師を養成する師範學校、その國民學校の基礎をなす幼稚園といふ意味に於きまして、この三つのここに就てはつきりして意見を答申されて居るのであります。その答申は更に特別委員會委員長田所美治氏の経過報告が發表されて居ります。これが我々が仍つて以て今度の國民學校の新制の行方を知る元になつて居るのであります。さて、こういふことが言はれて居るかと申しますと、一寸その答申の一一番初めのところを讀んでみますならば、斯ういふ言葉が使つてあります。

國運未會有ノ伸張ニ伴ヒ、東亞竝ニ世界ニ於ケル我ガ國ノ地位ト使命トハ愈々重大ヲ加フルノ秋ニ當リ、教學ノ本旨ニ則リ、時代ノ要望ニ應ジ、教育ノ内容及制度ヲ全面的ニ刷新セんガ爲先づ國民全體ニ對スル基礎教育ヲ刷新シ其ノ擴充整備ヲ圖リ、新學制ノ根柢ヲ確立スルト共ニ克ク皇國ノ負荷ニ任ズベキ國民ノ基礎的鍊成ヲ完カラシムルコト最モ根本ニシテ極メテ緊要ノ國策ナルヲ認ム。依テ茲ニ義務教育ヲ八年トナシ、其ノ内容ニ刷新ヲ加へ、皇國ノ道ノ修練ヲ旨トシテ國民ヲ鍊成シ、國民精神ノ昂揚知能ノ啓培、體位ノ向上ヲ圖リ、產業竝ニ國防ノ根基ヲ培養シ、以テ國力ヲ充實シ外ニ八紘一宇ノ肇國精神ヲ顯現スペキ次代ノ大國民ヲ育成センコトヲ期セリ。

之れは國民學校、師範學校及幼稚園に關する答申の全體に通ずる總説であります。言ふまでもなく、幼稚園も此の態度で考へられてゆかうとするのであります。

二 國民學校概觀

(一) 國民學校に關する要綱

幼稚園に關する細いことに就きましては後の時間でまごめて申上げますが、然らばさういふ態度で出來ました國民學校といふものはさういふものであらうか。それを先づ考へて見る必要がありますが、それは今の答申案の中に國民學校に關する要綱といふものがありまして、そこで明かに示してあります。讀んで見ます。

一 國民學校ノ修業年限ヲ八年トシ之ヲ義務教育トスルコト

これは申すまでもないことはあります、永い間の日本の義務教育を四年から六年、六年から八年へといふ問題がこゝで初めて決りましたのであります。然もその決りましたいふことは四年では足りないから六年にしよう、六年では足りないから八年にしようといふ、單に年限の増加といふだけの方から決つて來たといふよりは、小學校が國民學校に變りました實質的改造に伴つて、義務教育が八年になつたといふところに意味が非常に深いのであります。六が八に増したといふだけぢやなくして、國民教育そのものが國民學校の名に於て行はれる時に八年を必須とした、といふ斯ういふ意味に解釋すべきであります。

二 國民學校ヲ分チテ初等國民學校及高等國民學校トシ、初等國民學校ノ修業年限ヲ六年、高等國民學校ノ修業年限ヲ二年トスルコト

これは形に於ては、從來の尋常小學校六年、高等小學校二年と別に變りません。然し唯年限をこうしたいふのではなくして、實質の方から來たのでありますから、この意味もまた深いことになるのであります。

初等國民學校ノ教科ト高等國民學校トスルモノヲ國民學校トスルコト

即ち今日の尋常高等小學校といふ形のものですがその全體が國民學校なのです。その中が便宜上分れて初等國民學校だけの學校ともなり、高等國民學校だけの學校があり、それが一緒になつてゐるものが完全なる國民學校といふことはあります。即ち六年で先づ日本の國民普通教育は終つて、更に二年の高等科があるといふことは全く違つて居ります。

三 保護者ハ児童六歳ヨリ十四歳ニ至ル迄之ヲ市町村立國民學校ニ就學セシムベキモノトスルコト

これは申すまでもないことであります。その次が特に内容的に大事なのであります。

四 國民學校ノ教育ハ左ノ趣旨ニ基ツキ國民ノ基礎的鍊成ヲナスモノトスルコト この中を二つにしまして

(一) 教育ヲ全般ニ亘リテ皇國ノ道ニ歸セシメ、其ノ修練ヲ重ンジ、各教科ノ分離ヲ避ケテ知識ノ統合ヲ圖リ其ノ具體化ニ力ムルコト

(二) 訓練ヲ重ンズルト共ニ教授ノ振作、體位ノ向上、情操ノ醇化ニ力ヲ用ヒ、大國民ヲ造ルニ力ムルコト

この二つの項目を第四項として居るのであります。その四項と並びまして第五項は、

五 國民學校ノ教科ハ前項ノ趣旨ニ從ヒ、之ヲ縱ニ統合シテ別紙記載ノ通トシ、各々其ノ統合ノ精神ニ徹セシムルト共ニ一面其ノ特色ヲ發揮セシメ、窮極ニ於テハ是等ノ教科ヲ國民鍊成ノ一途ニ歸セシムルコト

斯ういふことであります。これは即ち國民學校の教育といふものゝ本旨をこゝに示して居るのであります。從來の小學校の本旨と、少くもその主張するところと變つて居るのであります。

そこで斯ういふ教育審議會の答申案を元にしまして、文部省が國民學校の教則を定めつゝあるのでありますが、これが定まりましたならば國民學校令と國民學校令施行規則とが發布せられるところになるのであります。これはまだ發布されて居りません。目下その手續中であります。發布されましたならば直ぐに御覽を願ひたいと思ひますが、發布されでは居りませんけれども、本年夏 文部省が小學校の先生方に國民學校につきましての傳達講習を致すにつきまして、まだ國民學校令とが施行規則とかいふ形にはなつて居りませんが、躊躇さうなるであらう同じ内容を示して居るのであります。即ち我々は只今のところその文部省が示して居りますところに従つて我國の國民學校は斯ういふ法令及び施行規則によつて行はれるものといふことを考へるところが出来るのでありますから、それを元にして更に申上げて見ますと、只今教育審議會の答申として申上げました第四項、第五項の内容をまごめて、國民學校の本旨といふものが斯ういふ風に書き著はされて居るのであります。これは短いのでありますからお書取を願ひたい。

皇國ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スコト

斯ういふのであります。恐らく國民學校令といふものが發布せられましたならば、その第一條にこの言葉が載るのであらうと思ひます。即ち多分斯ういふことなのであります。

國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スコトヲ目的トス

丁度小學校令第一條に

小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シ云々

と書いてありました、あれが書き改められてかうなるのであります。

(二) 國民學校の教育本旨と小學校令第一條

そこでこれを眺めますと、小學校令第一條とは大變に變つて居ります。小學校令第一條は申上げるまでもありませんが、テ本旨トス

斯う書いてあるのであります。この二つを比べて見ますと、いろいろ違つて居る點が擧げられるのであります。私が申すのではありません。

(イ) 小學校令には「國民教育ノ基礎ヲ」與へるといふ事は書いてあります。勿論大切な内容として書かれていますが、その「國民教育ノ基礎」を與へるといふ事は教育といふものが何を根本の據りとして打立てられるかといふ事としては必ずしも強く擧げてゐなかつたのであります。或る人は斯う考へませう。「それは言ふまでもない」として、日本の國民教育たる小學校が日本の國是を本位として、その上に打立てられて居ることは言ふまでもない事だ」と斯う言ふであります。我々もまたさう考へ來つたのであります。少くもそれがはつきり、從つて強く書き者はされて居なかつたのであります。これに對しまして今度のは、教育内容に入ります前に、國民學校の教育そのものが「皇國ノ道ニ則リテ」出來て居るものであると、斯う強く言つて居るのであります。「皇國ノ道ニ則リテ」出來て居る。それが一切の元になつて居る。斯ういふ譯なのであります。

(ロ) それから普通教育をその内容とするといふことに於きましては前記變りません。「普通教育ヲ施シ」といふことは前から擧げてあるのであります。唯小學校令の時に常に問題になりました言葉は「生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クル」といふ言葉が使つてありました。初めてこの小學校令を書いた時には「授クル」といふ言葉をそんなに重く考慮して使つたのでなかつたかも知れませんが、教育といふものゝ考へ方がだんく變つて参りますにつれて「授クル」のいふことは、實は本當に教育の作用を完全に現はして居るものでないのみならず、そこに間違ひが起る因であるといふやうなことも考へられて居りました。實際家から言へば「授くるに亦授け方あり」と斯う言つて、うまくやつて居つたのでありますけれど、然し出來得べくんば、この誤解の出來易い言葉を避けたいと始終考へて居りました。これは明日あたりのお話と關係して参りますので申上げるのであります。一寸その片鱗だけを洩らして置きませう。

「授クル」といふ字があつたために、小學校は授くる所、幼稚園は授けざる所、といふこんな簡単な話がよく行はれて居

つたのであります。或はまた小學校は授くる所、幼稚園は授けざる所といふだけならまだいゝが、小學校は授くる所、小學校で授けて居る。幼稚園も教育である。保育項目を授けるといふやうな誤謬が起らんとも限らなかつたのであります。「小學校的な幼稚園」といふ言葉がありました。或はいろいろな意味がありませうが、畢り授ける所であつたのであります。そうかと思ふと「私の所ではねエ、改良して授けんこゝにした。幼稚園の面目を發揮して授けんこゝにしてしまつた。だからこつちは元手も要らんし樂でいゝの」。といふやうなこゝも生れた。(笑聲) こゝろが今度の國民學校は「授クル」といふ字を捨て、「施ス」といふ。この「施ス」といふのは「授クル」といふ、こつちからあつちへ授けるといふのを嫌つて、普通教育のそのものが國民學校全體の中で施されるといふのです。さうするご小學校は施す所、幼稚園は施さゞる所、こんなことが今度言へなくなります。まごくするご國民學校の方が幼稚園の豫て主張して居りますことを法令的に實現して行かうといふ勢ひを示して居るこゝも言へるのであります。

(八) 次に、「國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スコト」こゝに極めて重大なる問題があります。それは「普通教育ヲ施シ」といふことと「國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スコト」こゝが繋つて居るのであります。前の小學校令では、どうかするご「普通教育ヲ授ケルコト」「國民教育ノ基礎ヲ與ヘルコト」「道徳教育ノ基礎ヲ與ヘルコト」こんなやうなことが並んで居つたやうな意味合もないではなかつた。今度は皇國の道に則つて普通教育を施せば即ち國民の基礎的鍊成になるのだといふことに、ずつこ一ト息に讀まるべきものになるのであります。これをもつこ突込んで申しますならば、小學校の中にいろいろの目的が羅列してあつた、といふ譯ではありますまいが、まあ假に強く言つて見ますならば、その一つが實現しただけでも小學校教育はその目的を一部分達したといふこになつたかも知れない。三分の一達したこか、二分の一達したこか、何んとかいふこになつたかも知れない。ところがこゝでは「國民ノ基礎的鍊成」をするのでなければ、「國民ノ基礎的鍊成」の効果を擧げるのでなければ、國民教育は完からずといふこになるのであります。而して單に普通教育をイギリス流に施したのでは效がありますまい。アメリカ流に施したのでは効がありますまい。或は何處の國民性にも基くこゝなくして、單に人生の普通教育を施したのでは効はありますまい。そこで「皇國ノ遺ニ則リテ普通教育ヲ施ス」といふこゝが意味深くなつて來るのであります。

「普通の知識技能を授ける」といふこゝは何處の國でも、何處の國民性でも必要なこゝであります。それはその普通の

知識技能を有する人が出来るだけであつて、國民が鍊成されるといふ譯にはならん。そこで日本の教育は日本の皇國の道に則つて萬事やるから、従つてその結果は單なる道德人、單なる知識技能の所有者、或は單にそれらの一部として持つて居る國民教育といふものよりも、もつゝ根本的な、本質的な意味に於て國民的鍊成が出来るのである。ミ斯ういふことをはつきり示して居るのあります。これはすら／＼お読みになれば何んでもないのあります。前的小學校令を比べてよく玩味して御覽になれば、その言はうとして居る言葉使ひの苦心からも、今度の教育改革が何處を狙つてゐるか、成程さういふ譯ならば國がこの非常時に於て、非常に金の要ります時代に於て非常に金をかけても、それを急いで敢てるさいふのは、成程さういふ根本的の譯があるかさいふことを充分思ひ到られるのであります。

(II)、もう一つこの中に「普通教育ヲ施シ」といふ、教育の種類の名稱としては「教育」といふ言葉が使つてあります。職業教育を施すのではない。高等教育を施すのではない。専門教育を施すのではない。普通教育を施すのだといふ意味で使つてあります。専門教育を施すのではない。普通教育を施すのではない。普通教育を施すのだといふ意味で使つてあります。この「鍊成」といふ字は、これは國民教育の至る所で出て来る言葉であります。けれども大きな問題になります。「鍊成」といふことは、その言葉の出典であります。或は専門的の字引を引いて見て初めて分るような意味いかは私はよく知らないのであります。しかし、「教育」を「鍊成」を使つて居る心持ちだけをこゝで言つて見ますならば、勿論「鍊成」は「教育」の一つであります。小學校が國民學校に變つたから「教育」もやめたといふのでは決してないのです。勿論「教育」であります。然しながら「教育」といふ中にはいろいろの要素が入つて居ります。殊に先刻一寸申しました教育學説的立場から申しますと、相當に「鍊成」といふことをせざる「教育」もあり得るのであります。これを假に自由主義といふ言葉で代表させられませう。伸びるがまゝに伸ばして行く。これこそ眞の教育なりといふものは、伸びるものを伸ばさないといふことが非教育的であるといふことを、そのまゝひつくりかへした言葉として味があるのであります。それだけでは足りないといふことがこゝには特に強めて言つてあるのであります。即ち個人はそれ／＼の特質をもつて、その發達を遂げるであります。伸びるがまゝに伸ばして行く。これこそ眞の教育なりといふものは、伸びるものを伸ばさないといふのが、國民教育としては、勿論、それを抑えるのでもなし、無視するのでもなし、それをひつこ抜くのでもないが、國民教育の國民教育たるの本質に於ては國民的に鍊成をしなくてはいかんといふのであります。即ち人間本來性の發達も素より尊重するのであります。これを無視せよとは書いてありませんが、然し國民教育をし

ては假にもそんな方にのみ委されて行つたのではいかん。さうしても「國民ノ基礎的鍊成」がされなくてはならんといふことが強調されてあるのであります。

これで今日のお話を終りたいと思ひますが、要するにこれだけのことを御承知下されば宜しい。申上げましたいろいろの細い點は、これから後に幼稚園に關する限りに於て度々引用致しますから、そこで又お考へ下さるとして、今日のお話としては、今度の教育刷新が如何に國としての大きな事件であるかといふこと、しかもそれが教育全般に亘つて同一精神から改造されて行くのでありますから、今現に實現されて居ります國民學校の形に於て、精神に於て、同じく幼稚園の問題を考慮することが必要であり、又合理的であり、可能でもあるといふ點であります。更に國民學校といふものが、その教育本旨に於きまして、大體さんなものであるかといふことを、假に前の小學校令第一條と並べて考へて見た時に凡そ察せられるところはどうか。こんなやうな點を主としたのであります。勿論小學校程度の教育が、就學前の教育の場合と、その方法の實際に於て同じではありません。しかし、國民學校も幼稚園も今度の教育刷新の上に考慮せられる限りに於きましては、その根本精神たる大きな原則には離れません。學齡後と學齡前とは、その實際のやり方はさう違ふかといふことは、之れからも大いに尊重されなければならないのです……が……どう違ふかといふだけで研究が決るのでなくして、さう違つて居るにしても、國民教育たるの本旨に於ては同じところを失つてはならんといふことを、常に併せ考へられなければならんのであります。そのことを考へる準備のやうな形で、今日はこれだけのことを申上げて置きました譯であります。

尙ほ念の爲め申したいことは、此のお話が、國民學校の制定に便乗して、幼稚園も亦さいつた風のことではないことをです。前にも申した通り、教育審議會の第一答申が、國民基礎教育の刷新を目立てて、國民學校を中心とし、その教師の方面と、その兒童の方面とを、不可分離の問題として同一時に取り上げてゐるのです。すなはち、この三つは別々の三つの問題でなく、一聯一貫のものなのです。政府はその中の國民學校刷新を先づ實現することにしましたが、他の二つが併せ刷新されなければ、眞に國民學校の刷新が完成せられない譯なのです。これは、われわれが幼稚園關係者だからいふでなく、今回の國民基礎教育刷新そのものゝ主張なのです。即ち此のお話も、國民基礎教育刷新の必然の話なのです。

倉橋惣三著

育ての心

一、五〇〇、一四

定價

送料

東京、神田區駿河臺三丁目六

刀江書院

倉橋惣三著

幼稚園保育法眞諦

二、八〇〇、一六

東京、神田區神保町一丁目六七

東洋圖書株式會社

倉橋惣三著
新庄よし三共著

日本幼稚園史

三、八〇〇、二〇

同上

幼稚園雑草

二、五〇〇、一四

東京、日本橋區、大傳馬町

日本幼稚園協會編

幼兒に聽かせるお話

三、八〇〇、一四

同上

幼兒の樂しむお話

二、八〇〇、一四

同上

日本幼稚園協會編

日本幼稚園協會編

幼兒發達検査

一、〇〇〇、八

東京、神田、神保町

フレーベル館

幼兒性行評定尺度

一、〇〇〇、二

淡路圓次郎著

倉橋惣三監修

保育叢書

菊池ふじ子著
徳久孝子著
幼兒のための

人形芝居脚本

一、〇〇〇、二

同上

及川ふみ著

幼稚園の手技製作

一、〇〇〇、二

同上

膳眞規子著

自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二

同上

實驗保育學

一、〇〇〇、二

同上

和田實著

會長

東京女子高等師範學校校長

主幹

東京女子高等師範學校教授

附屬幼稚園主事

倉橋惣一

日本幼稚園協會規則

第一條 本會へ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖
ルヲ以テ目的トス

第二條 本會へ日本幼稚園協會ト稱ス

第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園

ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾

五錢ヲ離出スヘシ、會員ハ無料ニテ本

會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業

ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ク

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事

業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒ

チ客員トナスコトアルヘシ

第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本

會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、

モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアル

第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。

但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得

第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ

一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査

二、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

三、更スルコトヲ得ス

一、會ノ開催

(毎月一回)

二、雜誌發行

(毎月一回)

三、保母就職及招聘

(毎月一回)

四、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メ

(毎月一回)

五、タル事件

(毎月一回)

六、役員ヲ置ク

(毎月一回)

七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

二十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

三十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

四十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

五十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

六十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

七十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

八十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

九十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十一、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十二、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十三、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十四、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十五、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十六、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十七、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

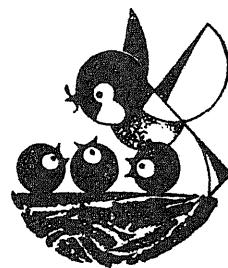
一百二十八、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百二十九、會務ヲ總理ス

(毎月一回)

一百三十、會務ヲ總理ス



ルベーレフ發行行書目

保育叢書 倉橋惣三先生監修

倉橋惣三先生監修

四六判總布本
各冊定價金一圓
送料六錢

第一編

幼兒の形人芝居脚本

菊地ふじの先生共著

第二編

自然物おもちゃ

德久孝子先生共著

第三編

幼稚園の手技製作

膳眞規子先生著

第四編

實驗保育學

及川ふみ先生著

幼兒性行評定尺度

淡路圓治郎先生著

定價金一錢圓
送料六錢

幼兒發達検査

淡路圓治郎先生著

定價金一錢圓
送料六錢

農繁託児所の經營

倉橋惣三先生著

定價金一錢圓
送料六錢

幼兒發達検査

倉橋惣三先生著

定價金一錢圓
送料六錢

幼稚園律動遊戲曲譜集

高市慶雄先生著

定價金一錢圓
送料六錢

附記憶感覺競争遊戲・動作篇

構成したる幼稚園遊戲の保育要諦

大坂市幼稚園共同研究會第六區編

第一卷 動作集(金三圓)・第二卷 曲譜集(金二圓)

子供の舞踊 石井漠先生著

全定價金二圓五十錢
送料金一錢圓

シルエットの作り方 鈴木重章先生著

全定價金二圓五十錢
送料金一錢圓

株式会社レバーレフ 食官

番二六六三(33)話電・二町保神・田神・京東社本
番七二八三
番八三九一(24)話電・五町後備・區東・阪大店支